HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	低地ドイツ語の動詞統語論
Author(s)	覚知, 頌春
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15531号
Issue Date	2023-03-23
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k15531
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89564
Type	doctoral thesis
File Information	Nobuharu_Kakuchi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2022 年度博士論文

低地ドイツ語の動詞統語論

文学研究科　　言語文学専攻

指導教員　　清水　誠

学生番号　０５１７５０１３

氏　名　　覚知　頌春

はじめに

本稿は、低地ドイツ語の動詞統語論を扱った論文である。低地ドイツ語研究では、従来、音韻・形態的な研究に重きが置かれることが多く、統語的研究は長らく周辺的に扱われてきた。数少ない低地ドイツ語の伝統的な統語記述にも、問題がない訳ではなく、例文の列挙とその簡単な説明のみの記述に終わっていることが多い。こうした傾向は近年改善されつつあり、Berg (2013)、Weber (2017) といったアンケート・コーパスによる経験的データに基づいて低地ドイツ語の統語現象を扱った書籍が出版されている。本稿の主な目的は、コーパスやアンケートといった経験的調査に基づき、低地ドイツ語の動詞統語論を記述することである。

本稿の構成は、以下の通りである。1 章では、低地ドイツ語の歴史とその方言の概略を提示し、加えて現在の低地ドイツ語の社会言語学的な側面にも言及することで、低地ドイツ語がどのような言語であるかを見る。続く 2 章では、低地ドイツ語の動詞形態の概略を提示する。3 章から 5 章は、本論部分ともいえる、低地ドイツ語の動詞統語論の記述である。3 章では、動詞 *doon* と不定詞からなる、*doon*-迂言形という形式を取り上げ、コーパスに基づいた調査の成果を提示する。4 章では、*doon*-迂言形に対応する西ゲルマン諸語の「不定詞＋tun」迂言形を取り上げ、西ゲルマン諸語の「不定詞＋tun」迂言形がどのような特徴を持つかを見る。5 章では、2 つの動詞定形が従属的な意味で結ばれる疑似並列という構文を取り上げ、筆者がドイツで行ったアンケートに基づいてその特徴を記述する。

目次

はじめに.....1

本稿で使用する略号.....4

1. 低地ドイツ語.....5
1.1. 低地ドイツ語の歴史.....6
1.2. 低地ドイツ語の方言区分.....11
1.3. シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の低地ドイツ語.....13
1.4. 教育機関における低地ドイツ語.....17
1.5. 低地ドイツ語に関わる諸活動.....25

2. 低地ドイツ語の動詞形態.....37
2.1. 弱変化動詞.....38
2.2. 強変化動詞.....45
2.3. 話法の助動詞.....47
2.4. 完了形.....49
2.5. 受動態.....52
2.6. その他の構文.....54

3. 低地ドイツ語における *doon*-迂言形.....58
3.1. 導入.....58
3.2. *doon*-迂言形が使用される共時的要因.....61
3.3. *doon*-迂言形と歯音接尾辞の衰退.....71
3.4. 上部ドイツ語における「不定詞＋tun」迂言形との比較.....77
3.5. 低地ドイツ語における *doon*-迂言形の特徴.....80

4. 西ゲルマン諸語における「不定詞＋tun」迂言形の特徴.....84
4.1. 導入.....84
4.2. 標準語における「不定詞＋tun」迂言形.....85
4.3. ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形.....96
4.4. まとめ.....119

5. 低地ドイツ語における疑似並列.....121
5.1. 導入.....121
5.2. アンケート調査.....127
5.3. ゲルマン諸語における疑似並列.....137
5.4. 低地ドイツ語における疑似並列の特徴.....143
5.5. 疑似並列と文法化.....146

おわりに.....148

参考文献.....150

本稿で使用する略号

afr. アフリカーンス語

as. 古ザクセン語

bair. 上部ドイツ語バイエルン方言

dt. 標準ドイツ語

els. アルザスドイツ語

engl. 英語

fer. 北フリジア語フェリング方言

got. ゴート語

lux. ルクセンブルク語

md. 中部ドイツ語

mengl. 中英語

mhd. 中高ドイツ語

mnd. 中低ドイツ語

mndl. 中オランダ語

nd. 低地ドイツ語

ndl. オランダ語

ond. 東低地ドイツ語

schw. スウェーデン語

schwz. スイスドイツ語

wfr. 西フリジア語

wnd. 西低地ドイツ語

INF 不定詞

1. 低地ドイツ語

1 章では、低地ドイツ語の歴史的、方言的、社会言語学的な側面を扱い、本稿の対象とする低地ドイツ語への理解を深めることを目的とする。1.1 節では低地ドイツ語の歴史について扱い、続く 1.2 節で現在の低地ドイツ語の方言区分を概観する。1.3 節から 1.5 節では、筆者の留学経験をもとに、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州における低地ドイツ語の現状を報告する。

1.1. 低地ドイツ語の歴史

低地ドイツ語 (dt. Niederdeutsch) とは、ドイツ北部で話されるドイツ語方言である。今日の低地ドイツ語は、単一の言語ではなく、共通の特徴を持つ多くの方言から構成されている。低地ドイツ語の重要な特徴の 1 つに、「高地ドイツ語子音推移」(dt. hochdeutsche Lautverschiebung) の影響を受けていないという点がある。高地ドイツ語子音推移とは、5 世紀から 8 世紀において西ゲルマン語内で起こった音韻変化であり、無声閉鎖音 *p*、*t*、*k* が摩擦音または破擦音に、有声閉鎖音 *d* が無声閉鎖音 *t* に変化した現象を指す。(1) に、上記の閉鎖音を含む低地ドイツ語の語彙を、子音推移の影響が見られる標準ドイツ語の対応する語と併記して示す。

(1)

nd. *Appel* ↮ dt. *Apfel*「りんご」

nd. *sitten* ↮ dt. *sitzen*「座っている」

nd. *Köök* ↮ dt. *Küche*「台所」

nd. *doon* ↮ dt. *tun*「する」

子音推移の影響を受けていない低地ドイツ語に対し、子音推移の影響を受けた方言は高地ドイツ語 (dt. Hochdeutsch) とよばれ、後者は子音推移の進行度合いによりさらに中部ドイツ語 (dt. Mitteldeutsch) と上部ドイツ語 (dt. Oberdeutsch) に分かれる。中部ドイツ語と上部ドイツ語が歴史的に中高ドイツ語 (dt. Mittelhochdeutsch) と古高ドイツ語 (dt. Althochdeutsch) にさかのぼるのに対し、低地ドイツ語は中低ドイツ語 (dt. Mittelniederdeutsch) と古ザクセン語 (dt. Altsächsisch) にそのルーツを持つ (表 1-1)。

古期 ↓	古ザクセン語 (北海ゲルマン語)	古高ドイツ語 (内陸ゲルマン語)
中期 ↓	中低ドイツ語	中高ドイツ語
新期	新低ドイツ語 **・低地ドイツ語**	新高ドイツ語 ・中部ドイツ語 ・上部ドイツ語

表 1-1：低地ドイツ語と高地ドイツ語の系統関係

内陸ゲルマン語に分類される古高ドイツ語と異なり、古ザクセン語は古英語・古フリジア語とともに北海ゲルマン語 (dt. Nordseegermanisch) という西ゲルマン語内のグループを構成していた。そのため現在の低地ドイツ語にも、北海ゲルマン語的な特徴が見られるが、その影響は英語・フリジア語と比べると限定的である。例えば、北海ゲルマン語の代表的な音韻的特徴として、「n＋摩擦音」における *n* の脱落と「g/k＋前舌母音」における *g/k* の口蓋化がある (Sanders 1982: 42)。前者は今日の低地ドイツ語にも部分的にその影響が見られ、*fief*「５ (数詞)」や *Goos*「がちょう」がその例である (2)。しかし、*anner*「他の」や *Mund*「口」のように、本来「n＋摩擦音」の環境であり、古ザクセン語では *n* の脱落を示していたが、今日では *n* が再び現れている語も存在する (2)。また、*g/k* の口蓋化は、低地ドイツ語にはその痕跡がほとんど見られない (3)。

(2) *n* の脱落

nd. *fief* ⇿ dt. *fünf*「５ (数詞)」

nd. *Goos* ⇿ dt. *Gans*「がちょう」

engl. *other*, wfr. *oar*, fer. *öler* ⇿ nd. *anner* (as. *ōthar*), dt. *ander*「他の」

engl. *mouth*, fer. *mös* ⇿ nd. *Mund* (as. *mūth*), dt. *Mund*「口」

(3) *g*/*k* の口蓋化

engl. *yesterday*, wfr. *juster*, fer. *jister* ⇿ nd. *güstern*, dt. *gestern*「昨日」

engl. *church*, wfr. *tsjerke*, fer. *sark* ⇿ nd. *Kark*, dt. *Kirche*「教会」

engl. *cheese*, wfr. *tsiis*, fer. *sees* ⇿ nd. *Kääs*, dt. *Käse*「チーズ」

古ザクセン語は、800 年ごろから 1150 年ごろまで、今日のドイツ北西部とオランダ東部に居住していたザクセン族 (dt. Sachsen) により話されていた言語を指す (図 1)。前述のように、古ザクセン語は本来北海ゲルマン語の 1 言語であったが、8 世紀後半にザクセン族が南部のフランケン族 (dt. Franken) との抗争に敗れ、フランク王国の一部に組み込まれた結果、内陸の方言の影響が強まり、北海ゲルマン語的な特徴が後退したとされる (Stellmacher 2000[2]: 20)。

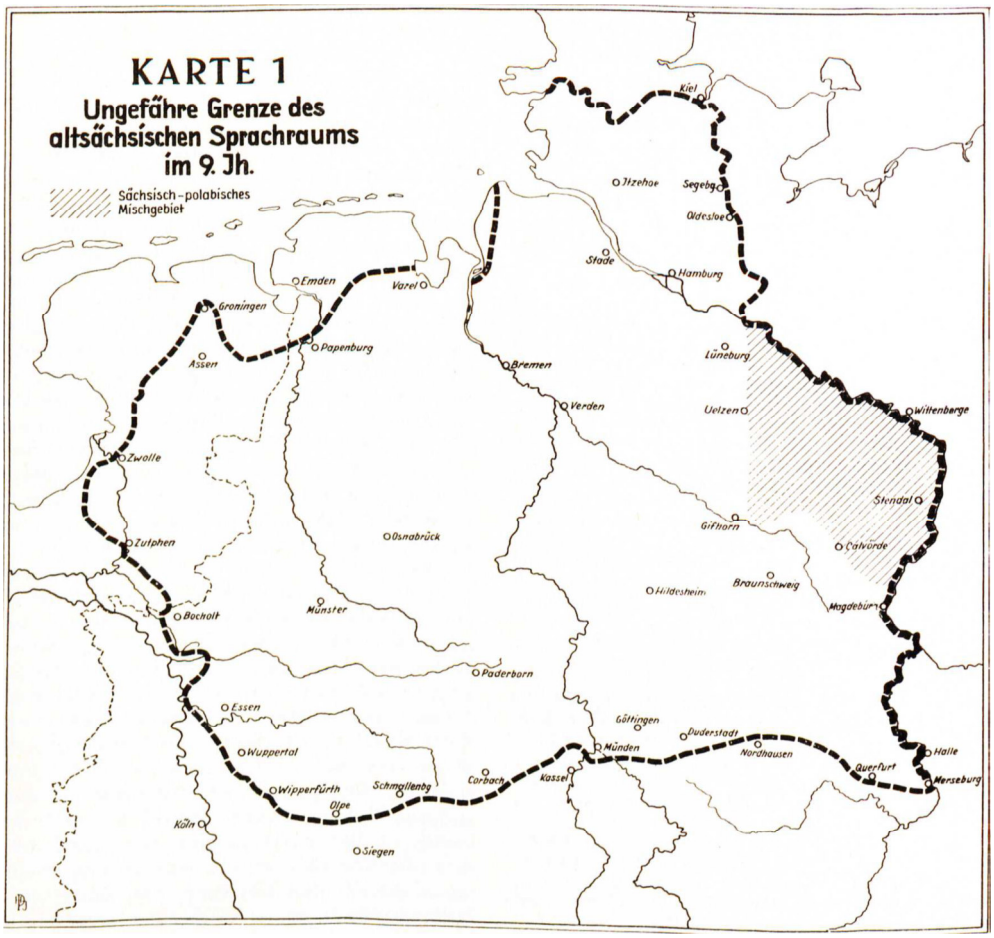


図 1：古ザクセン語の使用地域 (Foerste 1957: Sp. 1739-1740)

古ザクセン語に続く中低ドイツ語 (1150 年-1600 年) は、ドイツ人の植民活動に伴いその使用地域を東部へ広げた他、ハンザ同盟の共通語として使用されるようになった。そのため中低ドイツ語は、14 世紀から 15 世紀に北ドイツにおいて、ラテン語に代わる書き言葉としての地位を確立した。中低ドイツ語は、ハンザ同盟の広がりに伴い、北海やバルト海沿岸の都市にも進出した。その影響により今日のスカンディナヴィア諸語には、中低ドイツ語由来の借用語が少なくない (schw. *frukost*「朝食」 < mnd. *vrôkost*「朝食」、schw. *men*「しかし」 < mnd. *men*/*man*「しかし、～だけ」) (Stellmacher 2000[2]: 63)。

16 世紀以降、イギリス、オランダ、スカンディナヴィア諸国の力が強まり、ハンザ同盟は北ヨーロッパにおける覇権を失った。ハンザ同

盟の衰退と軌を一にして、16 世紀以降中低ドイツ語は、北ドイツにおいて書き言葉としての地位を標準ドイツ語に譲ることになった。その結果、新低ドイツ語期 (1600 年-) には、低地ドイツ語は方言の地位に転落し、公的な機能は標準ドイツ語が担うという状況が生まれた。今日の低地ドイツ語が標準語を欠いた方言群として存在していることの背景にはこのような歴史的事実がある。

1.2. 低地ドイツ語の方言区分

今日、低地ドイツ語が話される地域は、ドイツ語圏を東西に走るベンラート線 (図 2 の赤い点線) の北側であり、低地ドイツ語には合わせて 7 つの下位方言がある (Sanders 1982、Stellmacher 2000[2])。以下に低地ドイツ語が話される地域と 7 つの下位方言の名称を列挙する。低地ドイツ語の方言は、現在形統一複数の動詞語尾 (2.1 節参照) の違いにより、西低地ドイツ語 (dt. Westniederdeutsch) と東低地ドイツ語 (dt. Ostniederdeutsch) に分かれる (wnd. *wi maak-t* ↔ ond. *wi mak-en*; dt. *wir machen*)[1]。

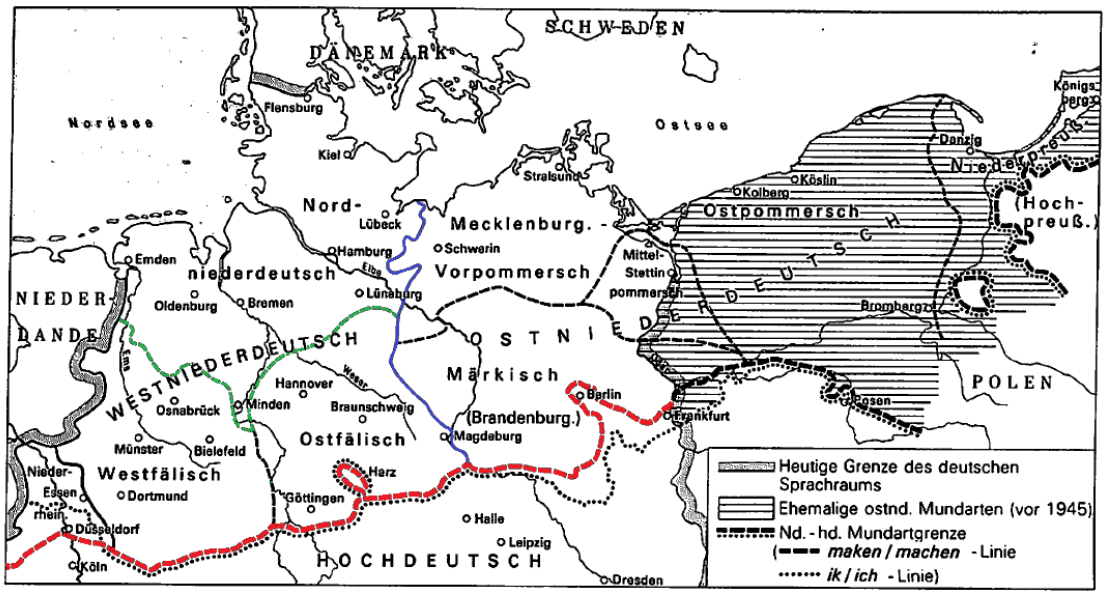


図 2：北ドイツの方言地図 (Sanders 1982: 240)

西低地ドイツ語 (Westniederdeutsch) (図 2 青い実線より西側)

①北低地ザクセン方言 (Nordniedersächsisch/Nordniederdeutsch)

②ヴェストファーレン方言 (Westfälisch)

③オストファーレン方言 (Ostfälisch)

[1] 西低地ドイツ語でも、東フリースラント方言 (Ostfriesisch) とシュレースヴィヒ方言 (Schleswigsch) では、現在形の統一複数語尾が *-en* となる。

④低地ライン方言 (Niederrheinisch)

東低地ドイツ語 (Ostniederdeutsch) (図 2 青い実線より東側)
⑤メクレンブルク・フォーアポマーン方言 (Mecklenburgisch-Vorpommersch)
⑥マルク・ブランデンブルク方言 (Märkisch-Brandenburgisch)
⑦中部ポマーン方言 (Mittelpommersch)

ただしこの分類は、必ずしも構造的な類似性と対応している訳ではない。近年の研究 (Lameli 2016) によると、オランダ語に連なる④低地ライン方言は、他の低地ドイツ語と大きく異なる特徴を持っており、その他の低地ドイツ語方言では、②ヴェストファーレン方言と③オストファーレン方言を合わせた 2 方言と、その他の 4 方言の 2 グループに分けられるという。

本稿が記述の対象として扱うのは、①北低地ザクセン方言 (図 2 緑の実線より北側) である。以下では特に断りがない場合、「低地ドイツ語」という用語を、北低地ザクセン方言を指すものとして使用する。

1.3. シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の低地ドイツ語

2018 年 9 月から 2020 年 8 月にかけ、筆者はロータリー財団の奨学金によりクリスティアン＝アルブレヒト大学キール (dt. Christian-Albrecht-Universität zu Kiel) において客員研究員として研究滞在を行う機会を得た。1.3 節から 1.5 節では滞在中の経験を基に、ドイツのシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州 (dt. Schleswig-Holstein) における低地ドイツ語の現状を論じる。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では、西低地ドイツ語に分類される北低地ザクセン方言 (dt. Nordniedersächsisch) が話されている (1.2 節の図 2 参照)。北低地ザクセン方言は、さらにシュレースヴィヒ方言、ホルシュタイン方言、ハンブルク方言、ブレーメン＝オルデンブルク方言、エムスラント方言、東フリースラント方言の 6 つに分かれる (Thies 2017[3]: 28)。以下に北低地ザクセン方言内の方言を列挙する。同州で話される低地ドイツ語は、ホルシュタイン方言とシュレースヴィヒ方言である。

低地ドイツ語 (Niederdeutsch)
　西低地ドイツ語 (Westniederdeutsch)
　　北低地ザクセン方言 (Nordniedersächsisch)
　　シュレースヴィヒ方言 (Schleswigsch)
　　ホルシュタイン方言 (Holsteinisch)
　　ハンブルク方言 (Hamburgisch)
　　ブレーメン＝オルデンブルク方言 (Bremisch-Oldenburgisch)
　　エムスラント方言 (Emsländisch)
　　東フリースラント方言 (Ostfriesisch)

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州は、今日も低地ドイツ語が比較的よく話される地域である。Adler et al. (2016: 11, 15) によると、2016

年に行われたアンケートでは、低地ドイツ語の理解度についての設問において、同州における回答者の 34.1%が低地ドイツ語を「とてもよく理解できる」、24.6%が「よく理解できる」と回答しており、低地ドイツ語を話す能力についての設問では、16.5%が「とてもよく話せる」、8.0%が「よく話せる」と回答している。低地ドイツ語が話される他の 7 つの州 (ハンブルク州、メクレンブルク＝フォーアポマーン州、ブランデンブルク州、ノルトライン＝ヴェストファーレン州、ニーダーザクセン州、ブレーメン州、ザクセン＝アンハルト州) と比べると、同州における「よく理解できる」「理解できる」の割合の合計はメクレンブルク＝フォーアポマーン州に次いで高く、「よく話せる」「話せる」の合計は最も高い。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州において低地ドイツ語は、ヨーロッパ地域言語・少数言語憲章 (dt. Europäische Charta der Regional- oder Minderheitensprachen) により地域言語 (dt. Regionalsprache) として認められている。ヨーロッパ地域言語・少数言語憲章は、1992 年に欧州評議会によって採択された憲章であり、この憲章を 1998 年に批准したドイツでは、デンマーク語、フリジア語、ソルブ語、ロマ語、低地ドイツ語が保護対象とされている。保護対象の言語は州ごとに異なり、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では、上記の言語のうちソルブ語を除く 4 言語が保護の対象となっている。

地域言語および少数言語は同憲章において、標準語とは異なる言語[2]であり、方言ではない[3]と定義されている。したがって、定義上、低地

[2] Im Sinne dieser Charta bezeichnet der Ausdruck „Regional- oder Minderheitensprachen“ Sprachen, die herkömmlicherweise in einem bestimmten Gebiet eines Staates von Angehörigen dieses Staates gebraucht werden, die eine Gruppe bilden, deren Zahl kleiner ist als die der übrigen Bevölkerung des Staates, und die sich von der (den) Amtssprache(n) dieses Staates unterscheiden[.] (本憲章において、「地域言語・少数言語」という表現は、以下の言語を指す。ある国家の特定の地域で、慣習的にその国家の国民によって用いられ、その話者集団がその国家における他の国民の数より少なく、その国家の公用語と異なる言語) (BfN 2014: 6)

[3] Er [der Ausdruck „Regional- oder Minderheitensprachen“] umfasst weder Dialekte

ドイツ語は当該国家の公用語、つまり標準ドイツ語と異なる言語でありその方言でもない。地域言語 (dt. Regionalsprache) は言語学の地域言語 (dt. Regiolekt) とは異なる概念であり、同憲章においても明確に定義づけられている訳ではない (Wirrer 2000: 8)。少数言語が話者の意識に基づく民族性や宗教によって規定されるのに対して、地域言語では、話者の民族性や宗教が多数派のそれと共通しており、言語学的な基準とその領域性が重要となるという (Wirrer 2000: 9)。地域言語・少数言語の定義について、Boysen (2011: 61) は、同憲章の定義の目的は、意味のある適応領域を確定させ、憲章の規定を実行可能な形で取り扱うことにあるとしている。つまり、「地域言語・少数言語」という概念についての学問的・政治的一致よりも、具体的な実践が問題にされていると言える。同憲章における低地ドイツ語の地域言語としての扱いは、低地ドイツ語の言語政策に対する一定の必要性から来ていることを示唆している。

低地ドイツ語が方言ではなく言語であるという規定は、一定の象徴的な効力を有している。今日低地ドイツ語を方言と言語のどちらと見なすかという問題は、人により判断が分かれる問題である。Adler et al. (2016: 29) で行われたアンケートによると、回答者の 59.2%が低地ドイツ語を方言と見なし、39.0%が言語と見なしているが、この判断は回答者の低地ドイツ語との関わり方と関係があるという。方言と見なした回答者は低地ドイツ語の言語運用能力が低く、低地ドイツ語の保護にも消極的であるが、低地ドイツ語の話者は低地ドイツ語を方言ではなく言語と見なす傾向にある。これには方言という言葉の持つネガティブなイメージが関係しており、地域言語としての規定は、話者の低地ドイツ語に対する意識が考慮された結果とも考えられる。

---

der Amtssprache(n) des Staates noch die Sprachen von Zuwanderern[.] (「地域言語・少数言語」という表現は、公用語の方言ないし移住者の言語を含まない) (BfN 2014: 6)

憲章での低地ドイツ語の取り扱いは、ドイツでは各州に委ねられており一定ではない。同憲章では、保護対象の言語の状況に合わせて守るべき条項を選ぶことができる。憲章の第二部は一般的な規則のみを含み、第三部は個々の領域に応じた具体的な規則を含んでいる。北ドイツの各州のうち、ブランデンブルク州、ノルトライン＝ヴェストファーレン州、ザクセン＝アンハルト州では、第二部のみが適用され、ブレーメン州、ハンブルク州、メクレンブルク＝フォーアポマーン州、ニーダーザクセン州、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では両方が適用されている (BfN 2014: 4)。第三部では、保護対象の言語の使用を合計 7 つの領域で推進することが求められている。その内訳は、以下の通りである。

①教育 (Bildung)
②司法官庁 (Justizbehörden)
③行政官庁および公的な執行機関
(Verwaltungsbehörden und öffentliche Dienstleistungsbetriebe)
④メディア (Medien)
⑤文化活動および文化施設 (kulturelle Tätigkeiten und Einrichtungen)
⑥経済生活および社会生活 (wirtschaftliches und soziales Leben)
⑦国境横断的な交流 (grenzüberschreitender Austausch)

以上の 7 つの領域は、日常生活の大部分に関わるものである。第三部が適用される各州は、この 7 領域に関わる条項のうち最低でも 35 の条項を選択して適用し、これらの条項の達成について定期的に報告書を作成しなければならない。報告書は専門家委員会や話者集団によって評価され、これにより憲章の義務条項の達成が図られている。

1.4. 教育機関における低地ドイツ語

1.3 節では、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州における低地ドイツ語の地域言語としての地位をヨーロッパ地域言語・少数言語憲章との関連から述べた。本節では、憲章で低地ドイツ語を推進すべきとされている分野の例として教育分野を取り上げ、同州における取り組みを紹介する。本節では、学校、大学、就学前教育機関について論じる。

1.4.1. 学校における低地ドイツ語

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州は、地域言語・少数言語憲章の学校教育に関わる第 8 条の 1.b.iii 項[4]と 1.c.iii 項[5]を選択している。1.b 項は初等教育、1.c 項は中等教育を扱っており、措置の内容は言語の状況に応じ、4 つの段階から選択される。同州が選んだ項目では、初等教育・中等教育において低地ドイツ語の授業を教育計画の一部に盛り込むことが義務とされている。一方で低地ドイツ語による授業は、1.b.i 項、1.b.ii 項、1.c.i 項、1.c.ii 項において義務とされているものの、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州はこの項目を選択していない。低地ドイツ語による授業は、同州以外の 7 つの州のいずれも義務として引き受けていない。その理由の 1 つとして、若年層の低地ドイツ語の運用能力が低いため、低地ドイツ語による授業を行うことが困難であることが考えられる。したがって、学校教育では低地ドイツ語による授業ではなく、低地ドイツ語そのものの習得が目指される。学校での低地ドイツ語教育の目的には、地域言語の習得だけでなくそれを通した他言語習得・理解があるとされる。Goltz (2013) によると、国際的重要性の点で低地ドイツ語は、英語のような大言語と比較することがほとんどできないが、英語やスカンディナヴィア諸語の学習に際して、橋渡しの言語として機能しうるという。

低地ドイツ語には標準語がないため、学校教育で画一的に教える際

[4] Im Bereich der Bildung verpflichten sich die Vertragsparteien [...] innerhalb des Grundschulunterrichts den Unterricht der betreffenden Regional- oder Minderheitensprache als integrierten Teil des Lehrplans vorzusehen. (教育分野において、憲章批准国は、(中略) 初等教育において、当該の地域言語・少数言語の授業を教育計画に内包された一部として定めることが義務付けられている) (BfN 2014: 10-11)

[5] Im Bereich der Bildung verpflichten sich die Vertragsparteien [...] innerhalb des Unterrichts im Sekundarbereich den Unterricht der betreffenden Regional- oder Minderheitensprache als integrierten Teil des Lehrplans vorzusehen. (教育分野において、憲章批准国は、(中略) 中等教育の授業において、当該の地域言語・少数言語の授業を教育計画に内包された一部として定めることが義務付けられている) (BfN 2014: 11-12)

には、言語形式の標準化という問題がある。Goltz (2013) は、低地ドイツ語の授業の基本方針はまだ作成途上であり、地域的な言語形式と標準化された低地ドイツ語の間には緊張の場があるとしている。これはすなわち、地域的な言語形式[6]を低地ドイツ語教育に反映させるか否かという問題であると言える。Goltz (2013: 7) は、学校教育に低地ドイツ語を導入するためには、表記 (Schreibung) と文法的な形式 (grammatische Formen) の標準化が慎重になされる必要はあるものの不可欠であるとしている。1.5 節で見る通り、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の低地ドイツ語には、各地域の間で差異があり、上記の方針に従えばどれかを標準的形式として採用することになる。

初等教育向けの教材には、低地ドイツ語研究所 (dt. Institut für niederdeutsche Sprache) が編集した『パウルとエマ』(nd. Paul un Emma) という教科書のシリーズがある。これには初等教育の 1-2 年生向け (Ashtarany et al. 2017[2]) と、3-4 年生向け (Ehlers et al. 2018) の 2 冊が存在し、前者は 2015 年、後者は 2018 年に初版が出版された。『パウルとエマ』の補助教材は、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州における学校の質的向上協会 (dt. Institut für Qualitätsentwicklung an Schulen Schleswig-Holstein (IQSH)) のサイト内からもダウンロードできる。『パウルとエマ』では、大部分の西低地ドイツ語において優勢な形態的特徴が採用されている。1-2 年生向けの教科書 (Ashtarany et al. 2017[2]) の 8-9 ページには *Wi fiert den eersten Schooldag!* (dt. *Wir feiern den ersten Schultag!*「初めての登校日をお祝いしましょう」) とあるが、ここでは主格 *de* と形態的に区別された対格 *den* が見つかるほか、現在形複数の語尾として *-t* が確認できる (*fiert*)。詳しくは 1.5 節で述べるが、これらはホルシュタイン方言の形態的特徴であり、他の大部分の

[6] ただし、「地域的な言語形式」 (regionale Sprachformen) という表現に関して、Goltz (2013: 7) は「主に発音の観点」 (vor allem mit Blick auf die Aussprache) という補足を付けており、発音以外の形態・統語的な変異を統一することは自明であるかのような印象を受ける。

西低地ドイツ語においても認められるものである。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の初等教育では、州内の 27 の小学校 (dt. Grundschule)、混合学校 (dt. Gemeinschaftsschule) が参加して、低地ドイツ語の学校教育プロジェクト *friewillig Plattdüütschünnerricht* (dt. freiwilliger Plattdeutschunterricht) が 2014/2015 年に始められた。同プロジェクトでは、週に 2 コマの頻度で低地ドイツ語の教育が行われている。2014 年の話者による憲章項目の達成に関する評価では、「このプロジェクトに含まれないが、低地ドイツ語を扱っている学校」に対する支援が課題であるとされていたが (BfN 2014: 11)、2021 年の報告によると、参加している学校数は 33 に増え、2020/2021 年は 2738 人の生徒が低地ドイツ語を学んだ (Staatenbericht 2021)。一方で中等教育では、2014 年の話者の評価で「初等教育で行われた施策を中等教育へ拡大させること」が必要とされてきた (BfN 2014: 11)。2021 年の報告によると、前述の教育プロジェクトは中等教育にまで拡張され、2020/2021 年には 9 つの中等教育機関で 320 人の生徒が低地ドイツ語を学んだ (Staatenbericht 2021)。2021 年には、中等教育向けの教科書 (Hiestermann/Konen-Witzel 2021) が作成されるなど、学校における低地ドイツ語の授業は中等教育にも拡大されつつある。

1.4.2. 大学における低地ドイツ語

地域言語・少数言語憲章の第 8 条 1.e 項は大学教育に関わる条項であり、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州はそのうちの 1.e.ii 項[7]を選択している。この条項により同州の大学は、低地ドイツ語の専攻課程を設けなければならないとされている。

同州では、キール大学とフレンスブルク大学において低地ドイツ語を専攻することが可能である。キール大学では、ドイツ語学文学講座内に低地ドイツ語部門 (dt. niederdeutsche Abteilung) が存在し、ミヒャエル・エルメンターラー教授 (Prof. Dr. Michael Elmentaler) のもと、低地ドイツ語に関わる様々な講義が開講されている。エルメンターラー教授は、低地ドイツ語の概説講座、低地ドイツ語のゼミナールを開いており、その他の教員も中低ドイツ語の入門講座・講読、低地ドイツ語の語学講座、クラウス・グロート (Klaus Groth) の講読、低地ドイツ語の社会言語学などを開講している。

キール大学の低地ドイツ語部門は、SiN-プロジェクト[8] (Sprachvariation in Norddeutschland「北ドイツの言語変異」) に参加し、NOSA (Norddeutscher Sprachaltas) を編纂している。NOSA では、北ドイツの地域言語 (dt. Regiolekt) と基礎方言 (dt. Basisdialekt) について、音韻・形態・統語の観点から言語地図が編まれている。2015 年に刊行された NOSA の第 1 巻 (Elmentaler/Rosenberg 2015) では、北ドイツの地域言語の地域・状況に応じた変異が言語地図にまとめられた。2 巻本である NOSA は、北ドイツの基礎方言についての第 2 巻が近年刊行された (Elmentaler/Rosenberg 2022)。

また、キール大学の低地ドイツ語部門では、シュレースヴィヒ＝ホ

[7] Im Bereich der Bildung verpflichten sich die Vertragsparteien [...] Möglichkeiten für das Studium dieser Sprachen als Studienfächer an Universitäten und anderen Hochschulen anzubieten. (教育分野において、憲章批准国は、(中略) 総合大学とその他の単科大学において、当該の地域言語・少数言語の専攻課程を設けることが義務付けられている) (BfN 2014: 13)

[8] https://corpora.uni-hamburg.de//sin/startseite.html

ルシュタイン州の低地ドイツ語をアンケートによって調査する、*Plattdüütsch hüüt* (dt. Plattdeutsch heute) というプロジェクトも行われている。プロジェクト内のアンケートでは、特定の形態・統語的特徴を複数の選択肢から方言話者に選んでもらい、今日の地域的な変異がかつての等語線と一致するかを主に調査している。アンケートは 2012 年から 2014 年にかけて行われ、現在その結果がまとめられている。回答者の年齢と変異の関係の調査、歴史的コーパスとの比較を通し、最終的にコメント付きの方言地図が作成される予定である (Elmentaler 2012: 154)。

1.4.3. 就学前教育機関における低地ドイツ語

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州は、地域言語・少数言語憲章の第 8 章のうち、就学前教育に関する 1.a.iv 項[9]を選択している。そこでは、就学前教育における低地ドイツ語の使用を促進・勧奨することが義務付けられている。促進・勧奨するためには具体的に、保護される言語の存在を強めることが必要とされる (Langenfeld 2011: 205)。話者集団は、これまでの州の対策について、「州による刺激は強化される必要があり、低地ドイツ語を提供していない各機関にも拡大されるべき」としている (BfN 2014: 10)。

幼稚園における低地ドイツ語教育の取り組みについて、一例を紹介する。ADS-Grenzfriedensbund (ADS は Arbeitsgemeinschaft Deutsches Schleswig の略、以下 ADS-G と略して表記する) は、シュレースヴィヒ地方の少数民族集団の文化・社会政治的問題に取り組むワーキングチームである。2016 年時点でシュレースヴィヒ地方に、27 の ADS-G による幼稚園が存在し (ADS-Grenzfriedensbund e.V. 2016: 18)、その全てにおいて標準ドイツ語に加えて別の言語による教育を行うことが義務付けられている。それぞれの幼稚園は、低地ドイツ語・北フリジア語・デンマーク語のどれかを 2 言語教育の対象としなければならない。低地ドイツ語は、ADS-G の 27 の幼稚園のうち、17 で使用されている。低地ドイツ語教育では、イマージョン・プログラムが採用されている (Poggensee 2015: 40)。低地ドイツ語を話せない教員もいるため、低地ドイツ語が常に使われているという訳ではないが、低地ドイツ語話者

[9] Im Bereich der Bildung verpflichten sich die Vertragsparteien [...] falls die staatlichen Stellen keine unmittelbare Zuständigkeit im Bereich der vorschulischen Erziehung haben, die Anwendung der unter den Ziffern i bis iii vorgesehenen Maßnahmen zu begünstigen und/oder dazu zu ermutigen. (教育分野において、憲章批准国は、(中略) 就学前教育における直接の権限を国立の官庁が持たない場合、i から iii 項で定められた措置の適用を促進・勧奨することが義務付けられている) (BfN 2014: 9)

の教員と児童は常に低地ドイツ語を話す環境にある[10]。

[10] 学校、大学、就学前教育機関の他にも、州内には学校・大学を出た大人が低地ドイツ語を学ぶ機会が存在する。例えば、成人教育機関である VHS (Volkshochschule) では、言語学習のカテゴリーにおいて低地ドイツ語の講座が開かれている。成人向けの教材は、2016 年に大人向けの低地ドイツ語教材が新たに作成された (Arbatzat 2016)。詳しくは 1.5.2 節で述べるが各地に会話サークルが存在し、会話を行う機会を増やそうとする運動も存在する。

1.5. 低地ドイツ語に関わる諸活動

本節では、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州において、教育以外の領域で行われている低地ドイツ語に関わる諸活動について報告する。1.5.1 節では、郷土協会によって行われている低地ドイツ語の調査活動について述べ、1.5.2 節と 1.5.3 節では低地ドイツ語の使用を推進する諸活動について述べる。

1.5.1. 低地ドイツ語の形態研究

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州各地の低地ドイツ語の形態を調査し、それを『低地ドイツ語形態論』(dt. niederdeutsche Formenlehre) という小冊子にまとめるという作業が、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州郷土協会 (dt. Schleswig-Holsteinischer Heimatbund) によって行われている。第 1 巻の著者によると、この計画の背景には、州内の低地ドイツ語方言についての記述が近年少なくなっていることがあるという (Graf 2007: 3)。この小冊子では、動詞、名詞、形容詞および冠詞類、代名詞、副詞、前置詞、接続詞、否定詞に各章があてられ、その変化や代表的な語が示されている。そして、それに続いて不規則動詞の変化表が載せられている。この構成は、1990 年代に編まれた北フリジア語の形態研究の冊子 (Wilts 1993 など) を踏襲したものである (Graf 2007: 4)。北フリジア語の形態研究と異なり、巻頭には表記と発音の規則についての説明が、巻末には小さなテキストの例が加えられている。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の低地ドイツ語は均一ではなく、州内にはいくつかの等語線が走っている (図 3)。州内の低地ドイツ語のうち、特に北部のシュレースヴィヒ方言と南部のホルシュタイン方言の差が大きく、前者には現在形複数の語尾 *-en* および対格の消失という他の西低地ドイツ語から逸脱した特徴がある[11]。現在形複数の語尾についての統語線 (北部 *wi/i/se maken* vs. 南部 *wi/ji/se maakt* dt. *wir machen*「私たちはする」/*ihr macht*「君たちはする」/*sie machen*「彼らはする」) は、シュライ湾 (Schlei) とシュレースヴィヒ (dt. Schleswig) を通っているのに対し、対格の消失の等語線 (北部 *de* (定冠詞男性主格・対格) vs. 南部 *de* (定冠詞男性主格) - *den* (定冠詞男性対格)) はエカーンフェアデ (dt. Eckernförde) を通り、前者のやや南に境

[11] 西低地ドイツ語では、東フリースラント方言 (Ostfriesisch) も現在形の統一複数語尾*-en* と対格の消失を示す。

目がある。シュレースヴィヒ方言は、デンマーク語を基層言語としており (Bock 1933)、19 世紀に言語が交替した背景を持つ (Wolbersen 2016)[12]。南北に走る統語線も存在し、州西部の北フリースラントおよびディトマルシェンでは、2 人称複数の人称代名詞の主格形に *-m* で終わる語形が用いられる (シュレースヴィヒ中部・東部 *i*、ホルシュタイン中部・東部 *ji/ju* vs. 北フリースラント *jem/jim*、ディトマルシェン *jüm*、dt. *ihr*「君たち」)。

[12] そのため、シュレースヴィヒ方言は統語的にもホルシュタイン方言にない特徴を備えている。*Un*-不定詞 (i) はその 1 つであり、この構文では *un* (dt. *und*) の直後に不定詞が置かれ、それが不定詞句として働く。

(i) nd. *Ik heff Lust un lopen weg.*
ich habe Lust und laufen-INF weg
走り去ってしまいたい。

(Bock 1933: 97)

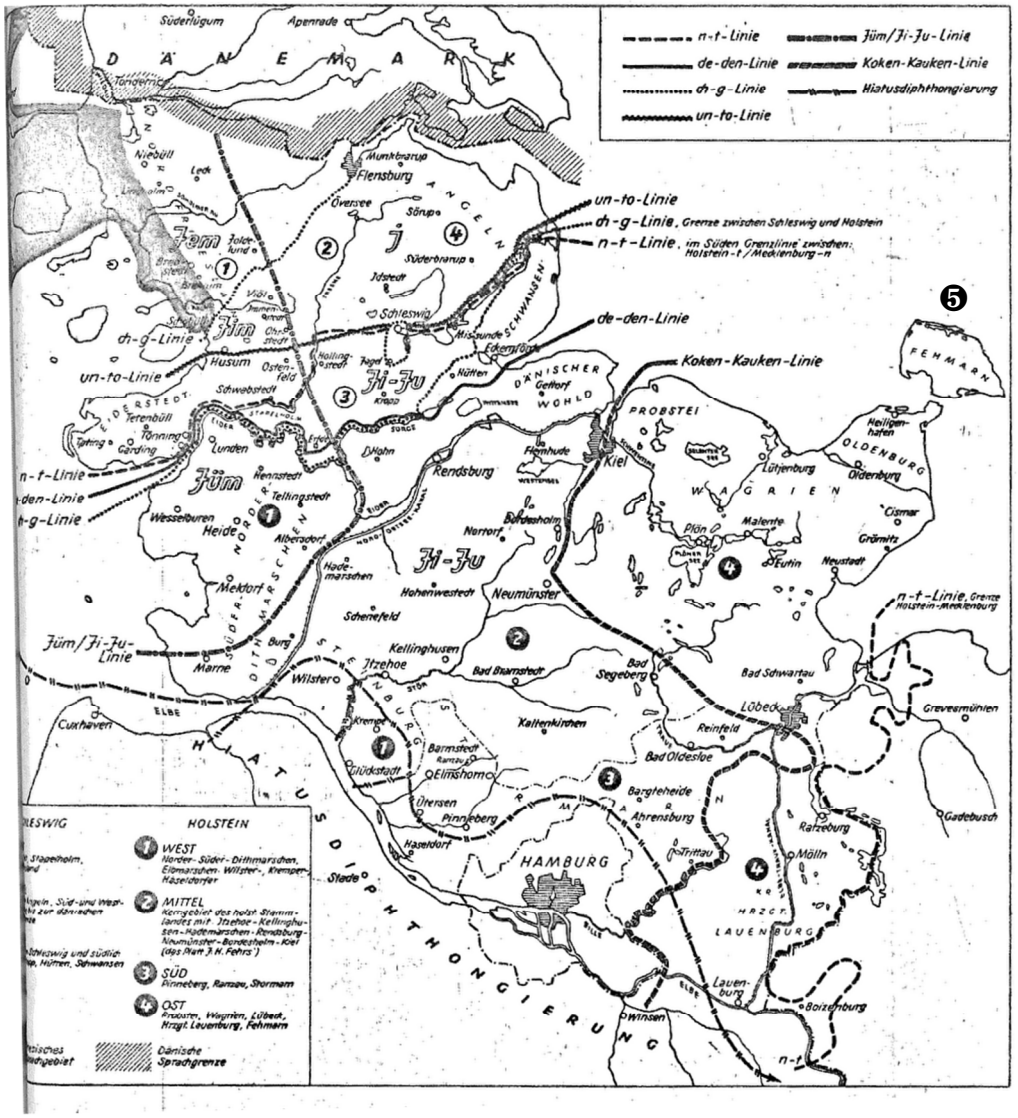


図 3：シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の形態的・音韻的統語線 (Braak 1956: 38)

『低地ドイツ語形態論』は、これまで 5 巻が刊行されている。プロープスタイ地域 (図 3 の❹で示された地域の北西部) の低地ドイツ語についての 1 巻 (Graf 2007) をヤン・グラーフ氏 (Jan Graf) が執筆したのを皮切りに、アネマリー・イェンゼン氏 (Annemarie Jensen) がフレンスブルク、エカーンフェアデ間の地域 (図 3 の②と④に相当) の低地ドイツ語についての 2 巻 (Jensen 2007)、北フリースラント (図 3 の①に相当) の低地ドイツ語についての 3 巻 (Jensen 2009)、ディトマ

ルシェン (図 3 の❶の西部) の低地ドイツ語についての 4 巻 (Jensen 2011) を執筆し、2022 年にはフェーマルン島 (図 3 の❺で示された島) の低地ドイツ語についての 5 巻 (Jensen 2022) が刊行された。著者の両名は、低地ドイツ語の話者であるが言語学者ではなく、現地に赴いて話者に対してインタヴューを複数回行うことにより方言の形態を調査している。

教科書においてホルシュタイン方言が取り上げられる一方で、それ以外の方言が注目されることは少ないが、このプロジェクトでは各地の低地ドイツ語の特徴に焦点があてられている。Graf (2007: 3) の序文には、当時の郷土協会会長のヴィリー・ディルクス氏が、「地域で話される低地ドイツ語を画一的な北低地ザクセン語の規範が押しのけてはならない」というコメントを寄せており、統一的な低地ドイツ語規範に対して一定の距離を置いていることが読み取れる。

1.5.2. 低地ドイツ語の会話サークル

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の各地で、低地ドイツ語の話者が自主的に集まり、1 時間から 2 時間程度低地ドイツ語を話す会話サークルが開かれている。会の形態は様々で、個人的に行われるサークルの他、*Plattdeutscher Krink* 「低地ドイツ語サークル」(dt. Plattdeutscher Kreis) などのタイトルで、成人教育機関である VHS (Volkshochschule) のコースとして開かれることもある。VHS 内のコースとして開かれる場合は、主に VHS の施設で行われるが、個人的なサークルの場合は公民館、教会、老人ホームで行われる事がある。

このような会話サークルは、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の各地で開かれている。インターネット上に情報を載せていないサークルもあるため、全体の把握は困難だが、筆者が留学中に訪問したものだけで 14 個を数える。図 4 にあるように、ハイデ・フレンスブルク・フーズムといった郡都市 (dt. Kreisstadt) だけでなく、ゲルティング (Gelting) 、テリングシュテト (Tellingstedt) のような小さな町にもサークルが存在しており、州全体でも少なくない数のサークルが開かれていることが予想される。

図 4：筆者が訪問した州内の低地ドイツ語会話サークル[13]

サークルでは、複数の参加者が 1 つの机の周りに座り、お茶やコーヒーを飲みながら日常的な内容を話すことが多い。また、参加者が低地ドイツ語の本や新聞記事、または自作の詩を持ち寄り、それを朗読する事もあった。それぞれのサークルでは世話人は存在するものの、「教師・生徒」のような関係ではなく、全員が自発的に低地ドイツ語を話す雰囲気がある。とはいえ取りまとめ役の話者は、低地ドイツ語活動に熱心なことが多く、中には同じ VHS で入門者向けの低地ドイツ語講座を開く人や、低地ドイツ語で著作活動を行う人もいた。サークルの頻度は多くの場合、月に 1 度から 2 度の頻度の事が多く、5 月か

[13] 出典: http://www.shlb.de/chronik.htm (2020.12.09 閲覧)

ら 9 月を夏休みとして冬季限定で開かれることが多かった。サークルでは、個々の地域の居住者が集まるため、地域的な特徴を帯びた低地ドイツ語が話されることが多い。州西部のディトマルシェン地域では、2 人称複数主格の人称代名詞 *jüm* (dt. *ihr*) 、州北部のフレンスブルクおよびアンゲルン半島のサークルでは、主格と同形の対格 (*Ik kenn de Mann*. dt. *Ich kenne den Mann*.「私はその男を知っている」) や現在形複数語尾 *-en* (*wi/i/se maken* dt. *wir machen/ihr macht/sie machen*)・2 人称複数主格の人称代名詞 *i* (dt. *ihr*) という特徴の使用が認められた。

会話サークルは、低地ドイツ語を学ぶ場というよりもむしろ、既に低地ドイツ語を話す事ができる人に対して、低地ドイツ語を使用する機会を与えることに寄与している。今日、低地ドイツ語の使用領域は狭くなっており、常に低地ドイツ語を使用する環境にいる話者はそれほど多くないと考えられる。実際の生活で誰が低地ドイツ語を話すか分からない場合は、標準ドイツ語で話すようにしているという話を、数人の参加者から聞いた。そのため、お互いに低地ドイツ語を話す事ができる 2 人の話者が、標準ドイツ語で知り合ったため、標準ドイツ語を話すようになったという例を頻繁に耳にした。低地ドイツ語を話すためのサークルが州内の各所で開かれているということ自体、低地ドイツ語が実際の生活の中で使用されなくなっていることを示していると筆者は考える。したがって、低地ドイツ語の使用領域が狭くなっている今日、こうした活動を通して低地ドイツ語を使う名目を与えることには、一定の意義があると考えられる。

1.5.3 低地ドイツ語併記の案内板

公共圏における低地ドイツ語の使用という問題に関連して、低地ドイツ語併記の市町村案内板 (dt. Ortstafel) がシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州で建てられ始めたことに言及したい。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では、2007 年から低地ドイツ語を併記した案内板を設置することができるようになった。この背景には、2004 年から北フリースラント州で北フリジア語併記の案内板が設置されるようになったことがある。

ただし、案内板の設置にかかる制約がいくつか存在する。まず、案内板では低地ドイツ語の地名は標準ドイツ語の地名より小さく書かなければならず、併記できるのは市町村 (dt. Gemeinde) の名前だけで、郡 (dt. Kreis) の名前などは併記できない。さらに、案内板の設置にかかる費用は自治体が負担する必要がある。そのため、実際に低地ドイツ語併記の案内板が設置されているのは一部の自治体に留まっており、州全体の言語景観を変えるには至っていない。

図 5：ディトマルシェン郡クレンペルにおける低地ドイツ語併記の案内板 (筆者撮影)

図 5 は、ディトマルシェン郡 (dt. Kreis Dithmarschen) のクレンペル (dt. Krempel, nd. Krimpel) という町にある低地ドイツ語併記の案内板である。案内板の設置を推進した話者によると、クレンペルに住む低地ドイツ語話者の要望を受けた町議会の活動により、2008 年にディトマルシェン郡において初めて低地ドイツ語併記の案内板が設置されたという。その設置に当たっては州政府の許可を得る必要があり、その際に低地ドイツ語の語形が、話者への聞き取りや歴史的な資料などをもとに選定された。先に述べたように費用は自治体負担であり、クレンペルのケースでは、1 つ 125 ユーロの案内板を 8 つ作成するため 1000 ユーロが必要であったといい、これは主に寄付によって賄われたという。ディトマルシェン郡は、今日も低地ドイツ語を日常的によく使う

地域の 1 つであるが、案内板設置の活動は広がりを見せておらず、クレンペルでの設置以降は、2019 年に郡都市のハイデ (dt. Heide, nd. Heid) において二言語案内板が導入されたのみであるという。

低地ドイツ語の使用領域という問題には、地域言語・少数言語憲章の第 13 条が対応する。13 条は、経済生活および社会生活、すなわち私経済領域 (dt. privatwirtschaftliche Sphäre, Richter 2011: 324) についての条項である。その具体的な内容は、地域言語・少数言語の使用を妨げる規定・習慣を取り除くことと、地域言語・少数言語を使用する際の心理的な負担を取り除くことでその使用を勧奨することに二分される (Richter 2011: 325)。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州も低地ドイツ語の使用を妨げる規則・慣習に反対する 1.a 項[14]と 1.c 項[15]と、低地ドイツ語の使用を促進する 1.d 項[16]を義務として引き受けている。しかし、話者集団は 2014 年の評価で 1.d 項の達成状況について、国による刺激・提供が欠けているという評価を与えており、さらなる国の支援を求めている (BfN 2014: 46)。一方で政府は同じ条項の達成状況

[14] In Bezug auf wirtschaftliche und soziale Tätigkeiten verpflichten sich die Vertragsparteien, im ganzen Land, [...] jede Bestimmung zu entfernen, die den Gebrauch von Regional- oder Minderheitensprachen in Urkunden betreffend das wirtschaftliche oder soziale Leben, insbesondere Arbeitsverträge, sowie in technischen Schriftstücken wie Gebrauchsanweisungen für Erzeugnisse oder Anlagen ungerechtfertigt verbietet oder einschränkt. (経済的・社会的諸活動に関して、憲章批准国は、国全体において、(中略) 経済的・社会的生活、特に労働契約にかかる公文書ならびに製品・施設の取扱説明書のような技術的文書において、地域言語・少数言語の使用を不当に禁ずる、または制限するあらゆる規定を取り除く義務を負う) (BfN 2014: 45)

[15] In Bezug auf wirtschaftliche und soziale Tätigkeiten verpflichten sich die Vertragsparteien, im ganzen Land, [...] Praktiken entgegenzutreffen, die den Gebrauch von Regional- oder Minderheitensprachen im Zusammenhang mit wirtschaftlichen oder sozialen Tätigkeiten behindern sollen. (経済的・社会的諸活動に関して、憲章批准国は、国全体において地域言語・少数言語の使用を経済的・社会的諸活動に関連して妨げる方法に反対する義務を負う) (BfN 2014: 46)

[16] In Bezug auf wirtschaftliche und soziale Tätigkeiten verpflichten sich die Vertragsparteien, im ganzen Land, [...] den Gebrauch von Regional- oder Minderheitensprachen durch andere als die unter den Buchstaben a bis c genannten Mittel zu erleichtern und/oder dazu zu ermutigen. (経済的・社会的諸活動に関して、憲章批准国は、国全体において、項目 a から c で挙げられたものとは異なる手段で地域言語・少数言語の使用を促進・勧奨する義務を負う) (BfN 2014: 46)

について、経済・社会的諸活動には限られた範囲でしか介入できないとしているものの、ヨーロッパ評議会は公的機関による経済的・社会的生活における低地ドイツ語使用を援助する措置が存在しないことを指摘しており、何らかの措置を行うことを求めている (BfN 2014: 46)。

2. 低地ドイツ語の動詞形態

2 章では、3 章から始まる低地ドイツ語の動詞統語論についての議論に先駆け、北低地ザクセン方言の動詞形態を論じる。本章の構成は、以下の通りである。2.1 節から 2.3 節では、弱変化動詞、強変化動詞、話法の助動詞の順にその変化を論じる。2.4 節と 2.5 節では、低地ドイツ語の動詞構文である完了形と受動態を扱い、そこで用いられる完了の助動詞と受動の助動詞の変化を見る。2.6 節では、文法化の程度が低い、時制・モダリティ・アスペクトに関わるその他の構文を扱う。

2.1. 弱変化動詞

本節では、低地ドイツ語の動詞のうち、最も規則的で生産的な動詞カテゴリである弱変化動詞の変化を概観する。低地ドイツ語の動詞定形は、時制、数、人称によって屈折する。時制は現在と過去の 2 つが、数は単数と複数の 2 つが、人称は 1 人称から 3 人称までの 3 つが区別される。動詞定型の語尾は、この 3 つのカテゴリに応じて変化し、それが動詞語幹に付けられることで動詞定形が形成される。表 2-1 に、低地ドイツ語の弱変化動詞である *maken* 「作る、する」の動詞定形を載せる。表 2-1 から表 2-3 では、低地ドイツ語の動詞活用への理解を容易にするため、ハイフンによって動詞語幹と語尾を分けて表示する。

現在形	単数 1 人称	*maak*
	単数 2 人称	*maak-st*
	単数 3 人称	*maak-t*
	複数 1, 2, 3 人称	*maak-t*
過去形	単数 1 人称	*maak*
	単数 2 人称	*maak-st*
	単数 3 人称	*maak*
	複数 1, 2, 3 人称	*mak-en*

表 2-1：nd. *maken*「作る、する」の動詞定形

動詞の語幹は、不定詞から不定詞語尾 *-en* を取り除くことにより導くことができる (*maken* → *maak*)。表 2-1 には動詞語幹として *mak* と *maak* の 2 つの表記があるが、どちらも [mɔ:k] と発音され、2 種類の語幹がある訳ではない。今日の低地ドイツ語の正書法では、開音節の長母音は母音一字で表記し (*maken* [ˈmɔ:kən])、閉音節の長母音は母音二字で表記する (*maak* [mɔ:k])。

表 2-1 を見ると、単数では 1 人称、2 人称、3 人称で異なる語尾が現

れるのに対し (現在 *ik maak/du maak-st/he maak-t*、過去 *ik maak/du maak-st/he maak*)、複数では語尾が統一されていることが分かる (現在 *wi/ji/se maak-t*、過去 *wi/ji/se mak-en*)[17]。これは、統一複数 (dt. Einheitsplural) と呼ばれる北海ゲルマン語の形態的特徴であり、動詞の統一複数は英語、フリジア語 (wfr. *wy/jimme/sy meitsje*、fer. *wi/jam/jo maage*)、オランダ語 (ndl. *wij/jullie/zij maken*) においても見られる。現在形統一複数の語尾は、1.2 節で述べたように東低地ドイツ語と西低地ドイツ語を分ける基準であり、西低地ドイツ語に分類される北低地ザクセン方言は、現在形統一複数語尾 *-t* を取る。時制の違いに注目すると、単数 1 人称と単数 2 人称では、現在形と過去形で共通した語尾が用いられるのに対し、単数 3 人称と統一複数では現在形と過去形で異なる語尾が用いられる。弱変化動詞は本来、歯音接尾辞を用いて過去形を表示するゲルマン語の動詞カテゴリであり、低地ドイツ語でも過去形の歯音接尾辞 (engl. *-(e)d*、dt. *-te*) は、中低ドイツ語期までは保持されていたが、新低ドイツ語期に脱落した。そのため、単数 1 人称と単数 2 人称では、現在形と過去形で同じ語尾が使用され、語形から時制を区別することができない。一方で単数 3 人称と統一複数では、異なる語尾が用いられるため時制の区別が保たれる。

動詞の不定形には、不定詞、現在分詞、過去分詞がある (表 2-2)。動詞の不定詞は、前述のように語幹と語尾 *-en* により形成される。現在分詞は、本来の語尾である *-end* の *d* が先行する *n* と同化するため、常に不定詞と同じ形になる (Stellmacher 1983: 268)。弱変化動詞の過去分詞は接尾辞 *-t* によって形成される。標準ドイツ語やオランダ語と異なり、過去分詞には接頭辞 *ge-* が付かない[18]。これは統一複数と並ぶ北海ゲルマン語の形態的特徴の 1 つであり、英語およびフリジ

[17] 西低地ドイツ語低地ライン方言では、複数形の語尾が 1 人称および 3 人称と 2 人称の間で異なる (Stellmacher 1983: 240)。
[18] 南ヴェストファーレン方言・オストファーレン方言・マルク方言では過去分詞の接頭辞*(g)e-*が保たれている (Stellmacher 1983: 268)。

ア語 (wfr. *makke*、fer. *maaget*) とも共通する特徴である。

不定詞	*mak-en*
現在分詞	*mak-en*
過去分詞	*maak-t*

表 2-2：nd. *maken*「作る、する」の不定詞、現在分詞、過去分詞

今日の低地ドイツ語には、接続法 I および II は残っていない。かつての接続法が担っていた意味は、過去形、過去完了形、その他の助動詞が引き継いでいる (2.6 節参照)。2 人称に対する命令形には、単数と複数が存在する。単数は無語尾であり、複数は語尾 *-t* を取る (表 2-3)[19]。

命令形	単数 2 人称	*maak*
	複数 2 人称	*maak-t*

表 2-3：nd. *maken*「作る、する」の命令形

標準ドイツ語において、語幹が *d* / *t* で終わる弱変化動詞は、現在形の語尾 *-st* / *-t*、過去形の歯音接尾辞 *-te*、過去分詞の接尾辞 *-t* を取る場合、歯茎音の連続を避けるため、シュワーが挿入されるが (dt. *arbeit-e-st* 「(君は) 働く」) 、低地ドイツ語では、 *arbeiden* 「働く」、*achten* 「尊敬する」のように、語幹が *d* または *t* で終わる場合でもシュワーは挿入せず、語尾 *-st* / *-t* を直接付ける (nd. *arbeid-st*、*acht-st*) (表 2-4)。この場合、*t* で終わる語幹に語尾 *-t* を付ける場合、語幹 *t* と語尾 *-t* の連続は単なる短子音として読まれるため、正書法上、語尾 *-t* は書かれない (*acht* + *-t* → *acht*) (表 2-4)。

[19] 北低地ザクセン方言のうち、シュレースヴィヒ方言では命令形単数を命令形複数においても使用することがある (Bock 1933: 95、Jensen 2007)。

不定詞		*arbeiden*	*achten*
現在形	単数 1 人称	*arbeid*	*acht*
	単数 2 人称	*arbeidst*	*achtst*
	単数 3 人称	*arbeidt*	*acht*
	統一複数	*arbeidt*	*acht*
過去形	単数 1 人称	*arbeid*	*acht*
	単数 2 人称	*arbeidst*	*achtst*
	単数 3 人称	*arbeid*	*acht*
	統一複数	*arbeiden*	*achten*
過去分詞		*arbeidt*	*acht*

表 2-4：nd. *arbeiden*「働く」、nd. *achten*「尊敬する」の変化表

低地ドイツ語には、音韻的な理由から上記の変化と異なる変化をする動詞もある。*hoosten*「せきをする」に代表される、語幹が*-st* で終わる動詞は、現在形と過去形の単数 2 人称において無語尾になる。これは、重音脱落により *-st-st* という音連続が *-st* に短縮されるためである (*hoost* + *-st* → *hoost*) (表 2-5)。また、*hanneln*「行動する」のように語幹の最終音節にシュワーがある動詞は (*-el*、*-er*)、シュワーを持つ音節の連続を避けるため、不定詞および過去形複数の語尾 *-en* が *-n* となる (*hannel* + *-en* → *hanneln*) (表 2-5)。*reken*「計算する」のように語幹の最終音節がアクセントを持たない *-en* を含む弱変化動詞はさらに、語幹の *-en* が不定詞および過去形複数の語尾 *-en* と融合し、 *-en* となる (*reken* + *-en* → *reken*) (表 2-5)。そのため *reken* のような動詞では、語尾 *-en* を取る語形が無語尾の語形 (現在形単数 1 人称、過去形単数 1 人称、過去形単数 3 人称) と同じ形になる。

不定詞		*hoosten*	*hanneln*	*reken*
現在形	単数 1 人称	*hoost*	*hannel*	*reken*
	単数 2 人称	*hoost*	*hannelst*	*rekenst*
	単数 3 人称	*hoost*	*hannelt*	*rekent*
	統一複数	*hoost*	*hannelt*	*rekent*
過去形	単数 1 人称	*hoost*	*hannel*	*reken*
	単数 2 人称	*hoost*	*hannelst*	*rekenst*
	単数 3 人称	*hoost*	*hannel*	*reken*
	統一複数	*hoosten*	*hanneln*	*reken*
過去分詞		*hoost*	*hannelt*	*rekent*

表 2-5：nd. *hoosten*「せきをする」、nd. *hanneln*「行動する」、nd. *reken*「計算する」の変化表

低地ドイツ語では、一部の弱変化動詞が形態的に不規則な変化をする。*denken*「考える」、*bringen*「持ってくる」は、過去形と過去分詞で *n* が脱落した語幹が用いられる (nd. *ik dach*、*ik broch*)。表 2-6 に *denken* と *bringen* の変化表を載せる。

不定詞		*denken*	*bringen*
現在形	単数 1 人称	*denk*	*bring*
	単数 2 人称	*denkst*	*bringst*
	単数 3 人称	*denkt*	*bringt*
	統一複数	*denkt*	*bringt*
過去形	単数 1 人称	*dach*	*broch*
	単数 2 人称	*dachst*	*brochst*
	単数 3 人称	*dach*	*broch*
	統一複数	*dachen*	*brochen*
過去分詞		*dacht*	*brocht*

表 2-6：nd. *denken*「考える」、nd. *bringen*「持ってくる」の変化表

この他に、現在形の単数 2 人称、単数 3 人称、過去形、過去分詞において、幹母音の短母音化を示す弱変化動詞がある。また、現在形の単数 2 人称、単数 3 人称、過去形、過去分詞において、短母音化に加え、異なる子音が用いられる弱変化動詞もある。前者には *stöten*「突く」が、後者には *köpen*「買う」が例として挙げられる。表 2-7 に *stöten* と *köpen* の変化を載せる。

不定詞		*stöten*	*köpen*
現在形	単数 1 人称	*stööt*	*kööp*
	単数 2 人称	*stöttst*	*köffst*
	単数 3 人称	*stött*	*köfft*
	統一複数	*stööt*	*kööpt*
過去形	単数 1 人称	*stött*	*köff*
	単数 2 人称	*stöttst*	*köffst*
	単数 3 人称	*stött*	*köff*
	統一複数	*stötten*	*köffen*
過去分詞		*stött*	*köfft*

表 2-7：nd. *stöten*「突く」、nd. *köpen*「買う」の変化表

2.2. 強変化動詞

強変化動詞は、母音交替により時制を表示する動詞である。低地ドイツ語の弱変化動詞が本来の過去形語尾である歯音接尾辞を失ったのに対し、強変化動詞は母音交替を保っており、現在形、過去形、過去分詞で異なる幹母音が用いられる。また、強変化動詞の過去分詞は接尾辞 *-en* によって形成される。表 2-8 に強変化動詞 *sitten*「座っている」と *fallen*「落ちる」の変化形を載せる。

不定詞		*sitten*	*fallen*
現在形	単数 1 人称	*sitt*	*fall*
	単数 2 人称	*sittst*	*fallst*
	単数 3 人称	*sitt*	*fallt*
	統一複数	*sitt*	*fallt*
過去形	単数 1 人称	*seet*	*full*
	単数 2 人称	*seetst*	*fullst*
	単数 3 人称	*seet*	*full*
	統一複数	*seten*	*fullen*
過去分詞		*seten*	*fallen*

表 2-8：nd. *sitten*「座っている」、nd. *fallen*「落ちる」の変化表

多くの強変化動詞では、現在形の単数 2 人称、単数 3 人称においても母音交替が見られる。また、一部の強変化動詞は、不定詞と過去分詞の語尾が *-en* ではなく *-n* となる。表 2-9 に、現在形の単数 2 人称と 3 人称で母音交替を示す *spreken*「話す」、*geven*「与える」を載せ、表 2-10 に不定詞と過去分詞の語尾に *-n* を取る *gahn*「行く」、*stahn*「立っている」の変化を載せる。

不定詞		*spreken*	*geven*
現在形	単数 1 人称	*spreek*	*geev*
	単数 2 人称	*sprickst*	*giffst*
	単数 3 人称	*sprickt*	*gifft*
	統一複数	*spreekt*	*geevt*
過去形	単数 1 人称	*sprook*	*geev*
	単数 2 人称	*sprookst*	*geevst*
	単数 3 人称	*sprook*	*geev*
	統一複数	*sproken*	*geven*
過去分詞		*spraken*	*geven*

表 2-9：nd. *spreken*「話す」、nd. *geven*「与える」の変化表

不定詞		*gahn*	*stahn*
現在形	単数 1 人称	*gah*	*stah*
	単数 2 人称	*geihst*	*steihst*
	単数 3 人称	*geiht*	*steiht*
	統一複数	*gaht*	*staht*
過去形	単数 1 人称	*gung*	*stunn*
	単数 2 人称	*gungst*	*stunnst*
	単数 3 人称	*gung*	*stunn*
	統一複数	*gungen*	*stunnen*
過去分詞		*gahn*	*stahn*

表 2-10：nd. *gahn*「行く」、nd. *stahn*「立っている」の変化表

2.3. 話法の助動詞

話法の助動詞は、可能、義務、意志などのモダリティを表す動詞である。話法の助動詞では、現在形において単数 3 人称に語尾 *-t* が付かず、単数と複数で異なる幹母音が用いられる。過去形および過去分詞でも現在形と異なる幹母音が用いられ、この点で強変化動詞に似るが、一方で過去分詞は弱変化動詞と同じく語尾 *-t* により形成される。表 2-11 に話法の助動詞 *könen* 「できる」、*möten*「しなければならない」、*mögen*「かもしれない」の変化を載せる。

不定詞		*könen*	*möten*	*mögen*
現在形	単数 1 人称	*kann*	*mutt*	*mag*
	単数 2 人称	*kannst*	*muttst*	*magst*
	単数 3 人称	*kann*	*mutt*	*mag*
	統一複数	*köönt*	*mööt*	*möögt*
過去形	単数 1 人称	*kunn*	*muss*	*müch*
	単数 2 人称	*kunnst*	*musst*	*müchst*
	単数 3 人称	*kunn*	*muss*	*müch*
	統一複数	*kunnen*	*mussen*	*müchen*
過去分詞		*kunnt*	*musst*	*mücht*

表 2-11: nd. *könen*「できる」、nd. *möten*「しなければならない」、nd. *mögen*「かもしれない」の変化表

schölen「すべき」のように、語幹が *l* で終わる話法の助動詞は、単数 2 人称において、語幹の *l* が語尾 *-st* に同化する (*schall* + *-st* → *schasst*、*schull* + *-st* → *schusst*)。また、 *wüllen*「したい」は、例外的に現在形単数 2 人称で語尾 *-st* ではなく *-t* を取る。表 2-12 に話法の助動詞 *schölen*、*wüllen* の変化を載せる。

不定詞		*schölen*	*wüllen*
現在形	単数 1 人称	*schall*	*will*
	単数 2 人称	*schasst*	*wullt*
	単数 3 人称	*schall*	*will*
	統一複数	*schöölt*	*wüllt*
過去形	単数 1 人称	*schull*	*wull*
	単数 2 人称	*schusst*	*wusst*
	単数 3 人称	*schull*	*wull*
	統一複数	*schullen*	*wullen*
過去分詞		*schullt*	*wullt*

表 2-12：nd. *schölen*「すべき」、nd. *wüllen*「したい」の変化表

2.4. 完了形

本節では、重要な動詞構文である完了形と完了の助動詞として用いられる *wesen*「である」と *hebben*「持っている」の活用を扱う。まず表 2-13 に *wesen* の変化を載せる。*wesen* は補充動詞であり、複数の語幹からパラダイムが構成されている。現在形の単数 1 人称および 2 人称では、*b-* から始まる語形が用いられ (nd. *bün*/*büst*)、単数 3 人称で *is*、複数で *sünd* という語形が現れる。一方で、過去形の語幹は *weer*、過去分詞は *ween* となる。

不定詞		*wesen*
現在形	単数 1 人称	*bün*
	単数 2 人称	*büst*
	単数 3 人称	*is*
	統一複数	*sünd*
過去形	単数 1 人称	*weer*
	単数 2 人称	*weerst*
	単数 3 人称	*weer*
	統一複数	*weren*
過去分詞		*ween*

表 2-13：nd. *wesen*「である」の変化表

hebben は、本動詞として「持っている」という意味を表す。*hebben* の変化を表 2-14 に示す。*hebben* は、現在形では単数 2 人称および 3 人称で短縮された形式 (nd. *hest*/*hett*) が用いられる。過去形では *harr* が語幹として用いられ、過去分詞は *hatt* となる。

不定詞		*hebben*
現在形	単数 1 人称	*heff*
	単数 2 人称	*hest*
	単数 3 人称	*hett*
	統一複数	*hebbt*
過去形	単数 1 人称	*harr*
	単数 2 人称	*harrst*
	単数 3 人称	*harr*
	統一複数	*harrn*
過去分詞		*hatt*

表 2-14：nd. *hebben*「持っている」の変化表

低地ドイツ語の完了形は、完了の助動詞 *wesen* または *hebben* と過去分詞の組み合わせからなる。完了の助動詞の選択の基準は、基本的には標準ドイツ語と同じで、移動または状態変化を表す自動詞で *wesen* が、それ以外の自動詞と全ての他動詞において *hebben* が助動詞として用いられる。しかしながら、低地ドイツ語では移動を表す動詞が移動の着点を伴う場合は *wesen* だが (1)、伴わない場合は *hebben* が用いられる傾向にあり (Schl.-Holst. Wb. Bd. 2, Sp. 680) (2)、習慣的な行為を表す場合にも *hebben* が用いられる傾向にあるなど (Kakuchi/Wolf 2020: 33) (3)、助動詞の選択は標準ドイツ語のそれと全く同じという訳ではない。その他、低地ドイツ語の完了形では、標準ドイツ語やオランダ語に見られる、不定詞を支配する話法の助動詞がさらに完了の助動詞に支配される場合、過去分詞のかわりに不定詞を用いるという代替不定詞 (dt. Ersatzinfinitiv) という現象が見られない。この場合、低地ドイツ語では話法の助動詞の過去分詞が用いられる (Thies 2017[3]: 61) (4)。

(1) nd. *He is to Huus lopen.*

er ist nach Hause gelaufen

彼は家まで走った

(Schl.-Holst. Wb. Bd. 2, Sp. 680)

(2) nd. *Ik heff lopen.*

ich habe gelaufen

私は走った

(Schl.-Holst. Wb. Bd. 2, Sp. 680)

(3) nd. *Ik hebb hier in S. na de School gahn.*

ich habe hier in S. zu der Schule gegangen

私はここ S で学校に通った

(Kakuchi/Wolf 2020: 32)

(4) nd. *Dat harr he ok schrieven kunnt.*

das hätte er auch schreiben-INF können

それを彼は書くこともできたのに

(Thies 2017[3]: 61)

2.5. 受動態

動詞の受動態は、受動の助動詞 *warrn* と本動詞の過去分詞により、迂言的に形成される。受動の助動詞 *warrn* は、本動詞としては「なる」という意味を表す。表 2-15 に *warrn* の変化を載せる。動作主は、随意的に前置詞 *vun* (dt. *von*、engl. *by*) によって表される (5)。

不定詞		*warrn*
現在形	単数 1 人称	*warr*
	単数 2 人称	*warrst*
	単数 3 人称	*warrt*
	統一複数	*warrt*
過去形	単数 1 人称	*woor*
	単数 2 人称	*woorst*
	単数 3 人称	*woor*
	統一複数	*woorn*
過去分詞		*worrn*

表 2-15：nd. *warrn*「なる」の変化

(5) nd. *He is <u>vun en Hund</u> <u>beten</u> <u>worrn</u>.*

er ist von einem Hund gebissen worden

彼は犬に噛まれた

Thies (2017[3]: 86)

また、*wesen* と過去分詞により、状態受動が形成される。*warrn* を用いた受動態 (動作受動) とは異なり、状態受動ではある行為の結果が表される。

(6) nd. *De Posten is al besett.*

die Stellung ist schon besetzt

その役職はすでに埋まっている

Thies (2017[3]: 86)

2.6. その他の構文

本節では、低地ドイツ語において未来時制、接続法のモダリティ、アスペクトを表す構文を扱う。完了形や受動態と異なり、これらの使用は義務的ではなく、単に副詞を用いて表現されることも可能な場合があり、文法化の度合いが低い。

低地ドイツ語には、動詞形態としての未来時制は存在しないが、未来の意味を表す構文がいくつか存在する。未来を表す構文には、話法の助動詞 *wüllen*、*schölen* および動詞 *warrn* が助動詞として不定詞を支配する構文が挙げられる (7) (8) (9)。Thies (2017[3]: 59) によると、*wüllen* は行為者の意志によってその行為が引き起こされる場合に、*warrn* はその行為が確実に起こると想定される場合に、*schölen* は、それ以外の場合に用いられるという。

(7) nd. *Gott, de Herr, will dat woll richten.*

Gott der Herr will es wohl richten-INF

主である神がそれを正すだろう

Thies (2017[3]: 59)

(8) nd. *Dat schall he so maken.*

dat soll er so machen-INF

それを彼はそのように行うだろう

Thies (2017[3]: 59)

(9) nd. *Dat warrt regen.*

es wird regnen-INF

雨が降るだろう

Thies (2017[3]: 59)

未来時制を表す上記の構文は常に用いられるわけではない。未来時

制は、動詞の現在形と未来の時点を表す時の副詞を用いることによっても表すことが可能である (10)。

(10) nd. *Dat regent morrn.*
es regnet morgen
明日、雨が降る

2.1 節で見たように、現在の低地ドイツ語に接続法は存在しない。かつての接続法が担っていた意味は、今日では直説法 (11) (12) を用いるか、助動詞 *warrn* の過去形である *woor* を用いることにより表される (13)。間接話法を担っていた接続法 I と非現実の意味を担っていた接続法 II の区別は失われており、接続法の代用表現によってそのどちらも表すことができる。

(11) nd. *He see, he keem nu.*
er sagte er kam nun
彼は今から来ると言った
(Thies 2017[3]: 81)

(12) nd. *He see mi, he weer ankamen.*
er sagte mir er war angekommen
彼はすでに来ていると私に言った
(Thies 2017[3]: 81)

(13) nd. *He see mi, he woor bald t(o)rüchkamen.*
er sagte mir er wurde bald zurückkommen-INF
彼はもうすぐ戻ると私に言った
(Thies 2017[3]: 81)

低地ドイツ語では、動詞のアスペクトを表す場合、さまざまな動詞

構文によってアスペクトを表すことができる。本節では、始動相、進行相、継続相を表す構文を扱う。

始動相は、標準ドイツ語と同じく、「始まる、始める」を意味する動詞である *anfangen* および *begünnen* と *to*-不定詞 (dt. *zu*-不定詞) との組み合わせによって表すことができる (14)。*liggen*「横たわっている」など、人間や動物などの姿勢を表す動詞である姿勢動詞の始動相は、動詞 *gahn*「行く」によって表すことも可能である (15)。

(14) nd. *He fangt an to plögen.*
er fängt an zu pflügen-INF
彼は耕し始める
(Thies 2017[3]: 67)

(15) nd. *Nu gah doch liggen!*
nun geh doch liegen-INF
さあ横になりなさい
(Thies 2017[3]: 67)

動詞の進行相は、前置詞と定冠詞の融合形である *an't* が名詞化された動詞を支配し、動詞 *wesen* とともに用いられる構文によって表すことができる (16)。これは標準ドイツ語の *am*-進行形に準ずるものである。標準ドイツ語に無い表現として、*biwesen*「〜しているところだ」という動詞による進行形 (17) と、姿勢動詞による進行形 (18) が挙げられる。

(16) nd. *He is an't Plögen.*
er ist am pflügen
彼は耕しているところだ
(Thies 2017[3]: 72)

(17) nd. *He is bi to plögen.*

er ist bei zu pflügen-INF

彼は耕しているところだ

(Thies 2017[3]: 72)

(18) nd. *He sitt to nadenken.*

er sitzt zu nachdenken-INF

彼は熟考している

(Thies 2017[3]: 71)

動作の継続は、*biblieven*「～し続ける」と *to*-不定詞の組み合わせによって表すことができる (19)。姿勢動詞の継続相は、動詞 *blieven*「とどまる」と接頭辞 *be-* を伴う姿勢動詞の組み合わせで表すことができる (20)。

(19) nd. *He blifft bi to plögen.*

er bleibt bei zu pflügen-INF

彼は耕し続ける

(Thies 2017[3]: 70)

(20) nd. *He bleev bestahn.*

er blieb be-stehen-INF

彼は立ち続けていた

(Thies 2017[3]: 70)

低地ドイツ語のアスペクト表現には 2 つの動詞を並列させることによりアスペクトを表す疑似並列と呼ばれる構文も存在する。低地ドイツ語の疑似並列は、本稿の 5 章において詳しく扱う。

3. 低地ドイツ語における *doon*-迂言形

3.1. 導入

3 章は、低地ドイツ語の動詞統語論のテーマとして *doon*-迂言形を取り上げ、その特徴を明らかにすることを目的とする。*doon*-迂言形とは、低地ドイツ語の動詞 *doon*「する」が助動詞として本動詞の不定詞を支配する形式を指す。(1) に Lindow et al. (1998) からの例を載せる。

(1) nd. *Wenn Noot is, is nüms dar, de uns helpen deit.*
wenn Not ist ist niemand da der uns helfen-INF tut
困った時、私たちを助けてくれる人は 1 人もいない
Lindow et al. (1998: 107)

doon は語源的に英語の *do*、オランダ語の *doen*、標準ドイツ語の *tun* に対応する動詞である。*doon* は常に 1 音節であり、語幹の母音が交替する (表 3-1)。

不定詞		*doon*
現在形	単数 1 人称	*do*
	単数 2 人称	*deist*
	単数 3 人称	*deit*
	統一複数	*doot*
過去形	単数 1 人称	*dä (dee)*
	単数 2 人称	*dääst (deest)*
	単数 3 人称	*dä (dee)*
	統一複数	*dään (deen)*
過去分詞		*daan*

表 3-1：nd. *doon*「する」の変化表
(Lindow et al. 1998: 107; カッコ内は Thies 2017[3]: 112 における表記)

「不定詞＋doon」構造の迂言形は、*doon* と同系の動詞が失われた北ゲルマン語には存在しないが、西ゲルマン語においては多くの言語・方言において見られる。この構文で *doon* に当たる動詞に語彙的意味が存在するのは、オランダ語 *doen*-迂言形の使役用法のみであり、それ以外は語彙的意味が希薄である。西ゲルマン諸語において、この迂言形には様々な用法が確立している。標準ドイツ語の *tun*-迂言形は、本動詞の話題化および焦点化に使用される。その一方で、独自の文法化を被った英語の *do*-迂言形は、一般動詞の否定文と疑問文の形成などに使用される。これに対して、ドイツ語諸方言における迂言形には、本動詞の話題化・焦点化用法が共通している他は、明確な使用条件が存在しない。それらは、文法化の程度も異なり、他の現象とも関わりながら複雑な使用状況を呈する。西ゲルマン諸語における「不定詞＋tun」迂言形の諸相については、4 章で詳しく扱う。

doon-迂言形は、先行研究においては共時的用法や通時的発達など、

1 つの視点に絞って論じられ、その議論も低地ドイツ語の中で終わってしまうことが多い。本章では、北低地ザクセン方言を調査対象として、筆者が独自に作成したコーパスによる調査と、他方言の迂言形との比較により、複数の視点から *doon*-迂言形の特徴を明らかにすることを試みる。3.2 節では、共時的コーパスを用い、副文に偏る *doon*-迂言形を、先行研究で論じられたモダリティ・アスペクト・音韻・形態の 4 つの観点から調査する。続く 3.3 節では、通時的コーパス調査を行い、19 世紀の *doon*-迂言形の分布と歯音接尾辞の衰退との関係を探る。3.4 節では、*doon*-迂言形の特徴をより広い視点で捉えるため、上部ドイツ語の迂言形の特徴を考える。そして 3.5 節で、*doon*-迂言形の *doon* が接辞的性格を帯びており、この迂言形が文法化の途上にあることを主張する。

3.2. *doon*-迂言形が使用される共時的要因

doon-迂言形の共時的用法については、いくつかの先行研究が存在する。先行研究間では見解が一致しない点もあるが、*doon*-迂言形が副文で広く使用される点 (Meyer 1983[2]: 104) と *doon*-迂言形が完了、受動、話法の助動詞と共起しない点 (Rohdenburg 1986: 88-89) は、多くの先行研究で一致している。今回、筆者は低地ドイツ語の方言作家ルードルフ・キーナウ (Rudolf Kinau、1887-1975) の作品である *Bi uns an'n Diek* (『堤防とわれら』[20](タイトルは筆者訳) Kinau 1973、総語数 34,268)、『グリム童話』の低地ドイツ語訳[21] (Grimm 1993, 1995、総語数 42,304) および『ハリー・ポッターと賢者の石』 (以降『賢者の石』と表記) の低地ドイツ語訳 (Rowling 2002、総語数 89,194) から、コーパスを作成した。ここでは、テキストタイプによる差を調べるため、原作作品、標準ドイツ語からの翻訳、英語からの翻訳の 3 種類を取り上げている。このコーパスでは、*doon*-迂言形が他の助動詞 (*wesen*、*hebben*、*warrn*、話法の助動詞) と共起する例は 1 例も存在せず、定動詞を右枠に置く副文に *doon*-迂言形が偏る分布が見られた (表 3-2)。

	堤防とわれら	グリム童話	賢者の石	計
主文	6	2	8	16
副文	149	49	344	542
計	155	51	352	558

表 3-2 : *doon*-迂言形が使用された統語的環境

主文の迂言形は 16 例中 14 例が本動詞を前域に置く例 (2) であった。4 章でも述べるが、本動詞の話題化・焦点化は他の西ゲルマン諸語にも存在し、*doon*-迂言形に特徴的とは言えない。残りの例は本動詞を右

[20] 原語に忠実に訳すと『堤防に面した我らの故郷』となる。
[21] 完訳ではない。翻訳されているメルヘンの数は 26 である。

枠に置く例 (3) で、標準ドイツ語に現れないが、16 例中 2 例と用例が少ない。そのため、以下では副文の *doon*-迂言形に焦点を当てる。

(2) nd. … *van em snacken doot se all!* (本動詞前域：14 例)
von ihm reden-INF tun sie alle
彼について話すということを、彼らみんながしている
Kinau (1973: 96)

(3) nd. *Dat Kind sehg so schöön ut un dee den Jäger barmen*; (本動詞右枠：2 例)
das Kind sah so schön aus und tat den Jäger erbarmen-INF
その子はとても美しかったので猟師に哀れみを起こさせた
Grimm (1995: 10)

9 割以上を占める副文の *doon*-迂言形は、文法書などでは「強調」(‚verstärken' Lindow et al. 1998: 107, ‚Betonung' Thies 2017[3]: 93) や「表現位置」[22] (‚Ausdrucksstelle' Saltveit 1983: 303) のような曖昧な用語で説明されることが多い。一次資料を用いて調査を行った Keseling (1968) と Rohdenburg (1986, 2002) の 3 つの研究では、合計で 4 つの要因が提示されている。

インフォーマント調査を行った Keseling (1968) は、非現実の意味を帯びた *as wenn*-節 (dt. *als wenn*) において、高い頻度で *doon*-迂言形が使用されるというデータから、*doon*-迂言形の使用には非現実的モダリティが関与していると指摘した。加えて、*doon*-迂言形が具象的 (anschaulich) な動詞[23]とよく共起するという観察から、*doon*-迂言形は

[22] 「表現位置」とは、副文において定動詞に先行した、後ろから 2 語目の位置のことを指し、この位置は、分離動詞において強勢を持った不変化詞の位置からも分かるという (Saltveit 1983: 302-303)。この主張は、強勢を考慮に入れた点で Rohdenburg (1986) の韻律用法を先取りしているとも言える。
[23] Keseling (1968) は、*laufen*「走る」、*rennen*「走る」、*springen*「飛び跳ねる」、*stürzen*「転ぶ」など具体的な様態を伴った動詞がこれに属するとしている。

生き生きとした描写の際に使われる、一種の進行形 (etwas wie eine Verlaufs- oder Vorgangsform) であるとし (Keseling 1968: 149-150)、進行相のアスペクトをもう 1 つの要因として提示した。Keseling (1968) の意味的な 2 要因に対して、Rohdenburg (1986, 2002) は別の 2 要因を提示した。まず Rohdenburg (1986) は、主強勢が文末から 3 音節目に来ることが好まれる韻律構造 (‒◡◡) を低地ドイツ語に想定し (図 6)、(4a) と (4b) ではそのような韻律構造に沿う (4a) が好まれると主張した。Rohdenburg (1986) は、1 音節の *doon* が本動詞に後続することで最適な韻律が実現されるとして、*doon*-迂言形の音韻的要因に基づく韻律的用法を提示した。

	Hauptakzent	Tonhöhenbewegung	
	Drittletzte	Zweitletzte	Letzte
… dat Willem as Schipper up unsen Neptun	BLIE- ‒	-ben ◡	dä. ◡

図 6：Rohdenburg (1986) が主張する低地ドイツ語において最適な韻律構造

(4a) nd. … *dat Willem as Schipper up unsen Neptun* <u>*BLIEben*</u> <u>*dä*</u>. (‒◡◡)
dass Willem als Kapitän auf unserem Neptun bleiben-INF tat
ヴィレムが我々のネプチューン号の船長としてとどまったこと
Rohdenburg (1986: 90)

(4b) nd. … *dat Willem as Schipper up unsen Neptun* <u>*BLEEV*</u>. (‒)
dass Willem als Kapitän auf unserem Neptun blieb

さらに Rohdenburg (1986, 2002) は、低地ドイツ語の弱変化動詞が標準ドイツ語に比べ、曖昧な形態をとっていることを指摘した。2.1 節で

述べたように、低地ドイツ語の弱変化動詞は過去形で歯音接尾辞が脱落したため、現在形と過去形の区別が曖昧なものになる (nd. *ik maak* 「私はする・した」、nd. *du maakst*「君はする・した」)。これに対して、不規則に語形変化する *doon* は (表 3-1)、語幹の交替により常に過去形と現在形が区別される。そのため *doon* を定動詞として使用する *doon*-迂言形は弱変化動詞の曖昧な形態を明示して時制を表すことができるとして、Rohdenburg (1986, 2002) は、形態的な要因に基づく時制表示用法を提示した。

先行研究では *doon*-迂言形の使用に関し、アスペクト・モダリティ・音韻・形態という 4 つの要因が提示されてきた。4 つ全ての要因がそれぞれの先行研究で認められているという訳ではなく、Rohdenburg (2002: 86) は、*doon*-迂言形に認めうる意味的、語用論的機能はないとしてその意味的要因を否定している。しかし、Rohdenburg (2002) は自身の調査でそれらの要因を取り上げておらず、その主張には疑問が残る。以下では、筆者が作成した現代低地ドイツ語のコーパスを使用し、4 つの要因と *doon*-迂言形の関係を詳しく見ていく。

はじめに、Keseling (1968) が主張する意味的要因の 1 つである非現実のモダリティを見る。低地ドイツ語では定形表現を除いて接続法 I および II が消滅し、現在では動詞の過去形と過去完了形などがその用法を引き継いでいるが (Lindow et al. 1998: 68)、Keseling (1968) は、*doon*-迂言形もまた接続法の用法を引き継ぎ、非現実的な意味の文で多く使用されると主張している。Keseling (1968) が行ったインフォーマント調査では、非現実的文脈として *as wenn*-節が使用されているため、本稿では筆者が作成したコーパスで現れた全ての副文を、非現実的モダリティを表す *as wenn*-節 (5) とその他の 2 つに区分し、それぞれにおける *doon*-迂言形の使用率を調査した。なお、以下の調査では *doon*-迂言形と共起しなかった完了、受動、話法の助動詞および本動詞としての *wesen*、*hebben*、*warrn* は用例数から除いてある。モダリティ調査

の結果を表 3-3 に示す。

(5) nd. *Harry föhl sik, as wenn he to Ies freren dä*. (*as wenn*-節)
Harry fühlte sich als wenn er zu Eis frieren-INF tat
ハリーはこごえて凍ってしまうかのように感じた
Rowling (2002: 231)

	堤防とわれら		グリム童話		賢者の石	
	as wenn-節	その他	*as wenn*-節	その他	*as wenn*-節	その他
迂言形	1	148	0	49	16	328
単純形	5	173	2	522	30	1060
計	6	321	2	571	46	1388
迂言形の割合	16.7%	46.1%	0.0%	8.6%	34.8%	23.6%

表 3-3：*as wenn*-節と *doon*-迂言形の関係

『堤防とわれら』や『グリム童話』では比較に足る *as wenn*-節の用例が集まらなかったが (それぞれ 6、2)、『賢者の石』では *as wenn*-節 34.8%に対してその他 23.6%と、非現実のモダリティを表す文脈で *doon*-迂言形の方がやや使用されやすいという結果が出た。しかし、標準ドイツ語の *als wenn*-節でもっぱら接続法 II が使用されることを考慮すれば、*as wenn*-節とそれ以外の環境の間の 11.2 ポイントという差はそれほど大きな差とは言えないだろう。

非現実のモダリティと並んで Keseling (1968) が提示した意味的要因が、進行相のアスペクトである。同論文ではデータによる裏付けはなされてないため、コーパスに基づいてこの仮説を検証することを試みた。本稿では、まず副文の本動詞から進行相と親和性の高い活動動

詞 (activity verb)[24] を抜き出し、次にそれらを進行相の文脈 (6) とその他の文脈に区分して、それぞれにおける *doon*-迂言形の使用率を調査した。その結果を表 3-4 に示す。

(6) nd. *De Ladens, de Woren butenvör, de Minschen, de hier inköpen dään.*
(進行相)
die Läden die Waren außenvor die Menschen die hier ein kaufen-INF taten
たくさんのお店、外に並べられた商品、そして買い物をしている人々
Rowling (2002: 80)

	堤防とわれら		グリム童話		賢者の石	
	進行相	その他	進行相	その他	進行相	その他
迂言形	7	31	1	7	34	31
単純形	10	41	9	102	78	145
計	17	72	10	109	112	176
迂言形の割合	41.2%	43.1%	10.0%	6.4%	30.4%	17.6%

表 3-4：進行相と *doon*-迂言形の関係

モダリティ調査の結果と同様、『堤防とわれら』や『グリム童話』で

[24] 本稿では *doon* 「する」、*kieken*「見る」、*lachen*「笑う」、*nadenken*「考える」、*seuken*「探す」、*snacken*「話す」、*speln*「演奏する、遊ぶ」、*vertellen*「話す」など何らかの行為を表す動詞が、非有界的な動詞句を成している場合、活動動詞に分類した。したがって、同じ動詞でも動詞句全体の意味から考えて活動動詞に分類した場合 (i) と、分類しなかった場合 (ii) がある。
(i) nd. … *meen Wood, de nu üm Harry rümgung un em munster.*
meinte Wood, der nun um Harry herum ging und ihn musterte
そう言うとウッドはハリーの周りを歩き回りじろじろと見た
Rowling (2002: 116)
(ii) nd. *„Wullt du, dat ik na den Blödigen Baron gah?“*
Willst du, dass ich zum Blutigen Baron gehe?
君は僕に血まみれ男爵のところに行ってほしいの？
Rowling (2002: 141)

は十分な用例数が集まらなかったのに対し (それぞれ 17、10)、『賢者の石』では進行相のアスペクトが出る文脈で *doon*-迂言形の方が 12.8 ポイント使用されやすいという結果が出たが、大きな差とはなっていない。

非現実のモダリティや進行相のアスペクトに対し、Rohdenburg (1986) は文末の韻律という音韻的要因を提示した。この韻律構造は検証すべき点も少なくないが、本稿では 3.3 節で述べる歴史的な事情を加味し、この構造を重視して論を進める。Rohdenburg (1986) では文末の韻律が問題となっているため、調査では、副文を完全文末 (7) とそれ以外の環境 (8) (9) に分け、*doon*-迂言形の使用率を調査した。結果が表 3-5 である。

(7) nd. *Harry wünsch sik, dat he maal plinkern dä.* (完全文末)
Harry wünschte sich dass er mal blinzeln-INF tat
ハリーは彼が瞬きしてくれたらと思った
Rowling (2002: 92)

(8) nd. *Wenn ik fleiten do, denn stööt ji jo düchtig af.* (副文末)
wenn ich pfeifen-INF tue dann stoßt ihr euch tüchtig ab
私が口笛を吹いたら、地面を強く蹴って離れてください
Rowling (2002: 161)

(9) nd. *Harry ... pass op, dat he nich plinkern dä un denn villicht doch wat verpass.* (副文中)
Harry passte auf dass er nicht blinzeln-INF tat und dann vielleicht doch etwas verpasste
ハリーはまばたきしないよう、見逃さないよう注意した
Rowling (2002: 102)

	堤防とわれら		
	完全文末	副文末	副文中
迂言形	68	71	10
単純形	63	94	21
計	131	165	31
迂言形の割合	51.9%	43.0%	32.3%

グリム童話			賢者の石		
完全文末	副文末	副文中	完全文末	副文末	副文中
24	19	6	219	106	19
223	244	57	535	469	86
247	263	63	754	575	105
9.7%	7.2%	9.5%	29.0%	18.4%	18.1%

表 3-5：迂言形が使用された位置と *doon*-迂言形の関係

『グリム童話』では全ての数値が 7.2～9.7%の間に収まり、大きな差が得られなかったが、『堤防とわれら』と『賢者の石』では、完全文末において *doon*-迂言形が、副文中よりもそれぞれ 19.6 ポイント、10.9 ポイント使用されやすいという結果が得られた。これは同様の調査を行った Rohdenburg (1986) の結果とも共通している。

最後に、*doon*-迂言形と形態的要因との関係を検証する。本稿では副文の全ての本動詞を弱変化動詞と強変化動詞に分け、*doon*-迂言形の使用率を調査した。その結果が表 3-6 である。

	堤防とわれら		グリム童話		賢者の石	
	弱変化	強変化	弱変化	強変化	弱変化	強変化
迂言形	86	63	40	9	227	117
単純形	65	113	120	404	405	685
計	151	176	160	413	632	802
迂言形の割合	57.0%	35.8%	25.0%	2.2%	35.9%	14.6%

表 3-6：弱変化・強変化動詞と *doon*-迂言形の関係

これまでの結果と異なり、今回は 3 つのテキストにおいて、弱変化動詞で *doon*-迂言形が使用されやすいという結果が得られた。その差は『堤防とわれら』で 21.2 ポイント、『グリム童話』で 22.8 ポイント、『賢者の石』で 21.3 ポイントであり、全てのテキストで共通して 20 ポイント以上の差が得られた。Rohdenburg (1986, 2002) の調査でも、弱変化動詞で *doon*-迂言形が使用されやすいという結果が出ている。

3.2 節では、先行研究で挙げられたモダリティ・アスペクト・音韻・形態の 4 つの要因を、筆者が作成したコーパスを用いて調査した。まとめると、テキスト間で差はあるが、意味的要因、音韻的要因、形態的要因が関与する文脈において、より多くの *doon*-迂言形が使用される傾向にある。しかし、4 つの要因はいずれも部分的な関与にとどまり、どれかの要因が関与する文脈で 100%迂言形が現れるということはない。

4 つの要因のうち、テキストの種類に関わらず、全てのテキストにおいて *doon*-迂言形との関わりが明確に確認できるのは形態的要因のみである。他の要因では、テキストによって差が出ないということがあったが、形態的要因の調査では一律で 20 ポイント以上の差が出ている。また、そもそもなぜ副文に偏るのかということを考えたとき、4 つのうち音韻的要因だけがこの分布を説明することができる。モダリティ・アスペクト・形態などを示す必要性は、主文でも同じであり、

副文のみで表示する必要はない。音韻的要因は、完全文末における－⏑⏑構造を想定しているため、副文に偏る分布と合致する。大きな差が出ないテキストや、用例が集まらないテキストも存在したが、3 つのテキストのうち 2 つで *doon*-迂言形が文末で出やすいという結果が得られた。したがって、本稿は 4 つの要因のうち、アスペクトとモダリティを周辺的な要因、音韻と形態を中核的な要因と考える。

－⏑⏑という韻律構造を提示した Rohdenburg (1986) は、それが何に対して最適かを語らなかった。筆者は歴史的背景を考慮し、音韻的要因が「語幹＋語尾」的な形態的構造の実現に最適であり、音韻的要因と形態的要因が表裏一体を成していると考える。

3.3. *doon*-迂言形と歯音接尾辞の衰退

今日の *doon*-迂言形には、頻度の上で圧倒的に副文に偏るという特徴がある。先行研究によると、そのような傾向は 18～19 世紀にはすでに存在していたという (Keseling 1968: 144)。当時と今日の *doon*-迂言形の差を明らかにするため、北低地ザクセン方言の作家であるクラウス・グロート (Klaus Groth、1819-1899) による *Min Jungsparadies* (『少年のころ』(タイトルは筆者訳) Groth 1876、総語数 19,314) をもとに、筆者が作成した 19 世紀の低地ドイツ語コーパスと現代のコーパスを動詞変化と時制の観点で比較すると、表 3-7 のような結果が得られた。表 3-7 を見ると、19 世紀のコーパスでは副文の *doon*-迂言形がわずか 5 例にとどまっていることが分かる。先行研究において *doon*-迂言形が 20 世紀に入ってなお発達し続けているという言及があるように (Rohdenburg 1986: 103)、19 世紀から現代にいたる過程で *doon*-迂言形が使用を拡大させたことが読み取れる。

	19 世紀			
	少年のころ			
	弱変化 現在	弱変化 過去	強変化 現在	強変化 過去
迂言形	0	5	0	0
単純形	16	241	15	212
計	16	246	15	212
迂言形の割合	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%

現代			
堤防とわれら			
弱変化 現在	弱変化 過去	強変化 現在	強変化 過去
57	29	43	20
62	3	94	19
119	32	137	39
47.9%	90.6%	31.4%	51.3%

現代							
グリム童話				賢者の石			
弱変化 現在	弱変化 過去	強変化 現在	強変化 過去	弱変化 現在	弱変化 過去	強変化 現在	強変化 過去
0	40	1	8	87	138	63	56
68	95	86	275	114	355	169	452
68	135	87	283	201	493	232	508
0.0%	29.6%	1.1%	2.8%	43.3%	28.0%	27.2%	11.0%

表 3-7：19 世紀と現代のテキストにおける弱変化・強変化動詞と *doon*-迂言形の関係

さらに、現代の *doon*-迂言形は強変化動詞や現在形とも用いられるのに対し、19 世紀のコーパスで *doon* と用いられた動詞は、全て弱変化動詞（*anreden*「話しかける」、*erwarten*「期待する」、*iln*「急いで行く」、*luden*「鳴る」、*wünschen*「願う」）であり[25]、同時に全て過去形であ

[25] なお当時の東低地ドイツ語のテキストにおいては、強変化動詞と共起する例が見られる。
(i) ond. *Wenn denn min Vader … achter den Gerichtsdisch sitten ded un schrew…*
wenn dann mein Vater … hinter dem Gerichtstisch sitzen-INF tat und schrieb
私の父が食卓の後ろで書いていた時

った。Rohdenburg (1986: 104) でも指摘されているが、筆者は、当時の分布と現代の分布の差を同時期の歯音接尾辞の衰退に伴う形態・音韻的問題に由来すると推定する。中低ドイツ語期において弱変化動詞の過去形に付いていた歯音接尾辞 *-de* [də] は、新低ドイツ語期に入ると徐々に衰退した。表 3-8 にあるように、*-de* は 19 世紀には *e* [ə] を失って*-t* [t] という形になっていた。

		中低ドイツ語 *maken*	新低ドイツ語 (19 世紀) *maken*
現在形	単数 1 人称	*make*	*mak*
	単数 2 人称	*makest*	*makst*
	単数 3 人称	*maket*	*makt*
	統一複数	*maket*	*makt*
過去形	単数 1 人称	*makede*	*mak(t)*[26]
	単数 2 人称	*makedest*	*mak(t)st*
	単数 3 人称	*makede*	*mak(t)*
	統一複数	*makeden*	*mak(t)en*

表 3-8：中低ドイツ語と 19 世紀北低地ザクセン方言の弱変化動詞[27] (Lasch 1974[2]: 224)

歯音接尾辞の衰退に伴う問題の 1 つに、形態表示が曖昧になったことが挙げられる。19 世紀の歯音接尾辞は *-t* であるが、これは 3 人称単数現在形の語尾と同一の形態であるため、単数 3 人称においては過去形表示の機能を果たせなくなっていた (*makt* ↔ *makt*)。このような形

Reuter (1996[4]: 60)

[26] 当時の歯音接尾辞は、弱変化動詞の過去形に必ず付く訳ではなく、同じ動詞でも接尾辞が付く語形と付かない語形が混在していた。

[27] 19 世紀の北低地ザクセン方言における弱変化動詞変化は、当時の文法書が見つからなかったため、テキストにある語形を集めて筆者が作成した。

態的な曖昧性を考慮すると、(10a) のような当時の *doon*-迂言形は形態表示のために使用されていたと解釈することができる。単純形 *ilt* を用いる (10b) では現在形・過去形の区別がつかないが、迂言形 *iln dę* を用いる (10a) では明確に過去形が表示されている。

(10a) nd. … *as Anna sik um en Taß warm Kaffee iln dę*. (過去形)
als Anna sich um eine Tasse warmen Kaffee eilen-INF tat
アンナが一杯の暖かいコーヒーのために急いでいた時
Groth (1876: 341)

(10b) nd. … *as Anna sik um en Taß warm Kaffee ilt*. (現在形・過去形か判別不能)
als Anna sich um eine Tasse warmen Kaffee eilt/eilte

また、当時の弱変化動詞の過去形には、歯音接尾辞ありの語形となしの語形が混在していたため、1 人称・2 人称単数においても現在形と過去形が判別不能になる例があった。(11a) の迂言形 *wünschen dę* に対応する単純形は *wünscht/wünsch* であり、*wünsch* の場合は現在形・過去形の区別がつかない (11c)。

(11a) nd. … *ob ik't glik ni wünschen dę*. (過去形)
ob ich es gleich nicht wünschen-INF tat
私がそれを望んでいなかったかどうか
Groth (1876: 342)

(11b) nd. … *ob ik't glik ni wünscht*. (過去形)
ob ich es gleich nicht wünschte

(11c) nd. … *ob ik't glik ni wünsch*. (現在形・過去形か判別不能)
ob ich es gleich nicht wünsche/wünschte

形態的な問題に加え、16 世紀から現代までの低地ドイツ語の動詞形態の変遷を考えると、別の問題が浮かぶ。表 3-9 に、16 世紀から現代までの弱変化・強変化動詞の単数 3 人称の語形と対応する迂言形の語形の変遷を示し、右にそれらの音節数を付す。

	16 世紀		19 世紀		現代	
弱変化動詞現在形	*wünschet*	2	*wünscht*	1	*wünscht*	1
(対応する迂言形)					*wünschen deit*	3
弱変化動詞過去形	*wünschede*	3	*wünscht ~ wünsch*	1	*wünsch*	1
(対応する迂言形)			*wünschen dę*	3	*wünschen dä*	3
強変化動詞現在形	*kikt* ‚sieht'	1	*kikt*	1	*kickt*	1
(対応する迂言形)					*kieken deit*	3
強変化動詞過去形	*kêk* ‚sah'	1	*keek*	1	*keek*	1
(対応する迂言形)					*kieken dä*	3

表 3-9 : 低地ドイツ語の弱変化・強変化動詞における 3 人称単数の語形と音節数

歯音接尾辞が衰退した弱変化動詞の過去形では、それ以外にも音韻的な脱落を起こした箇所があった。16 世紀と現代の弱変化動詞過去形を比べると、中低ドイツ語における語幹末のシュワーが脱落していることが分かる (*wünsche-de*)。語幹と歯音接尾辞における 2 つのシュワーが脱落したことにより (*wünsche-de* → *wünsch*)、現代の弱変化動詞過去形の音節数は 16 世紀の語形に比べ 2 つ少ない。これは主強勢の後ろの音節が全て脱落した、Rohdenburg (1986) の理想音韻モデルに反する変化だと言える。表 3-9 にあるように、*doon*-迂言形を使用することによって、この音節数の欠如を復元することができた。

したがって本稿は、19 世紀の *doon*-迂言形が、動詞語幹や歯音接尾

辞における音韻的縮約よって生じた音韻・形態的な問題を解決するために使用されていたと考える。もともと歯音接尾辞が無かった強変化動詞や現在形の *doon*-迂言形は、弱変化動詞過去形との類推によって、文末における－∪∪という音韻構造が広まったものだと考えられる。

3.4. 上部ドイツ語における同様の迂言形との比較

同様の迂言形は、他のドイツ語方言にも広まっている。低地ドイツ語の *doon*-迂言形は、南部の上部ドイツ語における迂言形と比較した際、どのような特徴が浮かぶだろうか。そこで、スイスドイツ語ベルン方言の教科書 (Pinheiro-Weber 2010、総語数 3,542) を用いて筆者がコーパスを作成し、低地ドイツ語の *doon*-迂言形とベルン方言の *tue*-迂言形が使用される統語的環境を比較した。それぞれの方言における迂言形の統語的環境が表 3-10 である。

	doon-迂言形	*tue*-迂言形
主文	16	8
副文	542	0
計	558	8

表 3-10：*doon*-迂言形 (表 3-2 の合計) とベルン方言 *tue*-迂言形が使用された統語的環境

コーパスの規模に隔たりがあるため、表の用例数が大きく異なるが、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は副文に、ベルン方言の *tue*-迂言形は主文に偏っていることが分かる。主文における *doon*-迂言形と *tue*-迂言形の用法も、全く同じという訳ではない。前者では、16 例中 14 例が本動詞を前域に置く例 (2) であったのに対し、後者でそのような例 (12) は 1 例にとどまり、8 例中 7 例が本動詞を右枠に置く例 (13) であった。したがって、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は「中域＋不定詞＋doon (定形)」、ベルン方言の *tue*-迂言形は「tue (定形)＋中域＋不定詞」の形を取ることが多いと言える。

(12) schwz. *U vergnüge tueni mi ender ir Stadt.* (本動詞前域：8 例中 1 例)

und vergnügen-INF tue-ich mich eher in der Stadt

楽しいのは、むしろ街の方だ

Pinheiro-Weber (2010: 93)

(13) schwz. *Am vieri am Morge tuen i schlafe.* (本動詞右枠：8 例中 7 例)

um vier am Morgen tue ich schlafen-INF

私は朝 4 時には眠っている

Pinheiro-Weber (2010: 57)

両方言の迂言形は分布の点だけでなく、用法の点でも異なる。ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形を調査した Schwarz (2009: 14) によると、上部ドイツ語諸方言では、接続法の形態をとった迂言形が (14) 、総合的な接続法や「不定詞＋würde」よりも頻繁に現れるという。これは *doon*-迂言形のモダリティ表示用法と似ているが、*tue* などが接続法の形を取ることができる点で、非現実のモダリティを直接表す *doon*-迂言形とは異なる。低地ドイツ語では、接続法はすでに失われているが、上部ドイツ語では接続法が保たれ、形態的に接続法を表すことできる。さらに、モダリティ用法が副文にしか現れない *doon*-迂言形に対し、主文に偏って出現する点も異なる (Schwarz 2009: 102)。

(14) bair. *I dad mi schama.* (接続法 II (非現実))

ich täte mich schämen-INF

私は恥ずかしいと思うだろう

Schwarz (2009: 14)

Schwarz (2009) で記述されている用法の中で、他に上部ドイツ語に共通したものとしては、命令文・疑問文の語調緩和用法がある (15)。上部ドイツ語において迂言形を用いない命令形は、直接的であるとし

て避けられる傾向にあるという。

(15) bair. *Duà jetz schlaffà!* (命令文の語調緩和)
tu jetzt schlafen-INF
寝なさい！

Schwarz (2009: 16)

4.3.5 節でも述べるが、Abraham (2005: 123) によると、上部ドイツ語は話し言葉のコードを有し、聞き手の記憶領域への負担を軽くするために、主語についての情報を文の前方に、新情報を文の後方に配置する傾向が強い。そのため、主語の情報を伴う定動詞を左枠、語彙的な意味を持った本動詞を右枠に置く、S-Aux-O-V という分析的構造が実現される (Abraham 2005: 123)。上部ドイツ語において、*doon* に対応する助動詞は、別の助動詞が現れない文脈においてそのような構造に沿う形で用いられ、本動詞の不定詞をレーマ化するという。

まとめると、主に「中域＋不定詞＋doon」の語順を取る低地ドイツ語の *doon*-迂言形が、韻律用法や形態表示用法を持つのに対し、上部ドイツ語の迂言形は、主に「助動詞＋中域＋不定詞」の語順を取り、接続法の形成・語調緩和・動詞のレーマ化などの用法を持つ。

3.5. 低地ドイツ語における *doon*-迂言形の特徴

本節では、以上の議論を Vögeding (1981) の半接尾辞という概念を用いながらまとめ、*doon*-迂言形の *doon* が接辞的性格を持ち、文法化の途上にあることを主張する。

doon-迂言形と同系の構文において、*doon* に当たる動詞は、使役用法を除いて語彙的な意味を持たない。4.2 節でも述べるが、標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語など、V2 語順を持つ西ゲルマン諸語では広汎に、本動詞を前域に置く際、透明 (語彙的な意味を持たない) な *doon* や *tun* が、空の左枠を定動詞で埋めるために用いられる (2) (12) (16)。

(16) dt. *Singen tut sie gerne*. (話題化・焦点化)
歌うことが、彼女は好きだ
Duden (1999: 3994)

標準ドイツ語 *tun*-迂言形の用法は、話題化・焦点化用法のみにとどまるが、この用法の少なさの要因としては、言語規範の影響が挙げられる。Langer (2001) によると、かつて 14 世紀の中高ドイツ語において広まりを見せていた *tuon*-迂言形は、17 世紀の文法家を中心としたスティグマ化 (Stigmatisierung) により衰退したという。現代の *tun*-迂言形は、この影響を引きずっているため、頻繁に使用することが避けられていると考えられる。これに対して、ドイツ語諸方言の迂言形は多様な用法を持ち、方言間の差異も大きい。3.4 節で見たように、上部ドイツ語の迂言形は接続法の形成・語調緩和・動詞のレーマ化などの用法を持つ一方で、3.2 節で見たように、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は韻律用法や形態表示用法を持つ。分布の点でも、上部ドイツ語の迂言形が主に「助動詞＋中域＋不定詞」の語順を取るのに対し、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は主に「中域＋不定詞＋doon」の語順を取る。

上部ドイツ語の迂言形に対し、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は、副文

で本動詞に後続するという一風変わった分布を有している。一般に、複数の自由形態素からなる語は複合語、拘束形態素を含む複数の形態素からなる語は派生語と呼ばれるが、dt. *alkoholfrei*「アルコールのない、アルコールフリーの」など、「自由形態素＋frei」からなる形容詞を分析した Vögeding (1981: 111) は、複合語と派生語の間に中間的な状態があることを指摘した。それによると *alkoholfrei* などの形容詞は、単独で dt. *Alkohol*「アルコール」と dt. *frei*「自由な」が存在するため派生語ではないが、*frei* は単独で使用される場合とそうでない場合では結合価が異なるという。例えば、(17) で *frei* は、単独の語としては dt. *Schule*「学校」と結びつかないが、dt. *schulfrei*「学校が休みの」というように 1 つの語の内部で *Schule* と結びつくことができる。そのため、これらの *frei* はもちろん相互に関係のある形態素ではあるが、完全に同じものとも言えず、ゆえに *schulfrei* は派生語と複合語の中間に属するという。Vögeding (1981) は、*schulfrei* に含まれる *frei* を半接尾辞 (dt. Halbsuffix) と呼んでいる。

(17) dt. *Die Kinder haben* {*frei*/**frei von Schule*/*schulfrei*}.
その子どもたちは学校が休みだ
Vögeding (1981: 101)

doon-迂言形は通常、完了・話法・受動の助動詞と同様、本動詞と助動詞の組み合わせとして捉えられ、*doon* は助動詞として扱われる。しかし、3.2 節から 3.4 節までで見たように、*doon*-迂言形の *doon* は接辞的な特徴を多く持っている。*doon*-迂言形は、動詞の形態を表示し、ー◡◡という音韻的まとまりを作るという機能を有している。また、副文に偏るという性質によりほとんどの場合で「中域＋不定詞＋doon (定形)」という語順を取る。これは本動詞として使用される *doon* にはない特徴であり、むしろ接辞の特徴に近い。本稿では、副文における *doon*-

迂言形が形態的には 2 つの語だが、音韻的には‒◡◡という 1 つの音韻論的語 (engl. phonological word) をなしており、*doon* は音韻論的に半接尾辞のステータスを有していると考える。そしてこれが低地ドイツ語における *doon*-迂言形の特徴だと結論付ける。

‒◡◡構造を作る接辞的な *doon* は 3.3 節で見たように、かつては歯音接尾辞の脱落に伴う問題を解消するために、もっぱら弱変化動詞の過去形において用いられていた。しかし、今日では弱変化動詞の現在形や強変化動詞など、その他の環境でも現れる (表 22 参照)。弱変化動詞現在形における迂言形の広まりは、時制表示の曖昧さという形態的な要因が関与していると説明できるが、強変化動詞では通常、動詞の語幹交替で時制が表示されるため、*doon*-迂言形の使用に形態的な要因が関わらない。また、時制を表すことがそれほど重要なのであれば、この迂言形は主文に広がっていてもいいはずである。筆者は、これが‒◡◡という音韻構造への類推が働き、*doon*-迂言形が強変化動詞に広まりつつあることの表れであると考える。上部ドイツ語で迂言形が接続法の表示に頻用されるのと対照的に、*doon*-迂言形は、音韻的に動詞形態を拡充するための要素として文法化の途上にある。これは、当該方言の構造的特徴によって文法化の方向性が左右される一例だと言えるのではないか。

低地ドイツ語において、‒◡◡という音韻的ユニットが好まれる例は *doon*-迂言形以外にも見られ、例えば動詞を強調する「本動詞＋un＋doon」という構文がある (Thies 2017[3]: 84)。(18) はその例であるが、本動詞の後ろに接続詞 *un* を挟んで *doon* が続いており、‒◡◡という音韻的ユニットを成しているように見える。この構文と *doon*-迂言形の発達の関係は明らかではないが、何らかの関係が見つかれば、これは主文における‒◡◡構造の例となり、低地ドイツ語において‒◡◡というまとまりに特別な価値があることの証左になる。

(18) nd. *He maakt un deit den helen Dag.*

er macht und tut den ganzen Tag

彼は一日中活動的だ

Thies (2017[3]: 94)

doon-迂言形が接辞的な性格を持っているということは、ゲルマン祖語において「動詞的要素＋tun の過去形」のまとまりが「語幹＋接辞」になった、弱変化動詞における歯音接尾辞の成立 (got. *salbōdēdun*「彼らは香油を塗った」 ← *salbōn*「香油を塗る」＋**dēdun*「彼らはした」) に類似しており (Vogel/Sahel 2013: 74)、このプロセスの再来と見ることもできる。しかし、中高ドイツ語における *tuon*-迂言形の事例からも分かるように、低地ドイツ語の *doon*-迂言形が実際に接尾辞になるかどうかという問題は、社会言語学的な要素も関与し簡単ではない。今回コーパスとして使用した現代の 3 作品では、低地ドイツ語原作 (Kinau 1973)、英語からの翻訳 (Rowling 2002)、標準ドイツ語からの翻訳 (Grimm 1993, 1995) の順に *doon*-迂言形の使用頻度が低くなっている。原作と翻訳の差は、方言話者の自らの方言に対する意識の高さが方言的構文の頻度の高さに現れていると言えるが、一方で翻訳作品間の差は、翻訳元の言語の威信、すなわち元言語の低地ドイツ語に対する影響力に関係していると筆者は考える。低地ドイツ語話者は日常的に標準ドイツ語の影響に晒されており、英語に比べ標準ドイツ語の威信が相対的に大きい。そのため言語干渉の度合いが大きく、低地ドイツ語的現象が現れにくいと考えられないだろうか。今回のコーパスの規模は、言語威信と方言的現象の相関関係を述べるには必ずしも十分なものと言えないかもしれないが、使用した 3 種類の文献においてこのような興味深い差異が出たため、ここで筆者の解釈を載せた。

EU 統合後のヨーロッパでは、ヨーロッパ地方言語・少数言語憲章の制定などによって、低地ドイツ語をはじめとする伝統的な方言や少数

言語とその文化を尊重する機運の高まりが顕著に見られる。その一方で、標準ドイツ語の影響はますます強まり、低地ドイツ語の構造に多大な影響を与えつつある。この状況の中、アイデンティティの表明手段として方言的な要素を使用することが広まり、低地ドイツ語の使用が促進される可能性も否定はできない。しかしそのような可能性は、話者の意識だけではなく、低地ドイツ語がどのような社会的地位にあるかにもかかっていると筆者は考える。低地ドイツ語における *doon-* 迂言形の発展の可能性は、話者の意識と言語擁護の進展に少なからず依存すると言えよう。

4. 西ゲルマン諸語における「不定詞＋tun」迂言形の特徴

4.1. 導入

西ゲルマン諸語の「不定詞＋tun」迂言形とは、標準ドイツ語の動詞 *tun*「する」およびそれと語源的に対応する動詞が不定詞を支配する構文を指し、前章で扱った *doon*-迂言形もこの構文の 1 つである。この迂言形は、*tun* に対応する動詞が失われた北ゲルマン諸語とゴート語には存在しないものの、西ゲルマン諸語では言語・方言の別を問わず広く見られる。西ゲルマン諸語において、「不定詞＋tun」迂言形の用法は多岐にわたり、言語・方言間の差異は小さくない。

4 章では、代表的な西ゲルマン語とドイツ語方言における「不定詞＋tun」迂言形の用法に共通する特徴を明らかにすることを目的とする。それを通して、低地ドイツ語の *doon*-迂言形の持つ特徴を 3 章とは異なるアプローチで明らかにしていく。

本章では、まず 4.2 節で西ゲルマン諸語の標準語における「不定詞＋tun」迂言形を、続く 4.3 節でドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形を概観する。その観察をもとに、4.4 節でそれらに共通する特徴を本章のまとめとして提示する。

4.2. 標準語における「不定詞＋tun」迂言形

本節では、西ゲルマン諸語の標準語における「不定詞＋tun」迂言形がどのような環境で使用されるかを見る。疑問文・否定文の形成などに使用される英語の *do*-迂言形は、文法化の点で他の迂言形を大きく引き離すため、本章では扱わない。本節では、標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語、ルクセンブルク語、アフリカーンス語の 5 言語を取り上げる。

標準ドイツ語の辞書である Duden (1999) は、標準ドイツ語の *tun*-迂言形が本動詞を強調する際に使用されるとしている。Duden (1999) はその例として (1) (2) を挙げているが、本動詞を前域に置き、話題化・焦点化するもの (1) 以外は口語的であるとされるという (2)。また、接続法の表示に用いられることもあるが、このような用法は方言的とされるという (3)。

(1) dt. *Singen tut sie gerne.* (話題化・焦点化)
歌うことが、彼女は好きだ
Duden (1999: 3994)

(2) dt. *Ich tu bloß noch schnell die Blumen gießen.* (強調: 口語的)
私は急いで花に水をやる
Duden (1999: 3994)

(3) dt. *Das täte mich schon interessieren.* (接続法 II の表示: 方言的)
私はそれは面白いだろうと思います
Duden (1999: 3994)

(2) (3) では本動詞が右枠に置かれているが、このタイプの *tun*-迂言形が容認されないことは、他の文法書においても言及されている。標準ドイツ語の文法書である Engel (1991[2]) によると、本動詞を右枠に置く (4) のような *tun*-迂言形は日常語 (dt. Alltagssprache)、幼児語 (dt.

Kindersprache) とされ、標準語としては容認されない。

(4) dt. *Er tut ja immer noch essen.* (日常語・幼児語)
彼はまだ食べ続けている
Engel (1991[2]: 476)

本動詞を右枠に置くタイプの迂言形が容認されない言語は、標準ドイツ語だけではない。Haeseryn et al. (1997: 1285) によると、オランダ語の *doen*-迂言形も本動詞の話題化・焦点化の際に使用されるが (5a)、動詞を右枠に置く例 (5b) は容認されないという。

(5a) ndl. *Stelen deed die jongen anders nooit.* (話題化・焦点化)
stehlen-INF tat der Junge sonst nie
盗みなど、そうでなければその少年は決してしなかった
Haeseryn et al. (1997: 1286)

(5b) ndl. **Die jongen deed anders nooit stelen.*
der Junge tat sonst nie stehlen-INF
Haeseryn et al. (1997: 1286)

本稿ではオランダ語の方言に詳しく立ち入らないが、標準オランダ語で容認されない (5b) のような *doen*-迂言形が、方言においては使用されるという記述がある。Barbiers (2008) によると *doen*-迂言形は、ベルギーのオランダ語方言では全く見られないものの、オランダ国内の方言においては使用される。オランダ南部 (リンブルフ、ブラーバント、ゼーラントなど) では、本動詞を右枠に置く例 (6) や疑問文 (7)、命令文 (8) の例が観察され、逆に北部 (フローニンゲン、ドレンテ、オーヴェルエイセルなど) では、完了形 (9) の例が認められるという。

(6) ndl. *Ik doe wel even de kopjes afwassen.* (方言的)

ich tue wohl eben die Tässchen abwaschen-INF

私がそのカップを洗うよ

Barbiers (2008: 52)

(7) ndl. *Doet Marie elke avond dansen?* (方言的)

tut Marie jeden Abend tanzen-INF

マリーは毎晩踊っているの？

Barbiers (2008: 52)

(8) ndl. *Doe het brood even snijden!* (方言的)

tue das Brot eben schneiden-INF

ちょっとそのパンを切って

Barbiers (2008: 53)

(9) ndl. *Ik heb heel wat lopen gedaan.* (方言的)

ich habe sehr etwas laufen-INF getan

私はかなり走った

Barbiers (2008: 53)

また、オランダ語の *doen*-迂言形は、使役構文としての用法を持っている (10)。使役用法の *doen* は、使役主の働きかけにより、動作主がある行動を自身の意図に関わらず行うという直接使役を表し、*laten* 「させる」を用いる使役と区別される。

(10) ndl. *Dat doet mij dan weer aan mijn Moortje denken.* (直接使役)

das tut mich dann wieder an mein Moortje denken-INF

それは私のモールチェを思い起こさせる

Frank (2013: 51)

オランダ北部で話される西フリジア語において、ドイツ語の *tun* およびオランダ語の *doen* に対応する動詞は *dwaan* である。*dwaan*-迂言形は第 1 不定詞 (*e*-不定詞) とともに、本動詞の話題化・焦点化に用いられる (11a)。一方で、*tun*-迂言形や *doen*-迂言形と同じく、不定詞を右枠に置く文は作ることができない。筆者は母語話者に対して (11b) の例文を提示したが、容認されなかった。

(11a) wfr. *Gripe docht men mei de hân.* (話題化・焦点化)
greifen-INF tut man mit der Hand
つかむという行為は、手で行うものだ
Bangma (1992: 56)

(11b) wfr. **Men docht mei de hân gripe.*
man tut mit der Hand greifen-INF

西フリジア語では、一部の動詞の不定詞が *dwaan* と結びつき、右枠に現れることがある (12)。しかし、(12) における *ynkeapjen* は、第 1 不定詞 (*e*-不定詞) ではなく第 2 不定詞 (*en*-不定詞) であることに留意されたい。動名詞 (dt. Gerundium) とも呼ばれる標準西フリジア語の第 2 不定詞 (*en*-不定詞) は、名詞的性格が強く、この構文は「動作名詞＋機能動詞」構文に近い。そのため、本稿では (12) の構文を *dwaan*-迂言形と見なさない。

(12) wfr. *In plotte minsken út 'e Súdwesthoeke dogge yn Snits ynkeapjen.*
viele Menschen aus Súdwesthoeke tun in Snits Einkaufen
スュトヴェストフケから来たたくさんの人々がスニツで買い物をする
Bangma (1998: 74)

一方で、ルクセンブルク語とアフリカーンス語では「不定詞＋tun」迂言形は用いられない。ルクセンブルク語の文法書である Schanen/Zimmer (2005) は、ルクセンブルク語の *doen* が接続法の表示に用いられている文を挙げている (13)。しかし、これは周辺的な用法であり、標準的とされるルクセンブルク語中央方言では現れない。また、*tun*-迂言形、*doen*-迂言形、*dwaan*-迂言形で観察された本動詞の話題化・焦点化用法には、*maachen*「する、作る」が使用され (14)[28]、*doen* は使用されない。

(13) lux. *Déit en dach léieren*. (非標準的)
täte er doch lernen-INF
彼が勉強してくれたらなあ
Schanen/Zimmer (2005: 46)

(14) lux. *Sangen mécht se ganz gär!*
singen-INF macht sie ganz gern
歌うことが、彼女はとても好きだ

アフリカーンス語における「不定詞＋tun」迂言形についての記述は、アフリカーンス語の文法的記述である Donaldson (1993) および Ponelis (1993) では見つからなかった。Langer (2001: 13) によれば、アフリカーンス語の動詞 *doen* は不定詞と迂言形を形成しないという。『ハリー・ポッターと賢者の石』のアフリカーンス語訳 (Rowling 2000、総語

[28] 例文 (14) の調査は、西出佳代氏 (金沢大学准教授) による。助動詞的用法の *maachen* に関して、母語話者の 1 人は、話法の助動詞などの「助動詞らしい」助動詞と、*maachen* の振る舞いが違うことに言及し、不定詞のみを用いる (14) の他に、より自然な文として不定詞を受ける代名詞を用いた文 (i) を提示したという。これは、*maachen* が取る不定詞の名詞性が高いことを示唆していると筆者は考える。
(i) lux. *Sangen, dat mécht se ganz gär!*
singen-INF das macht sie ganz gern
歌うことが、彼女はとても好きだ

数 56,828) をコーパス[29]として例文調査を行ったところ、全ての *doen* が本動詞として用いられており (15)、「不定詞＋tun」迂言形は確認できなかった。

(15) afr. *"Wat doen jy?" vra Ron.*
was tust du fragt Ron
「何をしているの」とロンが尋ねる
Rowling (2000: 121)

以上、本節で扱った西ゲルマン諸語の標準語における「不定詞＋tun」迂言形の用法をまとめる。まず、標準語における「不定詞＋tun」迂言形の用法を表 4-1 にまとめる。本節で扱った 5 つの標準語のうち、「不定詞＋tun」迂言形の使用が確認できたのは、標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の 3 言語であり、ルクセンブルク語とアフリカーンス語においては、「不定詞＋tun」迂言形の使用が確認できなかった。

	dt.	ndl.	wfr.	lux.	afr.
話題化・焦点化	○	○	○	×	×
接続法表示	×	—	—	×	—
使役	×	○	×	×	×

表 4-1：標準語における「不定詞＋tun」迂言形の用法[30]

ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の「不定詞＋tun」迂言形には、本動詞の不定詞を左枠に置く話題化・焦点化用法が存在する点と、本

[29] このコーパスは、山藤顕氏 (北海学園大学非常勤講師) によって作成されたものである。
[30] ○は当該の用法が存在することを、×は存在しないことを示す。また、？は情報が無いことを、△は文法書などに言及はあるが、実際の頻度は少ない、もしくはその存在が疑わしいと筆者が判断したことを示す。—は、構造的な理由から当該用法がその言語において存在しえないことを示す。

動詞を右枠に置く例が容認されない点が共通している。Schwarz (2009: 11) によると、これには 3 言語の構造的特徴である V2 語順が関係しているという。V2 語順とは、主文の文頭位置を話題・焦点が占め (前域)、続く位置 (左枠) に定動詞が置かれる語順を指す。この語順において、左枠には定動詞のみが置かれるのに対し、前域には名詞句 (16a)、副詞句 (16b)、前置詞句 (16c) など、様々な要素が置かれる。

(16a) dt. *Sie singt heute in der Halle.*

彼女は今日ホールで歌う

Sie (名詞句)	singt	heute in der Halle.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

(16b) dt. *Heute singt sie in der Halle.*

今日、彼女はホールで歌う

Heute (副詞句)	singt	sie in der Halle.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

(16c) dt. *In der Halle singt sie heute.*

ホールで、彼女は今日歌う

In der Halle (前置詞句)	singt	sie heute.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

一方で、本動詞を際立たせるため、本動詞の不定詞を前域に置き話題・焦点として提示することがあるが (16d)、この時、左枠が空になるため、左枠を任意の動詞で占める必要性が生まれる。Schwarz (2009) によると、これが「不定詞＋tun」迂言形を本動詞の話題化・焦点化に使う理由であり、Schwarz (2009) はこれを「論理性」(Logik) と表現している。これにより、左枠を *tun* で占める必要性のある (1) (5a) (11a)

は適格と判断され、(2) (3) (4) (5b) (11b) は、本動詞で左枠を占めることができるという点で、迂言形を使用する必要がないと判断される。

(16d) dt. *Singen* ____ *sie gerne.*

Singen (動詞)	ϕ	sie gerne.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の「不定詞＋tun」迂言形が副文で使用できないことも (17a-c)、副文に話題化・焦点化の位置としての前域が存在せず、左枠が補文標識に占められるという理由から説明することができる。

(17a) dt. **Er sagt, dass sie gerne singen tut.*
彼女は歌うことが好きだと彼は言う

(17b) ndl. **Hij zegt dat die jongen anders nooit deed stelen.*
er sagt dass der Junge sonst nie tat stehlen-INF
その若者はそうでなければ決して盗みなどしなかったと彼は言う

(17c) wfr. **Hy seit dat men mei de hân gripe docht.*
er sagt dass man mit der Hand greifen-INF tut
つかむという行為は手で行うと彼は言う

Schwarz (2009) の言う「論理性」による制限は、標準語が持つ高い規範意識による制限に読み替えられると筆者は考える。(2) (4) (5b) (11b) のように接続法を表している訳でもなく、左枠を占めている訳でもない迂言形は、使用の意図が明瞭ではない。規範意識は、多かれ少なかれ不明瞭な要素を排除する傾向にあり、そのためこうした制限が生じるのではないか。特に、標準ドイツ語の *tun*-迂言形は、規範言語の策定過程において文法家を中心とした純化運動により排斥された

歴史を持つ (Langer 2001)。少なくとも *tun*-迂言形においては、このような規範による影響が尾を引いていると考えられる。

3 言語の「不定詞＋tun」迂言形の中で、オランダ語の *doen*-迂言形は使役用法を持つ。話題化・焦点化の迂言形と異なり、助動詞として使用される *doen* には、使役という態 (ヴォイス) に関する文法的意味が備わっている。使役用法の「不定詞＋tun」迂言形は、西ゲルマン諸語の古語において広く使用されており、中高ドイツ語 (18)、中英語 (19)、中期オランダ語 (20) でその例が確認できる。これらの使役用法は、時代が下るにつれ他の動詞に取って代わられ、今日ではまれな用法となった。例えば、Weiss (1956) によれば中高ドイツ語 *tuon* の使役用法は、*machen* に取って代わられたとされ、現代の標準語には残っていない。したがってオランダ語の *doen*-迂言形は、古語の使役用法を引き継いだものと言える[31]。

(18) mhd. *Sie thaten die turne malen.*

sie taten den Turm malen-INF

彼らはその塔の絵を描かせた

Weiss (1956: 83)

(19) mengl. *The mayere of Norwych dede a-rest the baylly of Normandys.*

der Bürgermeister von Norwich tat verhaften-INF den Adligen von Normandys

ノリッチ市長はノルマンディーの代官を逮捕させた

Davis (1971: 331)

[31] なお、語彙的意味を持たない透明な迂言形が発達した背景には、上記のような使役用法において使役の動作主が省かれるようになったことがある。文に現れない意味上の動作主は、「誰かが」のような意味的重要度の低い名詞句で補われるようになり、さらに進んでこの潜在的名詞句が全く考慮されないような解釈も許容されるようになったという。(18) から (20) までの例は、いずれも本動詞の動作主が省略されているが、「～させた」ではなく「～した」と訳しても大きく意味は変わらない。

(20) mndl. … *ende willent scepnen, si sullen sin hus doen breken …*

und wollen Richter sie sollen sein Haus tun zerbrechen-INF

そしてもし判事たちがそう望むなら、彼らは彼の家を壊させるだろう

Van der Horst (1998: 56)

4.3. ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形

本節では、ドイツ語の方言における「不定詞＋tun」迂言形が使用される環境を見る。1.1 節で見たように、ドイツ語方言は低地ドイツ語と高地ドイツ語を構成する中部ドイツ語、上部ドイツ語の 3 つに分けられる。3 章で低地ドイツ語の *doon*-迂言形について詳しく扱ったため、本節では、中部ドイツ語と上部ドイツ語の迂言形の用法を扱う。上部ドイツ語の迂言形については先行研究が豊富であるため、バイエルン方言、スイスドイツ語、アルザスドイツ語の 3 つに節を分けた。

4.3.1. 中部ドイツ語における *don*-迂言形

中部ドイツ語で *tun* に対応する動詞は *don* であり、*don* も迂言形を形成する。*don*-迂言形の用法に関して、西中部ドイツ語に属するラインフランケン方言の辞書である Müller (1964: 1447) は、*don*-迂言形が強調に用いられるとしている (21)。強調の例として挙げられている (21) は、本動詞の話題化・焦点化の例ではなく、本動詞を後置した例であることに留意されたい。これに関連して、東中部ドイツ語に属するアルテンブルク方言の文法書である Weise (1900: 103) には、本動詞を前域に置き話題化・焦点化することも可能だが、本動詞を右枠に置きレーマ化する方が多いという指摘がある。

(21) md. *Ech <u>don</u> jo <u>schrive</u>.* (wie es befohlen ist) (レーマ化)
ich tue ja schreiben-INF
(言われた通り) 私は書いているよ
Müller (1964: 1447)

標準ドイツ語やルクセンブルク語では迂言形による接続法の表示は容認されなかったが、Müller (1964) および Schwarz (2009) によると、中部ドイツ語の *don*-迂言形は、接続法 I の用法を吸収した接続法 II の表示に使用されることがあるという (22) (23)。Schwarz (2009: 29) ではその他に、未来時制を表す用法 (24) が挙げられている。例文は挙げられていないものの、Schwarz (2009: 30) は、*don*-迂言形が困難な語形の回避に使用されるとしている。一方で Müller (1964: 1448) では、*don*-迂言形の使役用法 (25) が挙げられている。

(22) md. *I det was esse.* (接続法 II (婉曲表現))

ich täte etwas essen-INF

何か食べようと思っている

Schwarz (2009: 29)

(23) md. *Er sat, er däht de Schuh wichse.* (接続法 II (引用))

er sagte er täte den Schuh wichsen-INF

彼はその靴を磨くと言った

Müller (1964: 1447)

(24) md. *Mit meer dun ehr kee Micke fange.* (未来時制)

mit mir tut ihr keine Mücke fangen-INF

私がいると君たちは好き勝手できないだろう

Schwarz (2009: 29)

(25) md. *Enen lachen don* (使役)

einen lachen-INF tun

人を笑わせること

Müller (1964: 1448)

使用される統語環境には、平叙文の他に命令文 (26) と副文 (27) がある。Müller (1964: 1447) は、完了形の例 (28a) を挙げているが、一般的ではないとし、代用形として *don*-迂言形を使わない (28b) を載せている。

(26) md. *Du dich nor nedd schnerre!* (命令文)

tue dich nur nicht täuschen-INF

頼むから裏切らないで

Schwarz (2009: 29)

(27) md. *Ech däht dir gern dat gen, wenn ech et selver han däht.* (副文)

ich täte dir gern das geben-INF wenn ich es selber haben-INF täte

私自身がそれを持っていたら、喜んで君にあげただろうに

Müller (1964: 1447)

(28a) md. **Ek höbb gedohn lihre.* (完了形)

ich habe getan lernen-INF

Müller (1964: 1447)

(28b) md. *Ech han gelihrt.*

ich habe gelernt

私は勉強した

Müller (1964: 1447)

このように、中部ドイツ語の *don*-迂言形は、標準ドイツ語の *tun*-迂言形と比較して、複数の用法にまたがって使用されていることが分かる。これは、方言というステータスと結びついた規範意識の小ささが影響していると考えられ、この傾向は次節以降で紹介する上部ドイツ語の迂言形でも同様である。

4.3.2. 上部ドイツ語バイエルン方言における *doa*-迂言形

上部ドイツ語の東部を占めるバイエルン方言では、*doa* が迂言形を形成する。*doa*-迂言形の用法の 1 つとして、バイエルン方言の文法書である Merkle (1984[2]: 66) は、本動詞の不定詞を前置する話題化・焦点化用法を挙げている (29)。

(29) bair. *Bfeiffà duàr i dà wås.* (話題化・焦点化)
pfeifen-INF tue ich dir etwas
口笛を、私は君に少し吹こう
Merkle (1984[2]: 66)

さらに Merkle (1984[2]: 65) は、*doa*-迂言形の用法として接続法表示を挙げている (30a)。バイエルン方言の接続法は、中部ドイツ語と同じく接続法 II が接続法 I を吸収したものである。標準ドイツ語と異なり、接続法 II の表示に *weàràd* (dt. *würde*) は、全く使われないという (30b)。

(30a) bair. *I dààd schreim.* (接続法 II (婉曲表現))
ich täte schreiben-INF
私は書こうと思っているのだが
Merkle (1984[2]: 65)

(30b) bair. **I weàràd schreim.*
ich würde schreiben-INF
Merkle (1984[2]: 65)

Eroms (1998) は方言話者に対して、*doa*-迂言形、*wean*-迂言形 (dt. *werden*-迂言形)、単純形の 3 つのうち、どれを接続法の表示に使うかというテストを行った。Eroms (1998) が調査した例文を (31a-c) (32a-c) に載せる。最も好まれたのは、*doa*-迂言形を用いた (31a) (32a)

の例であり、その選択率はそれぞれ 98%、89%であった (Eroms 1998: 146)。

(31a) bair. *I dad mi schama*. (接続法 II: *doa*-迂言形)

ich täte mich schämen-INF

私は恥じ入るだろう

Eroms (1998: 145)

(31b) bair. *I wuarad mi schama*. (接続法 II: *wean*-迂言形)

ich würde mich schämen-INF

Eroms (1998: 145)

(31c) bair. *I schamad mi*. (接続法 II: 単純形)

ich schämte mich

Eroms (1998: 145)

(32a) bair. *I dad iatz schlafa*. (接続法 II: *doa*-迂言形)

ich täte etwas schlafen-INF

私はいくらか眠るだろう

Eroms (1998: 146)

(32b) bair. *I wuarad iatz schlafa*. (接続法 II: *wean*-迂言形)

ich würde etwas schlafen-INF

Eroms (1998: 146)

(32c) bair. *I schlafad iatz*. (接続法 II: 単純形)

ich schliefe etwas

Eroms (1998: 146)

接続法表示の他にも、Schwarz (2009) は、*doa*-迂言形が習慣相 (33)、進行相 (34) といったアスペクトの表示に用いられるという記述を載せている。

(33) bair. *I don gean d nodan vanga.* (習慣相)

ich tue gern die Schlange fangen-INF

私は蛇を捕まえるのが好きだ

Schwarz (2009: 15)

(34) bair. *An ualauwa iss, wou a gwatia souha dad.* (進行相)

ein Urlauber ist-es der ein Quartier suchen-INF tut

あれは宿を探している休暇中の旅行者だ

Schwarz (2009: 15)

Merkle (1984[2]: 66) によると、*doa*-迂言形には命令文の語調緩和用法があり、(35) の *doa*-迂言形には、命令文に親しみを加える効果があるとされる。同様に、Eroms (1998: 148) は、命令文で *doa*-迂言形がそれほど頻繁に使用されないとしながらも、それが広告のフレーズなどに用いられることから、「形式ばらない感じ」 (informality) や「自然さ」 (naturalness) を表していると指摘している。この他に Schwarz (2009: 16) では、*doa*-迂言形の用法として動詞屈折を避ける用法が挙げられている。

(35) bair. *Duà scheẽ essn!* (命令文の語調緩和)

tu schön essen-INF

きれいに食べなさい！

Merkle (1984[2]: 66)

doa-迂言形が使用される統語的環境として、先行研究では主文の平叙文の他に命令文 (35) や疑問文、副文 (34) の例が見つかる。Zehetner (1985: 151) は、命令文と疑問文における *doa*-迂言形がよく使われるとしている (36) (37)。一方で、副文の *doa*-迂言形は、Eroms (1984: 132) の調査によれば避けられる傾向にあるという (38)。また、Merkle (1984[2]:

66-67) によると、完了形で *doa*-迂言形は使用できず (39)、話法の助動詞を伴う場合は、話法の助動詞を話題化・焦点化しなければならないという制約があるが (40a-b)、接続法ではその必要はない (40c)。接続法を表示する *doa*-迂言形については、受動不定詞を支配する例も存在する (41)。

(36) bair. *Dua ned fręch wean!* (命令文)
tu nicht frech werden-INF
生意気になるんじゃないよ
Zehetner (1985: 151)

(37) bair. *Deamma haid Kartn schbuin?* (疑問文)
tun-wir heute Karten spielen-INF
今日私たちでトランプする？
Zehetner (1985: 151)

(38) bair. *I sog da no, obs heid kemma dan.* (副文)
ich sage dir noch, ob-sie heute kommen-INF tun.
私は君に彼らが今日来るかどうかを言う
Eroms (1984: 130)

(39) bair. **Mià ham awàdn dõ.* (完了形)
wir haben arbeiten-INF getan
Merkle (1984^2: 67)

(40a) bair. **Du duàsd kenà.* (話法の助動詞)
du tust können-INF
Merkle (1984^2: 66)

(40b) bair. *Kenà duàsd* åiss. (話法の助動詞)
können-INF tust-du alles
できる、君は何でも
Merkle (1984^2: 66)

(40c) bair. *Dees dààdsd glei kenà*. (話法の助動詞: 接続法)

das tätest-du gleich können-INF

君はすぐにできるようになると思う

Merkle (1984[2]: 66)

(41) bair. *I dààd gfrågd weàn*. (受動の助動詞: 接続法)

ich täte gefragt werden-INF

私は尋ねられると思う

Merkle (1984[2]: 64)

4.3.3. スイスドイツ語における *tue*-迂言形

上部ドイツ語に属するスイスドイツ語では、*tun* に対応する動詞である *tue* が迂言形を形成する。ベルン方言の文法書である Hodler (1969: 319) とチューリヒ方言の文法書である Weber (1987: 249) は、*tue*-迂言形の話題化・焦点化用法を挙げている (42) (43)。

(42) schwz. *Schaffe tuet dä überhout nüt.* (話題化・焦点化)
arbeiten-INF tut der überhaupt nicht
働くということを、あの男は全くしない
Hodler (1969: 319)

(43) schwz. *Schryben und lääse tuen i gëërn, aber rächne nüüd.*
schreiben-INF und lesen-INF tue ich gern aber rechnen-INF nicht
(話題化・焦点化)
読み書きは私は好きだけど、計算は嫌いだ
Weber (1987: 93)

前掲の Hodler (1969: 320)と Weber (1987: 192)、およびベルン方言の文法書である Marti (1985: 154-155) とベルン方言の教科書である Pinheiro-Weber (2010: 108) は、*tue*-迂言形が接続法の表示に用いられると記述している。スイスドイツ語では接続法 I と II の区別がまだ残っているが、*tue*-迂言形はどちらの表示にも用いられる (44) (45) (46)。バイエルン方言と異なり、接続法の表示には dt. *werden* にあたる動詞 (ベルン方言 *wärde*、チューリヒ方言 *wèèrde*) も使用される (Marti 1985: 154-155, Weber 1987: 192) (47) (48)。

(44) schwz. *Dem Cheiser chlagen, wie's nen tieji gaan.* (接続法 I (引用))

dem Kaiser klagen wie-es einem tue gehen-INF

皇帝にどのような状況であるかを嘆くこと

Hodler (1969: 320)

(45) schwz. *I tät das Outo verchouffe.* (接続法 II (婉曲表現))

ich täte das Auto verkaufen-INF

私はその車を売ろうと思っているのだが

Marti (1985: 156)

(46) schwz. *I tëët mi füürche.* (接続法 II (婉曲表現))

ich täte mich fürchten-INF

私は怖いと思う

Weber (1987: 192)

(47) schwz. *Si säge, är wärdi das Hụụs nächschtens boue.*

sie sagen, er werde das Haus nächstens bauen-INF

(*wärde*-迂言形: 接続法 I (引用))

彼らは彼が近いうちに家を建てると言っている

Marti (1985: 155)

(48) schwz. *I wuurd mi schäme.* (*wèèrde*-迂言形: 接続法 II (婉曲表現))

ich würde mich schämen-INF

私は恥じ入るだろう

Weber (1987: 192)

Schwarz (2009: 21) によると、*tue*-迂言形は散発的に習慣相 (49) や進行相 (50) といったアスペクトの表示に用いられるという。Schobinger (2001[2]: 28) も、*tue*-迂言形のアスペクト用法に言及しており、標準ドイツ語の *am*-進行形に準ずる表現だと記述している (51)。

(49) schwz. *Das isch dä Maa, woni immer mit em tue rede*. (習慣相)

das ist der Mann wo-ich immer mit ihm tue reden-INF

この人は、私がいつも一緒に話している人です

Schwarz (2009: 21)

(50) schwz. *Mir tüend grad es Bild ufhänke*. (進行相)

wir tun gerade ein Bild aufhängen-INF

私たちはちょうど絵を掛けているところです

Schwarz (2009: 21)

(51) schwz. *Er tuet läse*. (= *Er isch am läse*) (進行相)

er tut lesen-INF

彼はちょうど本を読んでいるところだ

Schobinger (2001^2: 28)

さらに Weber (1987 : 250) によると、スイスドイツ語の *tue*-迂言形は命令文と疑問文で語調緩和の役割を担うという (52) (53)。語調緩和については、Schobinger (2001^2: 28) も、疑問文の *tue*-迂言形が控えめな依頼を表すと記述している。

(52) schwz. *Tüend iez uufpasse*! (命令文の語調緩和)

tut etwas aufpassen-INF

気を付けてください

Weber (1987: 250)

(53) schwz. *Tüend er au öppis chraame*? (疑問文の語調緩和)

tut ihr auch etwas kaufen-INF

君たち、何か買ってくれないかな

Weber (1987: 250)

スイスドイツ語のうち最高地アレマン方言 (Höchstalemannisch) で

は、*tue* が *zum*-不定詞を取り、使役の意味を表す (Schwarz 2009: 22, Hodler 1969: 319) (54)。

(54) schwz. *Das tuet 'nen z'pische.* (使役)
das tut ihn zum-Keuchen
それは彼の息を上がらせる
Schwarz (2009: 23)

また *tue*-迂言形は、普通でない語形の回避 (55) や弱音節の連続の回避 (56) のために使用されるという (Weber 1987: 249)。例えば (55) では、本動詞 *bäle*「ほえる」を語形変化することが一般的ではないため、人称変化を回避する手段として、*tue*-迂言形が使われるという。一方で (56) の *uusföppele*「からかう」のように *-ele* や *-ere* で終わる動詞は、不定詞で弱音節が連続しており、それに変化語尾が付いた煩雑な語形を避けるため、*tue*-迂言形が使用されるという。

(55) schwz. *De Hund tuet bäle.*
der Hund tut bellen-INF
その犬はほえる
Weber (1987: 249)

(56) schwz. *Iez tuet er mi scho wider uusföppele.*
jetzt tut er mich schon wieder ausfoppen-INF
今彼は私をまたからかっている
Weber (1987: 249)

統語的環境については、平叙文の他、副文 (44) (49) や命令文 (52)、疑問文 (53) がある。副文の *tue*-迂言形に関し、Schönenberger/Penner (1995: 319) は、副文で *tue*-迂言形を使うと容認度が落ちることを指摘

している (57)。3.4 節で筆者が Pinheiro-Weber (2010) を対象として行ったコーパス調査でも、主文で 8 例の *tue*-迂言形が見られた一方で、副文の例は見つからなかった。バイエルン方言の *doa*-迂言形と同じく、*tue*-迂言形も副文では避けられる傾向にあると言える。Hodler (1969: 319) には、スイスドイツ語の *tue*-迂言形が完了形と共起しないという記述があるが、これは使役用法には当てはまらず、Schwarz (2009) には完了形で使用される使役用法の例がある (58)。

(57) schwz. ??*dass er morn tuet schaffe*. (副文)

dass er morgen tut arbeiten-INF

彼が明日働くこと

Schönenberger/Penner (1995: 319)

(58) schwz. *Sie heind iro Stall tuon z'flättigun*. (使役)

sie haben ihren Stall getan zum-Reinigen

彼らは彼らの畜舎を掃除させた

Schwarz (2009: 23)

4.3.4. アルザスドイツ語における迂言形 *tüen*/*düen*-迂言形

上部ドイツ語のうち、フランスのアルザス地方で話される低地アレマン方言は、アルザスドイツ語と呼ばれる。アルザスドイツ語の *tüen*/*düen*-迂言形の特徴を記述した柴崎 (2014: 31) によると、*tüen*/*düen*-迂言形には「先行文との対比において後続文の動詞概念を強調する機能」があるといい、その例文として (59) が挙げられている。

(59) els. *Ghèèrt han i s schò, aber <u>glaube</u> <u>duen</u> i s nit.* (話題化・焦点化)
gehört habe ich es schon aber glauben-INF tue ich es nicht
聞いたよ、私はそれを。しかし信じることは、私はしない
柴崎 (2014: 31)

また、*tüen*/*düen*-迂言形は接続法の表示に用いられる (柴崎 2014: 40)。アルザスドイツ語には、接続法 I と接続法 II の両方が残っているが、その語形は一部の動詞[32]を除いて消失している。接続法の語形を欠く動詞において、*tüen*/*düen* の接続法 II の語形である *tàt*/*dàt* が接続法 I・接続法 II を表すという (60) (61)。

(60) els. *Mi Pape sàit nur immer, Ihr <u>tàte</u> wie ei Loch <u>süffe</u>.*
mein Papi sagt nur immer ihr tätet wie ein Loch saufen-INF
(接続法 II (引用))
私のパパはあなたが大酒飲みでいつもたくさん酒を飲むと言う
柴崎 (2014: 41)

[32] 接続法 I が残存している語には *seig* (dt. *sei*), *heig* (dt. *habe*) が、接続法 II が残存している語には *wàr* (dt. *wäre*), *hätt* (dt. *hätte*), *gàb* (dt. *gäbe*), *kàm* (dt. *käme*), *sod* (dt. *sollte*), *kennt* (dt. *könnte*), *wisst* (dt. *wüsste*), *tàt*/*dàt* (dt. *täte*) などが挙げられる。

(61) els. *An eyrem Platz tàt ich d'rno üsstige.* (接続法 II (非現実))

an eurem Platz täte ich dann aussteigen-INF

私があなたの立場なら手を引くよ

柴崎 (2014: 42)

他の上部ドイツ語方言同様、アルザスドイツ語の *tüen*/*düen*-迂言形は継続相 (62) や反復相 (63) といったアスペクトの表示に用いられるという (柴崎 2014: 39)。

(62) els. *Drum frog ich das Biew'le, wu do tüet steh.* (継続相)

darum frage ich das Bübchen der da tut stehen-INF

だから私はそこに立っている少年に尋ねる

柴崎 (2014: 39)

(63) els. *M'r düet sich immer widder treeschte.* (反復相)

man tut sich immer wieder trösten-INF

繰り返し何度も自分を慰め続ける

柴崎 (2014: 39)

アルザスドイツ語の *tüen*/*düen*-迂言形は、命令文と疑問文の語調緩和にも用いられる (64) (65)。柴崎 (2014: 38) によると、*tüen*/*düen*-迂言形の語調緩和用法は、無愛想あるいは性急な印象を与えるいわゆる命令的・尋問的口調を和らげており、標準ドイツ語の心態詞 *mal* に似た用法であるとされる。

(64) els. *Due di e bitzeli zämmenää!* (命令文の語調緩和)

tu dich ein bisschen zusammennehmen-INF

少し集中してちょうだい

柴崎 (2014: 38)

(65) els. *Tüet'r dr'no glugse, wie-n-e Hüehn?* (疑問文の語調緩和)

tut-er dann Schluckauf-haben-INF wie-ein Huhn

彼はにわとりみたいにしゃっくりをしているの？

柴崎 (2014: 39)

その他、音声的煩雑さを避ける用法として (66) が挙げられている。柴崎 (2014: 36) によると、不定詞が *-re*、*-le*、*-ne*、*-me* で終わる動詞で、アクセントの置かれない音節の連続を避けるため、*tüen*/*düen*-迂言形が使われるという。

(66) els. *Dien er èppis schryynere?*

tut ihr etwas schreinern-INF

君たちは日曜大工で何か作るの？

柴崎 (2014: 36)

迂言形が使用される統語的環境は、他の上部ドイツ語方言と同様、命令文 (64)、疑問文 (65) (66)、副文 (62) と多くの文タイプに及ぶ。

4.3.5. 上部ドイツ語における「不定詞＋tun」迂言形の談話機能

4.3.2 節から 4.3.4 節までは、上部ドイツ語方言の迂言形を 3 節に分けて論じたが、上部ドイツ語全体についての指摘も存在する。本節では、Abraham/Fischer (1998) および Abraham (2005) が論じている、上部ドイツ語における「不定詞＋tun」迂言形の談話機能を扱う。

バイエルン方言、スイスドイツ語、アルザスドイツ語では迂言形が接続法の表示に用いられるが、その一方で、明確に接続法を示す総合的形式も残っている。接続法の語形が残っているにも関わらず、迂言形が使用される要因として、Abraham/Fischer (1998) は、上部ドイツ語の「不定詞＋tun」迂言形の使用に、本動詞のレーマ化という談話機能的な要因が働いていると指摘した。すなわち、上部ドイツ語では本動詞を新情報として右枠に置き、レーマ化するために「不定詞＋tun」迂言形が用いられるという。

Abraham (2005) は、なぜ上部ドイツ語が情報構造を優先する言語であるかということに関して、2 つの特徴を挙げている。その 1 つは上部ドイツ語が基本的に書き言葉ではなく、話し言葉だということである。話し言葉において聞き手は短期的な記憶を頼りにして話し手の発話を理解する。しかし、人間の短期的な記憶には限界があるので、話し言葉では情報構造に沿わない文は嫌われ、情報構造に沿った文が好まれる傾向にあるという。話し言葉である上部ドイツ語においては、「旧→新」の順序で情報を伝えることが重要であり、「不定詞＋tun」迂言形を用いることにより、本動詞が V2 の位置に固定される必要が無くなるため、そのような情報の順序が実現されやすくなる。もう 1 つは、上部ドイツ語における過去形の消失である。今日の上部ドイツ語では過去形は存在せず、完了形がその意味を引き継いでいる。つまり、上部ドイツ語は過去の表現に関して、総合的語形から分析的な構文に移行したということである。Abraham (2005) はこの移行を談話機能に適さない S-V-O 構造から談話機能に適した S-Aux-O-V 構造へ

の移行の一部であると見なし、上部ドイツ語の「不定詞＋tun」迂言形も S-Aux-O-V 構造の実現の一翼を担っていると指摘した。

関連する指摘は文法書などにも見られる。Merkle (1984[2]: 66) は、バイエルン方言の *doa*-迂言形に関して、右枠に本動詞を置く構文が好まれるとしており、また、アルザスドイツ語の *tüen*/*düen*-迂言形に関して柴崎 (2014: 34) は、不定詞を右枠に置くタイプの *tüen*/*düen*-迂言形が「語用論的な機能」を担っていると記述している。

4.3.6. ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形のまとめ

4.3 節で扱ったドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形の統語的分布と用法のまとめを、3 章で扱った低地ドイツ語の *doon*-迂言形とあわせて提示する。まず統語的分布の概略を表 4-2 に載せる。

		nd.	md.	bair.	schwz.	els.
主文	平叙文 (本動詞前域)	○	○	○	○	○
	平叙文 (本動詞右枠)	×	○	○	○	○
	命令文	×	○	○	○	○
	疑問文	×	?	○	○	○
副文		○	△	△	△	△

表 4-2：ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形の統語的分布

表 4-2 を見ると、標準ドイツ語の *tun*-迂言形と異なり、方言における迂言形が様々な環境で使用されていることが分かる。標準語の *tun*-迂言形が主文で本動詞を前域に置く形でしか用いられないのに対し、方言における「不定詞＋tun」迂言形は、本動詞を右枠に置く文や命令文、疑問文、さらには副文においても使用される。その分布は、方言間で大きな差が存在し、全ての方言に共通していると言えるのは、主文で本動詞を前域に置く文型のみである。3 章で行った調査から分かるように低地ドイツ語の *doon*-迂言形は副文に偏り、逆に上部ドイツ語においては、平叙文、命令文、疑問文を含む主文で使用され、副文では避けられる傾向にある。上部ドイツ語の迂言形が副文において使用されにくいことがはっきりと論じられることは少ないが、3 章で行ったコーパス調査では主文に偏る分布が見られたほか、先行研究でもそのような傾向への言及が散見される (Eroms (1984: 132) の (38) に対する記述や、Schönenberger/Penner (1995: 319) の (57) に対する記述)。

通常「不定詞＋tun」迂言形は完了形など他の迂言構文と共起しないことが多いが (28a) (39)、本節で挙げられた例文には受動の助動詞や完了形と共起する例もあった (41) (58)。私見では、このような迂言形では使役や接続法の表示という用法が確立しているため、言い換えれば文法化の度合いが高いために、このような文型が許容されていると考えられる。

(28a) md. **Ek höbb gedohn lihre.* (完了形)
ich habe getan lernen-INF
Müller (1964: 1447)

(39) bair. **Mià ham awàdn dõ.* (完了形)
wir haben arbeiten-INF getan
Merkle (1984^2: 67)

(41) bair. *I dààd gfrågd weàn.* (受動の助動詞)
ich täte gefragt werden-INF
私は尋ねられると思う
Merkle (1984^2: 64)

(58) schwz. *Sie heind iro Stall tuon z'flättigun.* (使役)
sie haben ihren Stall getan zum-Reinigen
彼らは彼らの畜舎を掃除させた
Schwarz (2009: 23)

また、諸方言における「不定詞＋tun」迂言形には、用法の点でも大きな差異が存在する。表 4-3 に、これまでの研究で挙げられた迂言形の用法を載せる。

	nd.	md.	bair.	schwz.	els.
話題化・焦点化	○	○	○	○	○
形態的簡素化	○	○	○	○	○
韻律	○	×	×	×	×
時制表示	○	—	—	—	—
接続法の代用 (非現実モダリティ)	△	—	—	—	—
接続法表示	—	○	○	○	○
語調緩和	×	?	○	○	○
レーマ化 (談話機能)	×	?	○	○	○
アスペクト	△	△	△	△	△
未来表現	×	△	×	×	×

表 4-3：ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形の用法 (使役を除く)

表 4-3 には 10 個の用法が載せられているが、各方言に共通している用法は、本動詞の話題化・焦点化用法と形態的簡素化用法のみである。低地ドイツ語 *doon*-迂言形の形態的簡素化用法は、3 章では触れられなかったが、曖昧な時制の形態表示という機能は、*doon* によって形態を簡素化しているとも取れるという点から、本稿では *doon*-迂言形にも形態的簡素化用法があるとして議論を進める。アスペクト用法も全ての方言において言及されており、共通しているように見えるが、習慣相や進行相など方言によって表すアスペクトの定義が微妙に異なるうえ、先行研究ではアスペクト用法の存在自体に関する疑問も提示されている。3 章で行った調査では、低地ドイツ語の *doon*-迂言形のアスペクト用法は周辺的な用法であると結論付けられており、中部アレマン方言の調査を行った Schwarz (2009) も、迂言形のアスペクト用法を明確に

確認できないと結論付けている。したがって、ドイツ語方言における「不定詞＋tun」迂言形のアスペクト用法は完全に否定することはできないものの、再検証が必要だと思われる。同様に、3 章で中核的な要因ではないとされた低地ドイツ語の *doon*-迂言形の接続法の代用用法と、経験的な裏付けに乏しい中部ドイツ語の未来表現用法も、再検討を要する用法であると考える。

上記の 5 用法を除いた、韻律・時制表示・接続法表示・語調緩和・レーマ化の 5 つは、低地ドイツ語と上部ドイツ語で正反対の分布を示す。これらのうち、接続法表示・語調緩和・レーマ化は上部ドイツ語で、韻律・時制表示は低地ドイツ語において確認できる。中部ドイツ語の *don*-迂言形は、どちらか一方に分類することは難しいが、本動詞を右枠に置いた文や命令文で使用されることから、低地ドイツ語の *doon*-迂言形よりもむしろ上部ドイツ語の迂言形に共通点が多いと言える。次節では、このような用法の差がなぜ現れるかについて検討し、本章のまとめとする。

4.4. まとめ

4.2 節では西ゲルマン諸語の標準語における「不定詞＋tun」迂言形を概観し、その用法が規範意識と関係した「論理性」によって制限されていることを見た。4.3 節では、ドイツ語諸方言における「不定詞＋tun」迂言形を概観し、それらの分布・用法が低地ドイツ語と上部ドイツ語で大きく異なることを見た。本節では、前節までの観察から、これら「不定詞＋tun」迂言形に共通する特徴を挙げる。

西ゲルマン諸語の「不定詞＋tun」迂言形の用法は、言語・方言の間で差異が大きい一方で、共通する用法として話題化・焦点化用法がある。これは「不定詞＋tun」迂言形の存在が確認できないルクセンブルク語とアフリカーンス語を除いて、本章で扱った全ての言語・方言の迂言形に備わっている。標準語では、オランダ語 *doen*-迂言形の使役用法を除けば、話題化・焦点化用法以外の用法は認められない。4.2 節で見たとおり、これは「論理性」を伴っていない迂言形が排除されるためであるとされるが、一方でドイツ語諸方言では、話題化・焦点化用法以外にもさまざまな用法が存在する。低地ドイツ語の *doon*-迂言形は、副文末で主に韻律形成や時制表示に使用され、上部ドイツ語の迂言形は、主に主文で接続法表示や疑問文と命令文の語調緩和などに使用される。また、4.3.5 節で見たように、上部ドイツ語の迂言形は、主文においては本動詞をレーマ化するという談話的な機能を担う。

筆者は、語彙的意味を持たない「不定詞＋tun」迂言形の用法は、当該言語・方言の構造的特徴を反映しているという点で共通していると考える。上部ドイツ語の迂言形が接続法表示・語調緩和・動詞のレーマ化などの用法を持つのに対して、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は韻律用法や時制表示用法を持つ。この用法と対応するように、上部ドイツ語では接続法が残っており、過去形が存在せず、対照的に低地ドイツ語では接続法が消失し、過去形が保たれている。また、迂言的構文が多い上部ドイツ語では、それが情報構造に転用されやすいという事

情がある。両方言における「不定詞＋tun」迂言形の分布・用法の差異は、*tun* に当たる動詞に語彙的意味が存在しないため、両方言の構造的差異が「不定詞＋tun」迂言形に強く反映された結果だと考えられる。また、標準ドイツ語・オランダ語・西フリジア語における「不定詞＋tun」迂言形が「論理性」によって制限されているという事情も、標準語の持つ規範意識の高さを反映していると言えるだろう。

本章の仮説を検証するためには、以下の点でのさらなる研究が必要である。まず、本章で不確かであると判断されたアスペクトや未来表現などの用法に関して実証的な調査を行い、どの程度それらが文法化されているかを調査する必要がある。また、本章では本動詞の話題化・焦点化用法を V2 語順と関連付けて論じたが、V2 語順を持つルクセンブルク語とアフリカーンス語で、迂言形による本動詞の話題化・焦点化が確認されない理由が明らかになっておらず、この点についてもさらなる研究が必要である。さらに、迂言形が使用される統語的分布について、本章では他の迂言構文と共起している例をいくつか取り上げたが、「不定詞＋tun」迂言形がどのような条件で他の迂言構文と共起可能かという問題も今後の課題の 1 つに含まれるだろう。本章の仮説は、英語を除く西ゲルマン諸語に関わるものだが、ドイツ語以外の方言については未調査であり、オランダ語などの方言における迂言形にもこの仮説が当てはまるかという点も今後の課題となる。

5. 低地ドイツ語における疑似並列

5.1. 導入

5 章は、低地ドイツ語の疑似並列 (engl. pseudo-coordination) を扱う。疑似並列は、(1) のとおり、2 つの動詞が並列接続詞 *un* (dt. *und*) で結ばれ、同じ時制、人称変化を示すが、2 つの出来事を表すのではなく、単一の出来事を表す構文を指す (Josefsson 1991: 144、Proske 2017: 178)。本章では、①並列接続詞で結ばれた 2 つの動詞の文法的形態 (時制、人称変化) が同じで、②単一の出来事を指すという基準を満たす構文を疑似並列とする。そして、問題を統一的に捉えるため、1 番目の動詞を V1、2 番目の動詞を V2 と表す。

(1) nd. *Nu füng he an un snack vun fröher.*
nun fing er an und redete von früher
今、彼は昔のことについて話し始めた
(Höder 2012: 186)

Bernhardt (1903: 18) によると、不変化詞 *bi* (dt. *bei*) によってある行為の継続を表す際、*to*-不定詞 (dt. *zu*-不定詞) を用いる他 (2)、*un* で結ばれた疑似並列 (3) を使うこともでき、後者は目的語がある場合に使われやすいという。低地ドイツ語において、並列接続詞 *un* を用い、*to*-不定詞と同等の機能を持つ構文には、シュレースヴィヒ方言の *un*-不定詞構文がある (4)。この構文は、デンマーク語の影響とされ (Bock 1933: 96)、常に不定詞が *un* に後続する点で本章の対象から外れる。

(2) nd. *Ick weer (jüss) dårbi n breef to schriben.*

ich war gerade dabei einen Brief zu schreiben-INF

私はちょうど手紙を書いているところだった

(Bernhardt 1903: 18)

(3) nd. *Ick weer (jüss) bi un schreef n breef.*

ich war gerade bei und schrieb einen Brief

私はちょうど手紙を書いているところだった

(Bernhardt 1903: 18)

(4) nd. *Ik heff Lust un lopen weg.*

ich habe Lust und laufen weg

私は走り去りたい

(Bock 1933: 97)

疑似並列的な文は、標準ドイツ語においても全く不可能という訳ではない。まず、標準ドイツ語にも、従属構造の 1 つである *zu*-不定詞を取る述語において、並列が用いられることがあり (5) (6)、そうでない場合でも、並列句が疑似並列的な特徴を持つことがある。例えば (7) は、ローベルト・ヴァルザー (Robert Walser、1878-1956) の「森林火災」 (Der Waldbrand) からの一節であるが、この文では並列された 3 つの動詞によって別々の出来事が表されているというより、走るという行為に並行して、叫び、帽子を振る[33]という行為が起こったことが表されている。したがって、この文の並列句は 1 つの複合的な出来事を提示しており、その点で疑似並列的であると言える。

[33] 帽子を振るという行為は目的語抱合を伴う動詞 *hüteschwenken* により、一語で表されている。

(5) dt. *Hans war so nett und besuchte sie.* (= *sie zu besuchen*)

ハンスはとても親切なので彼女を訪問した

(Reis 1993: 204)

(6) dt. *Er hub an und sprach.* (= *zu sprechen*)

彼は話し始めた

(村上 2003: 19)

(7) dt. *Unten in den Straßen liefen und schrien und hüteschwenkten die erregten Bürger.*

下では通りで興奮した人々が走り、叫び、帽子を振っていた

(Walser 1963: 43)

低地ドイツ語の疑似並列の V1 には、アスペクトの意味を持つ動詞が用いられる[34]。Schl.-Holst. Wb. には、*biblieven*「～し続ける」、*bigahn*「～し始める、～にとりかかる」、*bikamen*「～し始める、～にとりかかる」を V1 とした疑似並列が見られる (8)、(9)、(10)。*biblieven* は、ある持続した行為を表し (Bd. 1, Sp. 336)、*bigahn* と *bikamen* は、ある行為の開始を表す (Bd. 1, Sp. 332-333)[35]。それに加え、文法書である Thies (2017[3]: 67) には、*anfangen*「始める」、*begünnen*「始める」、*biwesen*「～しているところだ」が V1 として用いられるという記述がある (11) (12)[36]。本構文を扱った Höder (2012: 186) には、上記の動詞の他、*wesen*

[34] 低地ドイツ語の疑似並列は、本稿で挙げられたアスペクト動詞において必ず使用されるという訳ではなく、*to*-不定詞と競合関係にある。1955 年から 1973 年にかけて録音されたツヴィルナーコーパス (Zwirner-Korpus) を用い、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州出身者の会話のうち、トランスクリプションのある 155 の会話を、動詞 *anfangen* と不変化詞 *bi* で検索したところ、動詞 *anfangen* では疑似並列の例が 1 例見つかり、その他の *anfangen* は *to*-不定詞を取っていた。動詞 *biwesen*、*bikamen*、*bigahn* では、疑似並列の例がそれぞれ 11 例、4 例、3 例で、*to*-不定詞を用いる例は、*biwesen* で 5 例、*bigahn* で 1 例であった。

[35] *bigahn* と *bikamen* では、*to*-不定詞よりも *un* を用いた疑似並列が好まれる (Schl.-Holst. Wb. Bd. 1, Sp. 332-333)。*biblieven* では、*to*-不定詞の例は見つからなかった。

[36] ただし Thies (2017[3]) は、*begünnen* の例文を載せていない。

「である」を V1 として用いる不在構文の例がある (13)。

(8) nd. *He bleev bi un keek mi an.*

er blieb bei und guckte mich an

彼は私を見続けていた

(Schl.-Holst. Wb. Bd. 1, Sp. 336)

(9) nd. *Nu gah man bi un ęt wat.*

nun geh nur bei und iss was

さあ食べ始めなさい

(Schl.-Holst. Wb. Bd. 1, Sp. 347)

(10) nd. *Ik keem bi un neih em een.*

ich kam bei und nähte ihm eine (= haute ihm eine)

私は彼を殴り始めた

(Schl.-Holst. Wb. Bd. 1, Sp. 348)

(11) nd. *Se fungen an un hauen op em daal.*

sie fingen an und schlugen auf ihn runter

彼らは彼を殴り始めた

(Thies 2017[3]: 67)

(12) nd. *He is bi un plöögt.*

er ist bei und pflügt

彼は耕しているところだ

(Thies 2017[3]: 72)

(13) nd. *Ik bün un haal in.*

ich bin und hole ein

私は買い物に出ている

(Höder 2012: 186)

Höder (2012) は、低地ドイツ語の疑似並列について、3 つの統語的

な特徴を挙げている。1 点目は、この構文が通常の並列構文と異なり、主語の繰り返しを許さず、常に接続詞 *un* を要求する点である (14)。2 点目は、疑似並列において V1 と V2 の相互の入れ替えが許されず、語順が決まっている点である (15)。3 点目は、疑似並列では否定詞を 1 つしか必要としない点である (16)。

(14a) nd. *Se gaht bi un maakt Kaffe.*
sie gehen bei und machen Kaffee
彼らはコーヒーを淹れ始める
(Höder 2012: 186)

(14b) nd. **Se gaht bi un se maakt Kaffe.*
sie gehen bei und machen Kaffee
彼らはコーヒーを淹れ始める
(Höder 2012: 187)

(14c) nd. **Se gaht bi, se maakt Kaffe.*
sie gehen bei und machen Kaffee
彼らはコーヒーを淹れ始める
(Höder 2012: 187)

(15a) nd. *Mien Vadder is bi un backt Koken.*
mein Vater ist bei und backt Kuchen
私の父親はケーキを焼いているところだ
(Höder 2012: 186)

(15b) nd. **Mien Vadder backt Koken un is bi.*
mein Vater ist bei und backt Kuchen
私の父親はケーキを焼いているところだ
(Höder 2012: 187)

(16a) nd. *Se gaht nich bi un maakt Kaffe.*

sie gehen nicht bei und machen Kaffee

彼らはコーヒーを淹れ始めない

(Höder 2012: 187)

(16b) nd. **Se gaht nich bi un maakt nich Kaffe.*

sie gehen nicht bei und machen Kaffee

彼らはコーヒーを淹れ始めない

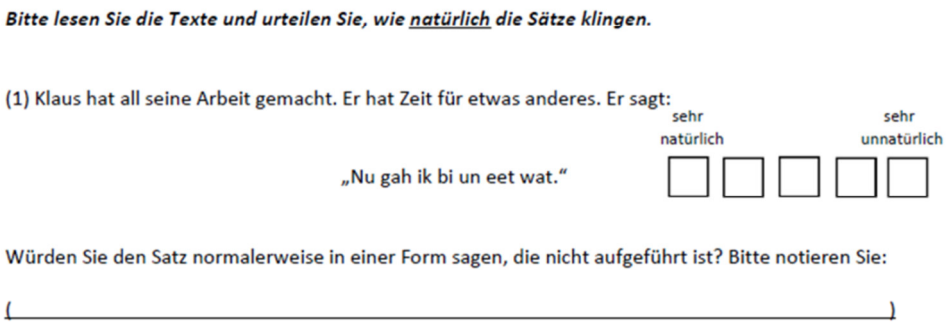
(Höder 2012: 187)

低地ドイツ語の疑似並列は、辞書、文法書や一部の研究 (Höder 2012) においてその記述を見つけられるが、経験的な調査や他言語との対照は十分なされているとは言い難い。本章では、北低地ザクセン方言を対象として、アンケートを用いた調査とスウェーデン語およびアフリカーンス語の疑似並列との比較を行い、低地ドイツ語の疑似並列の特徴を記述することを試みる。そして、低地ドイツ語の疑似並列と文法化との関係について論じる。

5.2. アンケート調査

本節では、低地ドイツ語における疑似並列の統語的特徴を記述するため、以下の 2 つの問題に答えを与えることを試みる。第 1 点は、この構文において、V1 にはどのような動詞が用いられるかという問題である。先行研究では、低地ドイツ語の疑似並列は体系的に研究されることはほとんどなく、個々の動詞における可能なオプションの 1 つとして記述されるのみである。そのため本章では、この構文において使用される V1 のより包括的な記述を試みた。第 2 点は、低地ドイツ語の疑似並列が、単純な肯定文以外でも用いられるかという問題である。これまでの記述では、肯定文における疑似並列の例が多かったが、本章では、Höder (2012) で言及された否定詞を含む文、そして、通常の並列構造では認められない統語的移動を伴う文を調査する。

アンケート調査では、例文の評価を尋ねるテストを作成した。参加者は、図 7 のように例文を提示され、それを 5 段階で評価する。それぞれの例文にはコンテクストを与え、自然な状況が想像されるように配慮した。テストでは、参加者が規範に基づいて評価することを避けるため、「文法的」「正しい」という語を用いず、「以下の文がどの程度自然に聞こえるか」という問いかけを用意し、分析の際には「許容度」と読み替えた。参加者数の点から、本稿の調査は小規模なものであったため、結果の表には単なる平均値を載せ、統計的な処理は行っていない。


Bitte lesen Sie die Texte und urteilen Sie, wie natürlich die Sätze klingen.

(1) Klaus hat all seine Arbeit gemacht. Er hat Zeit für etwas anderes. Er sagt:

sehr natürlich — sehr unnatürlich

„Nu gah ik bi un eet wat."

Würden Sie den Satz normalerweise in einer Form sagen, die nicht aufgeführt ist? Bitte notieren Sie:

(_____)

図 7：アンケート用紙

アンケートによる調査は、2 回に分けて行った。第 1 回のアンケートは 2018 年 11 月から数か月間行われ、191 人が参加した。第 2 回のアンケート調査は、2019 年 4 月から数か月間行われ、78 人が参加した。両調査の参加者の年齢と出身を表 5-1 から表 5-4 に載せる。

年齢	人数
70-	113
60-69	33
50-59	27
40-49	4
-39	2
無回答	12

表 5-1：第 1 回アンケート参加者の年齢

出身	人数
シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン	119
ニーダーザクセン	38
ハンブルク	7
ノルトライン＝ヴェストファーレン	1
無回答	26

表 5-2：第 1 回アンケート参加者の出身

年齢	人数
70-	53
60-69	10
50-59	12
40-49	1
-39	0
無回答	2

表 5-3：第 2 回アンケート参加者の年齢

出身	人数
シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン	68
ニーダーザクセン	5
メクレンブルク＝フォアポマーン	2
無回答	3

表 5-4：第 2 回アンケート参加者の出身

5.2.1. 第 1 回アンケート調査

ここでは、低地ドイツ語の疑似並列の V1 にどのような動詞が用いられるかという問題を考えるため、第 1 回アンケート調査において疑似並列を扱った 8 つの文の結果を提示する。5.1 節で見たように、低地ドイツ語の疑似並列にはアスペクトの意味を持つ 7 つの動詞が挙げられている。*anfangen*、*begünnen*、*bigahn*、*bikamen* の 4 つは、動作の開始を表す始動相の動詞である。このうち、後者 2 つは標準ドイツ語に対応する動詞がなく、これらは「始める」だけでなく「～にとりかかる」という意味も表す。*biwesen*、*biblieven* も標準ドイツ語には対応する動詞がなく、*biwesen* は「～しているところだ」という目下の進行の意味を表すのに対し、*biblieven* はある動作が止まずにこの後も続いていくという継続の意味を表す点で異なり、本章では、前者を進行相、後者を継続相の動詞と見なす。また、*wesen* は、不在構文の動詞であるが、これも実質的にアスペクトの構文と見なすことができる。不在構文 (dt. Absentiv) とは、標準ドイツ語では「不定詞＋*sein*」の形で表される構文で、主語が別の場所で何かを行っていることを表す (dt. *Ich bin einkaufen.*「私は買い物に行っている」)。これは不在の意味に加えて進行の意味を含んでいるため、進行相の一種として扱うことができる。本調査では、先行研究にあるアスペクトを代表させるため、始動相の (A1) *anfangen* と (A2) *bigahn*、進行相の (A3) *biwesen*、継続相の (A4) *biblieven*、そして不在構文の (A5) *wesen* を例文に用いた。始動相では、*anfangen*、*begünnen* と *bigahn*、*bikamen* が異なる意味を持つため、(A1) で「始める」、(A2) で「～にとりかかる」の例文を作成した。本調査ではそれに加えて、先行研究にない 3 つの動詞の例文を作成した。先行研究で挙げられたアスペクトの意味を持つ 7 つの動詞は、始動・進行 (不在構文) ・継続に限られており、終了を表す動詞が欠けている。5.3 節で述べるように、他の言語の疑似並列では、終了を表す動詞も使用可能な場合があり、低地ドイツ語の疑似並列がアスペクト

と関連しているという仮定に立てば、終了相の動詞が V1 として用いられることも十分に予想できる。そのため、本調査では終了相の (A6) *ophören*「終える」の例文を作成した。また、5.3 節で述べるように、通言語的に見れば、疑似並列の V1 はアスペクト動詞に限らない。そのため本調査では、非アスペクト動詞の (A7) *planen*「計画する」、(A8) *versöken*「試みる」の例文を作成した。この 2 つの動詞の選定は、*planen*、*versöken* に対応するスウェーデン語の動詞 *planera*「計画する」、*försöka*「試みる」のうち、前者は疑似並列を形成しないが、後者は疑似並列を形成するという対立を考慮に入れたものである (Wiklund 2007)。この対立は、「計画する」では、V1 の意味と V2 の意味が時間的に離れて成立しうるが (dt. *Gestern plante ich, morgen einen Kuchen zu backen.*「明日ケーキを焼くことを昨日計画した」)、「試みる」では、V1 の意味に連続して V2 の内容が生じる必要があることに由来するという (dt. **Gestern versuchte ich, morgen einen Kuchen zu backen.*「*明日ケーキを焼くことを昨日試みた」)。(A7-8) により、低地ドイツ語の疑似並列において非アスペクト動詞が使用できるか、そして前述のような非アスペクト動詞の意味の違いが疑似並列の許容度に影響しうるかを調べる。

(A1) nd. *Denn fung ik an un lees dat Book.*
dann fing ich an und las das Buch
それから私はその本を読み始めた

(A2) nd. *Denn gung ik bi un lees dat Book.*
dann ging ich bei und las das Buch
それから私はその本を読むことにとりかかった

(A3) nd. *He is graad bi un meiht Rasen.*
er ist gerade bei und mäht Rasen
彼はちょうど芝生を刈っているところだ

(A4) nd. *Ik bliev noch twee Stünnen lang bi un speel Gitarre.*

ich bleibe noch zwei Stunden lang bei und spiele Gitarre

私はさらに 2 時間，ギターを弾き続ける

(A5) nd. *He is un köfft in.*

er ist und kauft ein

彼は買い物に出ている

(A6) nd. *He höört op un arbeidt in de School.*

er hört auf und arbeitet in der Schule

彼は学校で働くのをやめる

(A7) nd. *Anna plaant un fohrt na Italien.*

Anna plant und fährt nach Italien

アナはイタリアに行くことを計画している

(A8) nd. *Ik versöök un repareer dat.*

ich versuche und repariere das

私はそれを修理しようとしている

第 1 回のアンケート調査には、191 人が参加した。表 5-5 に、アンケート調査の結果を記載する。右の列の許容度は、参加者による 5 段階の評価のうち、最低を 0、最高を 4 と読み替え、その平均を取ったものである。本稿では許容度が 3.00～4.00 を「自然」、2.00～2.99 を「比較的自然」、1.00～1.99 を「比較的不自然」、0.00～0.99 を「不自然」と見なす。本アンケートで用いられた動詞 8 つのうち、2 以上の評価であった 5 つの動詞 (*anfangen*、*bigahn*、*biwesen*、*biblieven*、*versöken*) は「比較的自然」、1 点台後半の評価を得た *planen* は「比較的不自然」、1 点台に届かなかった 2 つの動詞 (*ophören*、*wesen*) は「不自然」の 3 つのグループに分けることができる。

例文	V1 の動詞	許容度
A1	*anfangen*	2.63
A2	*bigahn*	2.62
A3	*biwesen*	2.94
A4	*biblieven*	2.35
A5	*wesen*	0.96
A6	*ophören*	0.64
A7	*planen*	1.70
A8	*versöken*	2.46

表 5-5：第 1 回アンケート調査の結果

始動相・進行相・継続相のアスペクト動詞 *anfangen*、*bigahn*、*biwesen*、*biblieven* は、「比較的自然」と判断された一方で、終了相の動詞 *ophören*、不在構文の動詞 *wesen* は、「不自然」と評価された。したがって、アスペクト動詞では、始動相・進行相・継続相の動詞と終了相・不在構文の動詞で評価が分かれたと言える。非アスペクト動詞では、*versöken* は、アスペクト動詞と同様「比較的自然」であるとされ、この構文がアスペクト動詞に限らない可能性があることが分かった。一方で *planen* は許容度が 1.70 であり、本調査では、スウェーデン語の *planera* vs. *försöka* と同様の対立が確認できた。ただし、*ophören*、*wesen* の許容度は、*planen* の許容度よりもさらに一段低い。そのため、V1 と V2 の時間的な隣接性とは別の要因を想定する必要があり、それについては 5.4 節で詳しく述べる。

5.2.2. 第 2 回アンケート調査

第 2 回アンケート調査では、対象を 1 つの動詞に絞り、以下の 2 つの問題を調査することを試みる。第 1 点は、Höder (2012) にあるような、否定詞を 1 つのみ含む疑似並列が許容されるかという問題である。第 2 点は、通常の並列構造で認められない統語的な操作、すなわち V2 目的語の取り出しが許容されるかという問題である。*to*-不定詞よりも疑似並列において使用されやすいという記述 (Schl.-Holst. Wb. Bd. 1, Sp. 347) があることから、V1 を *bigahn* で統一し、否定詞および V2 目的語の取り出しという条件を変えて合計 8 つの例文を作成した。内訳は、否定詞を含まず、目的語の取り出しを伴わない 4 つの文 (B1-4)、否定詞を伴う 2 つの文 (B5-6)、V2 動詞句からの目的語の取り出しを含む 2 つの文 (B7-8) である。(B7-8) のうち、(B7) は wh 移動を含む焦点化の例、(B8) は目的語を前域に移動させた話題化の例である。

(B1) nd. *Nu gah ik bi un eet wat.*
nun gehe ich bei und esse etwas
今、私は何かを食べ始める

(B2) nd. *Dat sniet, aver nu geiht he bi un meiht den Rasen!*
es schneit aber nun geht er bei und mäht den Rasen
雪が降っているが、彼は芝生を刈り始める

(B3) nd. *Nu gah doch endlich bi un eet wat!*
nun geh doch endlich bei und iss etwas
さあ何かを食べ始めなさい

(B4) nd. *Nu gah doch endlich mal bi un wasch dien Auto!*
nun geh doch endlich mal bei und wasch dein Auto
さあ君の車を洗い始めなさい

(B5) nd. *Nu gah ik nich noch bi un treck mi üm, dat is al to laat.*

nun gehe ich nicht noch bei und ziehe mich um es ist schon zu spät

私はもう着替えない、すでに時間が遅すぎる

(B6) nd. *Gah nich bi un eet em!*

geh nicht bei und iss ihn

それを食べ始めないで

(B7) nd. *Wat geihst du nu bi un ittst?*

was gehst du nun bei und isst

何を食べ始めるのか？

(B8) nd. *Den Schalter geiht he immer bi un drückt.*

den Schalter geht er immer bei und drückt

そのスイッチを彼はいつも押そうとする

第 2 回のアンケート調査には、合計で 78 人が参加した。表 5-6 は、第 2 回アンケート調査の結果である。肯定文 (B1-4) は、許容度が常に 2 以上であり、「自然」または「比較的自然」と評価された。2 つの否定文 (B5-6) では、許容度が 2 から 3 の間であり、「比較的自然」と評価された。否定詞を 1 つしか含まない文は、おおむね肯定文と同じ評価を受け、Höder (2012) の記述のとおり、問題なく使用できることが分かった。一方、目的語の取り出しを伴う 2 例 (B7-8) は、焦点化と話題化のどちらの例も 2 を下回る数値であり、一貫して「比較的不自然」という評価を受けた。

例文	否定	目的語の取り出し	許容度
B1	−	−	2.20
B2	−	−	2.92
B3	−	−	2.13
B4	−	−	3.50
B5	+	−	2.94
B6	+	−	2.40
B7	−	+	1.17
B8	−	+	1.00

表 5-6：第 2 回アンケート調査の結果

以下、5.2 節で行われたアンケート調査の結果をまとめる。アンケートでは、V1 で使用される動詞、否定詞を含む文、V2 目的語の取り出しを伴う文を調査の対象とした。V1 で使用される動詞に関しては、先行研究で挙げられていた 4 つのアスペクト動詞が「比較的自然」と判断された一方、不在構文の *wesen* は「不自然」と判断された。また、終了相のアスペクト動詞 *ophören* が「不自然」とみなされ、アスペクト動詞の間に許容度の差が見られた。非アスペクト動詞では、*versöken* は「比較的自然」と判断された一方、*planen* が「比較的不自然」と判断され、V1 と V2 の時間的な隣接性という意味的な要因による差が認められた。文タイプに関しては、肯定文、否定文が「自然」または「比較的自然」と判断された一方で、V2 目的語の取り出しを伴う文は「比較的不自然」という評価であった。5.3 節では、本節で得られた低地ドイツ語における疑似並列の特徴を他言語における疑似並列の特徴と比較し、この構文を通言語的な視座で捉えることを試みる。

5.3. ゲルマン諸語における疑似並列

疑似並列的は、他のゲルマン語においても見られる。現代ゲルマン諸語において、同じ時制、人称変化を示す動詞が並列接続詞で結ばれ、単一の出来事を表す疑似並列は、スウェーデン語 (Teleman et al. 1999、Wiklund 1996, 2007)、ノルウェー語 (Hesse 2009)、アフリカーンス語 (Ponelis 1993: 326、De Vos 2005) などに存在する。これらの構文には、V2 に主語を補うことが不可能 (Wiklund 1996: 30)、V1 と V2 は交換不可 (Wiklund 1996: 36、De Vos 2005: 148)、*un* にあたる語を別の並列接続詞で置換不可 (Wiklund 1996: 35、De Vos 2005: 146) といった特徴があり、この点で低地ドイツ語の疑似並列と共通している。本節では、北ゲルマン語のスウェーデン語と西ゲルマン語のアフリカーンス語の疑似並列を取り上げ、低地ドイツ語の疑似並列と比較する。

まず、これらの疑似並列は、使用される V1 の点で差異がある。スウェーデン語において、不定詞句のかわりに疑似並列を用いることができる動詞には、アスペクト動詞 ((17) *börja*「～し始める」、(18) *fortsätta*「～し続ける」、(19) *hålla på*「～しているところだ」、(20) *sluta*「～し終える」)、主語制御動詞 (*försöka*「試みる」、*glömma*「忘れる」など)、目的語制御動詞 (*hjälpa*「助ける」、*tvinga*「強いて～させる」など) がある。アスペクト動詞は、低地ドイツ語では、*ophören*「終える」が使用される場合の許容度が低かったが、スウェーデン語ではいずれのアスペクトでも疑似並列が可能である。さらに、スウェーデン語には、通常不定詞を取らないが疑似並列を形成する動詞に、姿勢動詞 (*stå*「立っている」、*sitta*「座っている」、*ligga*「横たわっている」)、移動の動詞 (*gå*「行く」、*komma*「来る」) などがあり、これらはいずれも進行相を表す。また、動詞 *vara*「である」(dt. *sein*) も通常不定詞を取らないが、疑似並列で使用され、不在構文を形成する (21)。一方、西ゲルマン語に属するアフリカーンス語の疑似並列では、スウェーデン語と同じく進行相を表す姿勢動詞 (22) と移動の動詞が疑似並列を

形成する。

(17) schw. *Börja och läs tyska!*

beginn und lern Deutsch

ドイツ語を学び始めなさい

(Teleman et al. 1999: 907)

(18) schw. *Bo fortsätter nog och läser.*

Bo setzt fort noch und liest

ブーはまだ学び続けている

(Teleman et al. 1999: 907)

(19) schw. *Bo håller på och tvättar bilen.*

Bo hält auf und wäscht das Auto

ブーは車を洗っているところだ

(Teleman et al. 1999: 907)

(20) schw. *Sluta och skrik!*

hör auf und schrei

叫ぶのをやめなさい

(Teleman et al. 1999: 907)

(21) schw. *Han var o[ch] läste en bok.*

er war und las ein Buch

彼は本を読みに行っていた

(Wiklund 2007: 128)

(22) afr. *Ek sit en lees.*

ich sitze und lese

私は本を読んでいる

(Donaldson 1993: 220)

表 5-7 に、低地ドイツ語、アフリカーンス語、スウェーデン語の疑

似並列において用いられる V1 の種類をまとめた。スウェーデン語において、多くの種類の V1 が使用されることが分かる。また、姿勢動詞、移動の動詞が進行相の表現として使用されることを考えれば、多くの V1 がアスペクトに関係する動詞であることが分かる。ただし、低地ドイツ語の V1 は、元々アスペクトの意味を持つ動詞であるのに対し、アフリカーンス語とスウェーデン語では、姿勢動詞や移動の動詞など、本来の意味が薄れたアスペクト動詞が V1 として使用される点で異なっている。(22) では、姿勢動詞 *sit* の「座っている」という意味が背景に退き、*sit* は進行相のアスペクトマーカーとして機能している。

	afr.	schw.	nd.
姿勢動詞	hang 「ぶら下がっている」 lê 「横たわっている」 sit「座っている」 staan「立っている」	hänga 「ぶら下がっている」 ligga 「横たわっている」 sitta「座っている」 stå「立っている」	?
移動の動詞	loop「走る」	gå「行く」 komma「来る」	?
sein	―	vara「～である」	wesen
アスペクト動詞	―	börja「始める」 hålla på 「しているところだ」 fortsätta「続ける」 sluta「終える」	anfangen begünnen bigahn bikamen biwesen biblieven
主語制御動詞	―	försöka「試みる」 glömma「忘れる」	versöken
目的語制御動詞	―	hjälpa「手伝う」 tvinga「強いる」	?

表 5-7：各言語の疑似並列における V1

スウェーデン語とアフリカーンス語の疑似並列は、並列構造から逸脱した特徴を持つ。Wiklund (2007) によると、スウェーデン語の疑似並列は、V2 の目的語を取り出すことができ (23) (Josefsson 1991: 140 も参照)、代動詞 *göra* (dt. *tun*) を使い V2 動詞句を取り出すことが可能である (24)。両者は、Ross (1967) の等位構造制約 (並列構造で一方の成分のみを取り出し不可とする制約) に反し、通常の並列構造では見

られない。アフリカーンス語の疑似並列も V2 目的語の取り出しにより等位構造制約から逸脱することができる (25)。この点で、両言語の疑似並列は、V2 目的語の取り出しを許さない低地ドイツ語の疑似並列と決定的に異なる。

(23) schw. *Vad stod Anna och lagade i köket?*

was stand Anna und kochte in der Küche

アンナは台所で何を料理していたのか？

(Josefsson 1991: 140)

(24) schw. *Drack kaffe gick Lars o[ch] gjorde i lördags.*

trank Kaffee ging Lars und tat am Samstag

ラルスは土曜日にコーヒーを飲みに行った

(Wiklund 2007: 104)

(25) afr. *Wat sit Jan waarskynlik en eet?*

was sitzt Jan wahrscheinlich und isst

ヤンはおそらく何を食べているのだろうか？

(De Vos 2005: 133)

Wiklund (2007) は、スウェーデン語の疑似並列を従属構造としている。並列接続詞 *och* (dt. *und*) は、通常 [ɔ] ないし [ɔk] と発音されるが、疑似並列においては常に [ɔ] と発音され、補文標識の *att* (dt. *dass*, *zu*) と同音になることから、Wiklund は *och* を接続詞ではなく補文標識、V2 を並列句ではなく V1 の補部と分析している。一方、アフリカーンス語には、疑似並列ではないが、(26) の *gaan lees* のような CI (engl. complex initial) という現象が存在する。CI では、通常、枠構造を作る一部の動詞群が左枠において複合体を形成する。アフリカーンス語の疑似並列は (25) の他、V1 と V2 が左枠に置かれる語順 (27) も可能である。アフリカーンス語の疑似並列は、完了形で用いられるとき、過

去分詞マーカーがV1にしか付かないという特徴があり (28)、これは、V1 と V2 が 1 つのユニットを成していることを想起させる。De Vos (2005) は、疑似並列と CI を形成する他の動詞の類似点から、両者を統一的に分析しており、これによれば、アフリカーンス語の疑似並列の特徴は疑似並列そのものの特徴というよりも、CIというより広い現象の特徴を引き継いでいると考えられる。

(26) afr. *Gaan lees sy die boek?*

geht lesen-INF sie das Buch

彼女はその本を読むのか？

(Donaldson 1993: 326)

(27) afr. *Sit en lees sy die boek?*

sitzt und liest sie das Buch

彼女はその本を読んでいるのか？

(Donaldson 1993: 326)

(28) afr. *Hy het gelê en slaap.*

er hat gelegen und schlafen

彼は寝ていた

(Donaldson 1993: 226)

5.4. 低地ドイツ語における疑似並列の特徴

本節では本章のテーゼとして、低地ドイツ語の疑似並列が統語的に並列構造を持っており、通常の並列においても可能な意味の関係に基づいて動詞句が結ばれるということを主張する。第 2 回アンケート調査で見たように、低地ドイツ語の疑似並列は V2 目的語の取り出しを含む例文で一貫して「不自然」と評価されたため、本構文では従属構造ではなく並列構造を想定すべきである。並列接続詞を用いた並列構造は、同じ統語的ステータスの要素を並列するが、その意味は単なる列挙にとどまらない。並列構造では、複数の並列句が、出来事の「同時性」「継起性」に基づいて配列される。標準ドイツ語の例で説明すると、例えば (29a) では、2 つの並列句の内容は同時に成立しているが、1 番目の文は背景を説明する一方で、2 番目の文は出来事を表していると言える。また、(29b) では、継起性の意味を帯びた 2 つの出来事が並列されており、並列要素を入れ替えると出来事の順序も変わる。

(29a) dt. *Er war 7 Jahre alt, und der Vater starb.*
彼は 7 歳だった。彼の父は亡くなった
(村上 2003: 18)

(29b) dt. *Peter heiratete Inge, und sie bekam ein Kind.*
ペーターはインゲと結婚し、彼らは子供を授かった
(村上 2003: 18)

低地ドイツ語の疑似並列でも、*un* を用いた並列構造が持つ意味の多義性を背景として、意味的に自然な 2 つの動詞句が並列される場合は、統語的な並列構造を保ちながら、*anfangen* や *biwesen* などいくつかの動詞を V1 として使うことができると考えられる。並列という関係は、すべての言語に共通している訳ではなく、例えば Johannessen (1993:

204) は、従属と並列はどちらも 2 つの項同士の関係であり、どこにその線を引くかは言語によって異なるとしている。並列構造がカバーする領域が、従属構造の領域と一部で重なることもあり、標準ドイツ語でも通常 *zu*-不定詞句や *dass*-節を取る述語において、*und* を伴う並列が用いられることがある (Reis 1993)。また、Hopper/Traugott (2003[2]) は、英語の *and* とそれに対応するヨーロッパの諸言語の並列接続詞を「万能」並列語 (engl. all-purpose coordinator) と呼び、その使用範囲が広いことを指摘している。そして、ヨーロッパの外ではこうした接続詞は制限されていることから、これらの言語における疑似並列の使用と *and* に対応する接続詞が関係している可能性を指摘している (Hopper/Traugott 2003[2]: 207)。

低地ドイツ語の疑似並列では、始動相・進行相・継続相のアスペクト動詞が V1 として使用されることを見たが、これは並列構造において並列句同士の間に成立する意味の関係に基づいていると筆者は考える。始動相の動詞においては、開始という出来事の推移と具体的な行為が、出来事の順序という意味関係に沿って並列されていると言える。すなわち、ある動作が始まるとき、時系列でみれば、始まるという推移の後にその動作が後続していると捉えることができる。また、進行相・継続相の動詞では、1 つの出来事が事態の前提的な内容と具体的な内容に分けて表されていると考えられる。つまり、これらの動詞では、1 番目の文が、「～している最中、～し続けている」という背景的な情報を、2 番目の文が具体的な動作を表し、それを同時に成立している出来事として提示していると解釈することができる。この説明に従えば、非アスペクト動詞の *planen*、*versöken* も「V1→V2」という動作の継起性から、始動相の動詞と同じ説明が適用できるはずであるが、2 つの動詞の評価には差が見られた。5.2.1 節で述べたように、*planen*、*versöken* のうち、前者では V1 と V2 の間に時間的な隔たりが存在しうるが、後者では V1 と V2 を時間的に切り離すことができない。この意

味で、*planen* の V1 と V2 の継起性は、*versöken* に比べて低く、そのため、評価に差が生じたと結論付けることができる。

一方で、「不自然」と判断された *ophören* の評価は、動作の終了を意味する *ophören* に *un* を挟んで別の動詞を続けても、動作の開始を表す始動相と異なり、継起性によって動詞を結ぶことができないため、V2 に終了の意味が加わらないことが要因であると考えられる。継起性が欠如していることは，弱い継起性に基づく *planen* の疑似並列よりも評価が低いこととも合致する。*wesen* を用いた疑似並列は、同時性という意味の関係が成立するはずであるが「不自然」と評価された。これには、前半の並列句が主語とその動詞だけで構成され (nd. ?*He is.*)、そこから不在の意味を導くことが困難なためだと考えられる。低地ドイツ語の疑似並列は、並列構造に立脚しているため、片方の並列句の意味が不明瞭であれば、2 つの並列句の間に適切な意味関係が成り立たなくなり、その結果「不自然」と評価されたと考えられる。したがって、Höder (2012) の挙げる *wesen* の例は、アンケートの結果や、その裏付けとしての本説明に従い、実は非文に近いと考えられる。以上から、筆者は、低地ドイツ語の疑似並列が並列構造を持ちながら、始動相・進行相・継続相の動詞や *versöken* など一部の非アスペクト動詞を V1 として取ることができるのは、並列句同士の意味的な関係が、継起性や同時性に基づいているためであると考える。

5.5. 疑似並列と文法化

本節では、疑似並列と文法化というプロセスとの関係について述べ、低地ドイツ語の疑似並列が文法化された構文ではないことを主張する。5.3 節で見たように、スウェーデン語とアフリカーンス語の疑似並列は、V2 目的語の取り出しが可能であり、並列構造から大きく逸脱した特徴を持つ。一方で、低地ドイツ語の疑似並列は、統語的特徴の点でこれらの言語よりも制約が大きい。これは、スウェーデン語やアフリカーンス語における疑似並列が並列構造を脱しつつあるのに対し、低地ドイツ語の疑似並列が並列構造に留まっており、*un* のステータスが並列接続詞であることを示唆している。

スウェーデン語とアフリカーンス語における疑似並列では、構文が従属構造に近づいている。スウェーデン語では、5.3 節で述べたように、並列接続詞 *och* が補文標識 *att* との音韻的な類似性を背景に補文標識へ移行したと考えられる。また、スウェーデン語の疑似並列では、通常不定詞を取らない姿勢動詞が V1 として働き、進行相を表す。Kuteva (2000: 57) によると、このような姿勢動詞進行形の発達は，姿勢動詞自体が人や物の空間的存在を表す一般的な表現であることが一因であるという。このような意味的な特徴から、姿勢動詞は文法化を被り、進行相の助動詞として機能するようになったという。アフリカーンス語の疑似並列においても、姿勢動詞と移動の動詞が進行相を表している。アフリカーンス語には、接続詞と補文標識の音韻的な類似性はないが、CI という統語的な現象が存在し、同言語の疑似並列は CI の統語的特徴を引き継いでいる。したがって、これらの言語の疑似並列では、並列接続詞と補文標識の音韻的な似寄りや別の統語的な構文といった、個別言語に特有の特徴に支えられながら、V1 や並列接続詞が文法化を被り、結果的に従属構造に近づいていることが分かる。

一方、低地ドイツ語の疑似並列は、こうした従属構造化とは無縁である。低地ドイツ語では、*un* は並列接続詞のステータスを維持してお

り、疑似並列は、5.4 節で述べたように並列構造を保っている。疑似並列で使用される V1 も、スウェーデン語やアフリカーンス語とは異なり、いずれも本来アスペクト動詞であるか (*anfangen*、*begünnen*、*biblieven*、*bigahn*、*bikamen*、*biwesen*)、別の不定詞を支配できる動詞であり (*versöken*)、V1 の文法化も見られない。むしろ、5.4 節で述べたように、低地ドイツ語における疑似並列では、並列構造の多義性を背景として可能な V1 が用いられていることから、本構文では、並列構造の意味が重要な要因であると言える。英語でも、一定の意味を持つ並列構造において、Ross (1967) の等位構造制約に反した並列が見られることがある。Lakoff (1986) は、(30) のような V2 目的語の取り出しを含む例に従属構造を想定するのではなく、意味的な説明を加えており、それによると、英語の並列された動詞句のうち、「出来事の自然な推移」 (engl. natural course of events) に従うものは、等位構造制約に違反することが可能であるという。(30) では、店に行くという動作と何かを買うという動作の連続が自然な動作の連続であるため, V2 動詞句からの取り出しが可能になる。

(30) engl. *What did Harry go to the store and buy?*

ハリーは店に行って何を買ったのか？

(Lakoff 1986: 152)

従属構造の特徴を示すスウェーデン語とアフリカーンス語の疑似並列は、文法化の結果と見なすことができる一方で、低地ドイツ語の疑似並列は、文法化によって生まれた構文ではない。この構文はむしろ、元々存在している並列構造やアスペクト動詞の用法を、意味的に可能な範囲で拡張した構文であると考えられる。

おわりに

本稿は、低地ドイツ語の動詞統語論を扱った論文である。本稿の 1 章と 2 章では、本稿が扱う低地ドイツ語とその動詞体系についての前提的知識を導入した。1 章では、低地ドイツ語という言語の輪郭を描くため、低地ドイツ語の歴史・方言を概観し、それに加えて筆者が現地に滞在した際に得た知見をもとに、低地ドイツ語の現状を紹介した。2 章では、低地ドイツ語の動詞統語論の記述に先駆け、低地ドイツ語の動詞形態を記述し、動詞の変化と重要な動詞構文についての概略を提示した。これにより、日本では紹介されることの少ない低地ドイツ語という言語の全体像を、その最新の状況と言語構造的な解説を交えて提示することができた。

本稿の本論部分である 3 章から 5 章では、低地ドイツ語の動詞統語論についての個別の現象を扱った。ここでは、個々の現象に対して、経験的なデータに基づいた記述を行った上で、文法化という観点から独自の考察を加えている。3 章では低地ドイツ語の動詞である *doon* が不定詞を伴う *doon*-迂言形と呼ばれる構文を扱った。本稿では、*doon*-迂言形が用いられる要因を調べるため、低地ドイツ語の共時的コーパスを用いた調査、通時的コーパスを用いた調査、上部ドイツ語の迂言形との比較を行った。そして本稿では、低地ドイツ語の *doon*-迂言形が共時的に音韻・形態的な要因により使用されていることと、通時的に見て *doon*-迂言形がかつての動詞の接尾辞が担っていた機能を引き継いでいることを明らかにし、*doon*-迂言形の *doon* が接辞的性格を帯びていると結論付けた。

3 章で扱った *doon*-迂言形は、同形の迂言形が他の多くの西ゲルマン諸語・諸方言に見られることから、4 章では 3 章の議論を発展させる形で、西ゲルマン諸語の「不定詞＋tun」迂言形の特徴を記述することを試みた。標準語である標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の

迂言形の用法は、標準語の持つ強い言語規範の影響により制限されている一方で、低地ドイツ語の *doon*-迂言形をはじめとするドイツ語方言における迂言形は、多様な用法を持つ。例えば、過去形が残存している低地ドイツ語で時制表示の用法が発展し、接続法が残存している上部ドイツ語で接続法表示の用法が発達している。本稿では、西ゲルマン諸語の迂言形の用法が当該言語・方言の構造的特徴を反映しているという仮説を提示した。

5 章では、並列接続詞で結ばれた同じ時制、人称を示す動詞が、従属的な意味を表す低地ドイツ語の疑似並列を扱った。本稿ではこれまで実証的研究がほとんどなかった低地ドイツ語の疑似並列を、アンケートによる経験的調査と他言語の疑似並列との比較を通して記述した。その結果、低地ドイツ語の疑似並列は従属構造を有するアフリカーンス語とスウェーデン語の疑似並列と異なり並列構造を持ち、低地ドイツ語の疑似並列では、むしろ並列構造の多義性を背景として 2 つの動詞が結ばれ、意味的な従属構造を実現していることをテーゼとして主張した。

本稿の成果を踏まえた上で、動詞統語論にかかわるその他の現象を、アンケート・コーパス・インタヴューなどを用いて調査することにより、低地ドイツ語の動詞統語論の包括的な記述を行うことが可能となるだろう。その際、それらがどのようなステータスを有しているかを、文法化の観点から考察することが非常に重要になると考えられる。

参考文献

Abraham, Werner (2005): Präteritumschwund und das Aufkommen des analytischen Perfekts in den europäischen Sprachen. In: Eckhard Eggers et al. (Hrsg.): *Moderne Dialekte*. 115-134. Stuttgart: Steiner.

Abraham, Werner / Annette Fischer (1998): Das grammatische Optimalisierungsszenario von *tun* als Hilfsverb. In: Karin Donhauser / Ludwig M. Eichinger (Hrsg.): *Deutsche Grammatik - Thema in Variationen*. 35-47. Heidelberg: Winter.

Adler, Astrid et al. (2016): *Status und Gebrauch des Niederdeutschen 2016*. Mannheim: Institut für Deutsche Sprache.

ADS-Grenzfriedensbund e.V. (Hrsg.) (2016): *Im Grenzland zuhause*. Handewitt: Leupelt.

Arbatzat, Hartmut (2016): *Platt - dat Lehrbook: Ein Sprachkurs für Erwachsene*. Hamburg: Quickborn.

Ashtarany, Nicole et al. (2017^2): *Paul un Emma snackt Plattdüütsch*. Hamburg: Quickborn.

Bangma, Jelle (1992): *Wolkom! - Kursus Frysk ferstean en lêzen*. Ljouwert: Algemene Fryske Underrjocht Kommisje.

Bangma, Jelle et al. (1998): *Flotwei Frysk*. Ljouwert: Afûk.

Barbiers, Sjef et al. (2008): *Syntactische Atlas van de Nederlandse Dialecten - Deel II - Commentaar*. Amsterdam: Amsterdam University.

Berg, Kristian (2013): *Morphosyntax Nominaler Einheiten Im Niederdeutschen*. Heidelberg: Winter.

Bernhardt, J. (1903): Zur Syntax der gesprochenen Sprache. (Ein Versuch.). *Jahrbuch des Vereins für niederdeutsche Sprachforschung* 29. 1-25.

BfN (Bundesraat för Nedderdüütsch) (Hrsg.) (2014): *Chartasprache Niederdeutsch: Rechtliche Verpflichtungen, Umsetzungen und Perspektiven*. Bremen: Bundesraat för Nedderdüütsch.

Bock, Karl Nielsen (1933): *Niederdeutsch auf dänischem Substrat*. Kopenhagen/Marburg: Levin & Munksgaard/N. G. Elwert'sche Verlagsbuchhandlung.

Boysen, Sigrid (2011): Artikel 1. In: *Europäische Charta der Regional- oder Minderheitensprachen: Handkommentar*. 56-77. Zürich/St. Gallen: Nomos.

Braak, Ivo (1956): *Niederdeutsch in Schleswig-Holstein*. Kiel: Hirt.

Davis, Norman (ed.) (1971): *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*. London: Oxford University Press.

De Vos, Mark Andrew (2005): *The syntax of verbal pseudo-coordination in English and Afrikaans*. Ph. Thesis, University of Leiden.

Donaldson, Bruce C. (1993): *A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: de Gruyter.

Duden (1999): *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag.

Ehlers, Marianne et al. (2018): *Paul un Emma un ehr Frünnen*. Hamburg: Quickborn.

Elmentaler, Michael (2012): Plattdüütsch hüüt. Erhebungen zur niederdeutschen Syntax. In: Robert Langhanke et al. (Hrsg.): *Niederdeutsche Syntax*. 137-156. Hildesheim/Zürich/New York: Olms.

Elmentaler, Michael / Peter Rosenberg (2015): *Norddeutscher Sprachatlas (NOSA). Band 1: Regiolektale Sprachlagen*. Hildesheim/Zürich/New York: Olms.

Elmentaler, Michael / Peter Rosenberg (2022): *Norddeutscher Sprachatlas (NOSA). Band 2: Dialektale Sprachlagen*. Hildesheim/Zürich/New York: Olms.

Engel, Ulrich (1991[2] (1988)): *Deutsche Grammatik*. Heidelberg: Julius Groos.

Eroms, Hans-Werner (1984): Indikativische periphrastische Formen mit doã im Bairischen als Beispiel für latente und virulente syntaktische Regeln. In: Peter Wiesinger (Hrsg.): *Beiträge zur bairischen und ostfränkischen Dialektologie*. 123-135. Göppingen: Kümmerle.

Eroms, Hans-Werner (1998): Periphrastic tun in present-day Bavarian and other German dialects. In: Ingrid Tieken-Boon van Ostade et al. (Hrsg.): *DO in English, Dutch and German*. 139-157. Münster: Nodus.

Foerste, William (1957): Geschichte der niederdeutschen Mundarten. In: Stammler, Wolfgang (Hrsg.): *Deutsche Philologie im Aufriß*. Bd. 1. 2., überarb. Aufl. Sp. 1729-1898. Berlin: Schmidt.

Frank, Anne (2013): *Het Achterhuis*. Amsterdam: Prometheus.

Goltz, Reinhard (2013): BfN: Ein Themenaufriss. In: Bundesraat för Nedderdüütsch (Hrsg.): *Auf dem Stundenplan: Plattdeutsch*. 6-9. Leer: Schuster.

Graf, Jan (2007): *So snackt wi in de Probstee. Niederdeutsche Formenlehre - Heft I*. Passade: Plaggenhauer.

Grimm, Jacob / Wilhelm Grimm (1993): *Grimms Märchen Plattdüütsch vertellt*. übersetzt von Bolko Bullerdiek. Hamburg: Quickborn.

Grimm, Jacob / Wilhelm Grimm (1995): *Grimms weitere Märchen Plattdüütsch vertellt*. übersetzt von Bolko Bullerdiek. Hamburg: Quickborn.

Groth, Klaus (1876): *Sämtliche Werke*. Heide: Boyens & Co.

Haeseryn, Walter et al. (1997): *Algeneme Nederlandse Spraakkunst*. Groningen: Nijhoff.

Hesse, Andrea (2009): *Grammatikalisierung der Pseudokoordination im Norwegischen und in den anderen skandinavischen Sprachen*. Tübingen: Narr Francke Attempto.

Hiestermann, Heike / Katrin Konen-Witzel (2021): *Snacken Proten Kören:*

Plattdüütsch-Lehrbook för de SEK I. Hamburg: Quickborn.

Höder, Steffen (2012): Der is wieder bei und malt Karten. Niederdeutsche Syntax aus nordeuropäischer Sicht. In: Robert Langhanke et al. (Hrsg.): *Niederdeutsche Syntax*. 181-201. Hildesheim/Zürich/New York: Olms.

Hodler, Werner (1969): *Berndeutsche Syntax*. Bern: Francke.

Hopper, Paul J. / Elizabeth C. Traugott (2003[2] (1993)): *Grammaticalization*. New York: Cambridge University Press.

Jensen, Annemarie (2007): *So schnacken wi twischen Flensburg un Schleswig. Niederdeutsche Formenlehre - Heft II*. Krummbek: Plaggenhauer.

Jensen, Annemarie (2009): *So snacken wi in Nordfreesland. Niederdeutsche Formenlehre - Heft III*. Buxtehude: Plaggenhauer.

Jensen, Annemarie (2011): *So schnack wi in Dithmarschen. Niederdeutsche Formenlehre - Heft IV*. Buxtehude: Plaggenhauer.

Jensen, Annemarie (2022): *So schnackt wi op Fehmarn. Niederdeutsche Formenlehre - Heft V*. Lüneburg: Plaggenhauer.

Johannessen, Janne Bondi (1993): *Coordination*. Ph. Thesis, University of Oslo.

Josefsson, Gunlög (1991): Pseudocoordination - A VP + VP coordination. In: *Working papers in Scandinavian syntax* 47. 130-156.

覚知頌春 (2017): 「低地ドイツ語における doon-迂言形の特徴」『ドイツ文学』156. 99-117.

覚知頌春 (2018): 「西ゲルマン諸語における「不定詞＋tun」迂言形の特徴」『北海道大学独語独文学研究年報』44. 49-71.

Kakuchi, Nobuharu / Martin Wolf (2020): Dor hebb ik noch een Johr op de höhere Hannelsschool gahn - Eine Fallstudie zu den ostfriesischen Perfektauxiliaren bei wesen, gahn und lopen. *Korrespondenzblatt des*

Vereins für Niederdeutsche Sprachforschung 127. 26-40.

Keseling, Gisbert (1968): Periphrastische Verbformen im Niederdeutschen. In: *Jahrbuch des Vereins für niederdeutsche Sprachforschung* 98. 139-151.

Kinau, Rudolf (1973): *Bi uns an'n Diek*. Hamburg: Quickborn.

Kuteva, Tania (2001): *Auxiliation*. New York: Oxford University Press.

Lakoff, George (1986): Frame Semantic Control of the Coordinate Structure Constraint. In: *Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory* 22 (2). 152-167.

Lameli, Alfred (2016): Raumstrukturen im Niederdeutschen. Eine Re-Analyse der Wenkerdaten. In: *Jahrbuch des Vereins für niederdeutsche Sprachforschung* 139. 131-152.

Langenfeld, Christine (2011): Artikel 8. In: *Europäische Charta der Regional- oder Minderheitensprachen: Handkommentar*. 183-221. Zürich/St. Gallen: Nomos.

Langer, Nils (2001): *Linguistic Purism in Action - How auxiliary tun was stigmatized in Early New High German*. Berlin/New York: de Gruyter.

Lasch, Agathe (1974[2] (1914)): *Mittelniederdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

Lindow, Wolfgang et al. (1998): *Niederdeutsche Grammatik*. Leer: Schuster

Marti, Werner (1985): *Berndeutsche Grammatik*. Bern: Francke.

Merkle, Ludwig (1984[2] (1975)): *Bairische Grammatik*. München: Hugendubel.

Meyer, Gustav Friedrich (1983[2] (1923)): *Unsere plattdeutsche Muttersprache*. St. Peter-Ording: Lühr & Dircks.

Müller, Josef (1964): *Rheinisches Wörterbuch*. Bd. 8. Berlin: Klopp.

村上重子 (2003) 『接続詞』 (ドイツ語文法シリーズ 8). 東京: 大学書林.

Pinheiro-Weber, Ursula (2010): *Bärndütsch - Ein Lehr- und Lernbuch*. Bern: HEP.

Poggensee, Renate (2015) Mit twee Spraken rin in't Leven: Een Dag bi uns in'n Kinnergoorn. In: Bundesraat för Nedderdüütsch (Hrsg.): *Plattdüütsch in'n Kinnergoorn*. 40-41. Bremen: Bundesraat för Nedderdüütsch.

Ponelis, Fritz (1993): *The Development of Afrikaans*. Frankfurt/Berlin/Bern/New York/Paris/Wien: Peter Lang.

Proske, Nadine (2017): Perspektivierung von Handlungen und Zuschreibung von Intentionalität durch pseudokoordiniertes kommen. In: Arnulf Deppermann et al. (Hrsg.): *Verben im interaktiven Kontext. Bewegungsverben und mentale Verben im gesprochenen Deutsch*. 177-247. Tübingen: Narr Francke Attempto.

Reis, Marga (1993): Satzfügung und kommunikative Gewichtung. Zur Grammatik und Pragmatik von Neben- vs. Unterordnung am Beispiel ‚implikativer' *und*-Konstruktionen im Deutschen. In: Marga Reis (Hrsg.): *Wortstellung und Informationsstruktur*. 203-249. Tübingen: Niemeyer.

Reuter, Fritz (1996[4] (1859)): *Ut de Franzosentid*. Rostock: Hinstorff.

Richter, Dagmar (2011): Artikel 13. In: *Europäische Charta der Regional- oder Minderheitensprachen: Handkommentar*. 323-348. Zürich/St. Gallen: Nomos.

Rohdenburg, Günther (1986): Phonologisch und morphologisch bedingte Variation in der Verbalsyntax des Niederdeutschen. In: *Jahrbuch des Vereins für niederdeutsche Sprachforschung* 109. 86-117.

Rohdenburg, Günther (2002): Die Umschreibung finiter Verbformen mit doon 'tun' und die Frikativierung stammauslautender Plosive in nordniederdeutschen Mundarten. In: *North-Western European*

Language Evolution 40. 85-104.

Ross, John Robert (1967): *Constraints on variables in syntax*. Thesis MIT.

Rowling, Joanne K. (2000): *Harry Potter en die towenaar se steen*. übersetzt von Oosthuysen, J. Cape Town: Human & Rousseau.

Rowling, Joanne K. (2002): *Harry Potter und de Wunnersteen*. übersetzt von Hartmut Cyriacks / Peter Nissen. Kiel: Jung.

Saltveit, Laurits (1983): Syntax. In: Gerhard Cordes / Dieter Möhn (Hrsg.): *Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaft*. 279-333. Berlin: Schmidt.

Sanders, Willy (1982): *Sachsensprache, Hansesprache, Plattdeutsch*. Göttingen: Vandenhoeck.

Schanen, François / Jacqui Zimmer (2005): *1,2,3 Letzëbuergesch Grammaire - 1 Le Groupe Verbal*. Esch-sur-Alzette: Schortgen.

Schl.-Holst. Wb. = Mensing, Otto (Hrsg.) (1927-1935): *Schleswig-Holsteinisches Wörterbuch* (Volksausgabe). 5 Bde. Neumünster: Wachholtz

Schobinger, Viktor (2001[2] (1984)): *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger.

Schönenberger, Manuela / Zvi Penner (1995): Probing Swiss-German Clause Structure by means of the Placement of Verbal Expletives: Tun “do” Insertion and Verb Doubling. In: Zvi Penner (Hrsg.): *Topics in Swiss German Syntax*. 291-330. Bern: Lang.

Schwarz, Christian (2009): *Die 'tun'-Periphrase im Deutschen*. Saarbrücken: Dr. Müller.

柴崎隆 (2014):「アルザス語の助動詞 tüen/düen (dt. tun) の用法と機能」『ドイツ文学』150. 28-47.

Staatenbericht 2021 = Bundesministerium (Hrsg.) (2021) *Siebter Bericht der Bundesrepublik Deutschland gemäß Artikel 15 Absatz 1 der*

Europäischen Charta der Regional- oder Minderheitensprachen.

Stellmacher, Dieter (1983): Phonologie und Morphologie. In: Gerhard Cordes / Dieter Möhn (Hrsg.): *Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaft*. 238-278. Berlin: Schmidt.

Stellmacher, Dieter (2000[2] (1990)): *Niederdeutsche Sprache*. Berlin: Weidler.

Teleman, Ulf et al. (1999): *Svenska Akademiens grammatik 4. Satser och meningar*. Stockholm: Svenska Akademien.

Thies, Heinrich (2017[3] (2009)): *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholtz.

Van der Horst, Joop M. (1998): Doen in Old and Early Middle Dutch - A comparative approach. In: Ingrid Tieken-Boon van Ostade et al. (Hrsg.): *DO in English, Dutch and German*. 53-64. Münster: Nodus.

Vögeding, Joachim (1981): *Das Halbsuffix frei*. Tübingen: Narr.

Vogel, Ralf / Said Sahel (2013): *Einführung in die Morphologie des Deutschen*. Darmstadt: WBG.

Walser, Robert (1963): *Kleine Wanderung. Geschichten*. Stuttgart: Reclam.

Weber, Albert (1987): *Zürichdeutsche Grammatik*. Zürich: Rohr.

Weber, Thilo (2017): *Die TUN-Periphrase im Niederdeutschen*. Tübingen: Stauffenburg.

Weise, Oskar (1900): *Syntax der Altenburger Mundart*. Leipzig: Breitkopf & Härtel.

Weiss, Emil (1956): *TUN:MACHEN - Bezeichnungen für die kausative und die periphrastische Funktion im Deutschen bis um 1400*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

Wiklund, Anna-Lena (1996): Pseudocoordination is subordination. In: *Working papers in Scandinavian syntax* 58. 29-54.

Wiklund, Anna-Lena (2007): *The syntax of tenselessness*. Berlin/New York:

de Gruyter.

Wilts, Ommo (1993): *Friesische Formenlehre in Tabellen: Wiedingharde*. Husum: Matthiesen.

Wirrer, Jan (Hrsg.) (2000): *Minderheiten- und Regionalsprachen in Europa*. Wiesbaden: Westdeutscher Verlag.

Wolbersen, Harald (2016): *Der Sprachwechsel in Angeln im 19. Jahrhundert*. Hamburg: Dr. Kovač.

Zehetner, Ludwig (1985): *Das bairische Dialektbuch*. München: Beck.